1　共同研究

［概　要］

「共同研究」は，大学共同利用機関としての歴博が国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり，研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向をふまえて設定されてきた。共同研究の特徴は，1981 年に機関設置されて以来，歴史学，考古学，民俗学および関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本をおいてきた点にある。

「共同研究」は，「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「人間文化研究機構関連共同研究」の４つの柱から成り立っている。「基幹研究」は人間の営為と歴史に注目した大きな研究課題の下に学際的研究を目指すテーマを設定したものであり，「基盤研究」は館蔵資料の高度情報化や新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定したものである。この２つを「共同研究」の核とすれば，「開発型共同研究」は，任期付き助教への若手研究者育成を目的とする共同研究であり，今後に発展しうる萌芽的課題を設定することで，「共同研究」全体を実りあるものとする役割をも担っている。「人間文化研究機構関連共同研究」は人間文化研究機構が設定した課題に基づき歴博が主体となって取り組む共同研究であり，今年度より開始された。

本年度の「共同研究」は，「基幹研究」６課題，「基盤研究」15 課題，「開発型共同研究」２課題の計 23 課題について進めてきた。うち基幹研究１課題，基盤研究８課題が本年度よりスタートしたものである。以下，本年度新たにスタートした新規課題を中心に説明を行う。

【基幹研究】　基幹研究の一つである「民俗表象の形成に関する総合的研究」では，2012（平成 24）年度（2013 年３月）の展示リニューアルをめざして，近現代の技術と生業を対象とした「自然と技の生活誌」と地域開発と文化保存の関係を考察する「地域開発における文化の保存と利用」がすでに開始されているが，本年度からは近代以降の大衆向け商品の開発における伝統の発見と利用を検討する「歴史表象の形成と消費文化」が開始された。「新しい古代史像の樹立のための総合的研究」とともに，いずれも総合展示の開設およびリニューアルのための学術的基盤を高めるための共同研究という，歴博がめざす博物館型研究統合の実践例として位置付けられる。

【基盤研究】　本年度は科学的資料分析研究として「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究」が，高度歴史情報化研究として「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―」「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」「中世の技術と職人に関する総合的研究」「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」「古代における文字文化の形成過程の総合的研究」の６本が，博物館学的研究として「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」が開始された。

【開発型共同研究】　「縄文時代の人と植物の関係史」「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」の２本が新たに開始された。

【人間文化研究機構関連共同研究】　連携研究「「人間文化資源」の総合的研究」のブランチとして「正倉院文書の高度情報化研究」「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」の３課題が新たに開始された。日本関連在外資料の国際共同研究をめざす「日本関連在外資料調査研究」としては，「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19 世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」の２課題が開始された。さらに活動提案として「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」が開始された。

以上の研究のうち「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究」「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―」の３課題では，共同研究員の公募を行い，総計７名中６名を採用した。また共同研究経費の運用においては，選択と集中の観点から共同研究と連動した科研費の採択分を有効活用して，新たに基幹研究の重点化・海外交流事業の経費・公募研究員旅費の上乗せなどに充当するとともに，年度末の再配分も合わせおこない，効率的運用に努めた。

共同研究担当　山田　慎也・小倉　慈司

［共同研究活動一覧表］

研究課題	研究代表者（所属・氏名）	年度							
		20	21	22	23	24	25	26	27
基幹研究									
1　民俗表象の形成に関する総合的研究	本館・研究部　小池　淳一								
A．歴史表象の形成と消費文化	本館・研究部　岩淵　令治								
B．地域開発における文化の保存と利用	本館・研究部　青木　隆浩								
C．自然と技の生活誌	神奈川大学経済学部　安室　知								
2　新しい古代像樹立のための総合的研究	本館・研究部　藤尾　慎一郎								
A．旧石器時代の環境変動と人間生活	本館・研究部　西本　豊弘								
B．農耕社会の成立と展開－弥生時代像の再構築－	本館・研究部　藤尾　慎一郎								
C．新しい古代国家像のための基礎的研究	本館・研究部　広瀬　和雄								
基盤研究									
1　科学的資料分析研究									
A．日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究	本館・研究部　齋藤　努								
B．江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究	本館・研究部　小瀬戸　恵美								
2　総合的年代研究									
A．歴史・考古資料研究における高精度年代論	本館・研究部　坂本　稔								
B．建築と都市のアジア比較文化史	本館・研究部　玉井　哲雄								
3　高度歴史情報化研究									
A．洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究	本館・研究部　小島　道裕								
B．デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究	本館・研究部　鈴木　卓治								
C．高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究－『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に－	本館・研究部　関沢まゆみ								
D．民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究	本館・研究部　内田　順子								
E．【展示型】中近世における武士と武家の資料論的研究	本館・研究部　高橋　一樹								
F．【展示型】「地理写真」の資料化と活用	本館・研究部　青山　宏夫								
G．【展示型】中世の技術と職人に関する総合的研究	本館・研究部　村木　二郎								
H．【公募型】中世における儀礼テクストの綜合的研究-館蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として-	名古屋大学大学院文学研究科　阿部　泰郎								
I．【公募型】元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究	神戸大学大学院人文学研究科　藤田　裕嗣								
J．古代における文字文化形成過程の総合的研究	本館・研究部　小倉　慈司								
4　博物館学的研究									
A．近現代展示における歴史叙述の検証と再構築	本館・研究部　原山　浩介								
開発型共同研究									
1　縄文時代の人と植物の関係史	本館・研究部　工藤　雄一郎								
2　人の移動とその動態に関する民俗学的研究	本館・研究部　松田　睦彦								
人間文化研究機構関連共同研究									
1　連携研究　「人間文化資源」の総合的研究									
A．正倉院文書の高度情報化研究	本館・研究部　仁藤　敦史								
B．近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究	本館・研究部　青木　隆浩								
C．歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究	本館・研究部　内田　順子								
2　日本関連在外資料調査研究									
A．シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19 世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究	本館・研究部　久留島　浩								
B．近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究	国際日本文化研究センター　鈴木　貞美								
●南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究	本館・研究部　原山　浩介								
3　活動提案									
中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究-京都と江戸-	本館・研究部　小島　道裕								

［基幹研究］

（１）「民俗表象の形成に関する総合的研究」
（総括研究代表者　小池　淳一）

１．目　的

本共同研究は，新たな民俗展示の構築を目指し，次のような２つの大きな課題を掲げる。なお，これらの成果は，当館第４展示室（民俗展示）リニューアルとそれに関連したフォーラムに反映される。

近代以降，「歴史」や「文化」は，地域開発や農山漁村の生活，新商品の創出などの過程で，さまざまなネットワークを通して価値が再発見されてきた。本研究では，こうした価値の再発見と，それによって生み出されるものを「民俗表象」ととらえ，例えば国家や地域社会，企業，研究者，大衆，個人，国際社会などが，いかに関わり合いながらそれらを作り出しているのか明らかにすることを目的とする。

Ａ班では，「流行の創出」の過程に，歴史学・民俗学・美術史学などがどのように関わってきたのか，また，生み出された「流行」が，どのように地域社会に展開していくのか明らかにしていくことを主たる目的とする。Ｂ班では，大規模な自然の開発と，景観や文化の保存を目的とする様々な事業との関連において文化の資源化の検討を行うほか，そうした大規模な文化の資源化と，様々な祭礼や行事の変化との相互関係の有無についても検討する。Ｃ班では，生業の現場における自然と人間が織り成す知と技との関係を主題とし，その社会的・歴史的課題に取り組む。

Ａ　「歴史表象の形成と消費文化」2010～2012 年度
（研究代表者　岩淵　令治）

１．目　的

近代以降における大衆向け商品の開発には，流行の創出が不可欠であるが，その中で伝統的なものに新たな価値を見いだし，過去の素材を利用する手法がある。その過程では，しばしば歴史学や民俗学，美術史学などの研究成果が取り込まれてきた。

例えば，「江戸」の表象は，近代化論における積極的な江戸時代の評価（「江戸時代の遺産」），バブル期の江戸東京学ブームから，近年の「江戸しぐさ」，江戸検定や日本橋地域などの都心部再開発における資源として様々に利用されている。また，博覧会や物産展は各地の名産品を生み出す場となっているが，それは歴史や民俗の理想型を示すことにもつながっている。あるいは，入学式と節句を典型として，家族の必需品と考えられているものが，実は企業によるマーケティング活動から生み出された新しい「伝統」であることが少なくない。そこで，本共同研究では，近代以降の商品開発にかかる伝統の創出と礼賛を，とくに学問との関わりから分析する。

研究対象としては，まず江戸の表象をとりあげる。「発見」される「伝統」の多くは，「基層文化」としての原始・古代と，「都市文化」としての「江戸」であろう。とくに「江戸」は，明るい庶民とその文化の誕生（鎖国→いわば第二の「国風文化」）の表象として頻繁にとりあげられてきた。しかし，こうした研究は，近代化論における江戸時代賛美（『江戸時代と近代化』）への批判が若干みられるものの，本格的に取り組まれ

てはいない。したがって，その一つ一つを時代背景と合わせて丹念にみていくことが不可欠である。そこで，「江戸」表象の原点として，大正期の「江戸趣味」の誕生とその大衆化に着目し，三越百貨店における「流行」の発明の過程とその方法を検討する。三越は，日清・日露戦後に「元禄模様」の流行を生み出し，さらに「伝統」的な要素もとりいれながら子供の「玩具」を商品化する。これを支えたのが，三越が「学俗共同」とうたう研究者・文学者・ジャーナリスト等からなる「流行研究会」の活動であった。そこで，都市史・美術史・経済史・民俗学・人類学・音楽史等から，当時の学問状況にてらしながら流行研究会の活動を多角的に検討することにより，①三越の商品化の過程でどのような「江戸」が発見されたのか，②そこに学問がどのようにかかわったのか，という点を明らかにする。

さらに，このような伝統を模した大衆文化の受容と展開が地方にもたらした影響について，産業史や家族史との関わりから検討する。例えば，名産品の創出は消費文化を変化させ，そのために産地間の競争関係をも変えてきた。また，年中行事や人生儀礼は，ある特定の階層や地域に限られていたものが商品化によって全国に展開し，「伝統」として各家庭に浸透していった。その背景としては，全国的に画一化された理想的な家族像が創出されてきたことがある。これらのような消費文化や儀礼文化，家族生活と商品化との関わりについては，日常にあふれていることであるが，これまであまり研究の対象になってこなかった。そこで，大衆文化の受容と展開については，地方での現地調査をもとに，現代を含めた実態の解明に取り組む。

２．今年度の研究目的

初年度となる今年度は，研究発表を通じ，まず共同研究者の問題意識の共有を図る。また，共同研究にかかわる総合展示第４展示室のリニューアル案，および第６展示室の展示について議論する。

さらに，江戸表象研究の基本資料となる，三越のＰＲ誌（『流行』・『時好』等）のデジタル化および共有化をはかる。また，大衆文化の受容と展開について，長野県須坂市の大商人田中本家（田中本家博物館）に伝えられるモノ資料および文書資料を調査・検討する。

３．今年度の研究経過

計４回の研究会，および３回の資料調査を行った。また，百貨店のＰＲ紙やパンフレット，および明治・大正期の江戸趣味の形成にかかわった三村竹清らに関する資料を収集した。

【研究会】

第１回研究会　2010 年６月 19～20 日

　岩淵令治　主旨説明

　山田　慎也　第四室リニューアル計画について

　（参加者全員）　各共同研究員の研究紹介

　神野　由紀「初期百貨店における趣味と消費－三越百貨店の文化活動を中心に－」

第２回研究会　2010 年８月 16 日

　原山浩介　第６室現代展示（展示説明）

　青木俊也「戦後生活再現展示の動向における現代史展示「日本住宅公団団地実物大再現」」

　金子淳（ゲストスピーカー　静岡大学）「博物館における昭和 30 年代表象」

　青木隆浩「第４展示室「家族の変容」」

第３回研究会　2010 年 12 月 18 日

　久留島浩・岩淵令治　企画展示「武士とはなにか」（展示説明）

岩淵令治「旧幕臣戸川残花と元禄研究会」

滝口正哉（ゲストスピーカー　千代田区立四番町歴史民俗資料館）

「南北会の運営と活動について」

第４回研究会　2011 年３月５～６日

調査：結城紬関係（結城市伝統工芸館，つむぎの館），益子焼関係（窯元つかもと，益子参考館，益子の陶器市）

報告：濱田琢司「「民芸」思想の発生と，普及における「消費の場」の役割」

【資料調査（田中本家博物館調査）】

予備調査　2010 年６月 28 日

資料目録の収集，調査方法についての相談

第１回　　2010 年 12 月 11 日～13 日

・服飾関係史料の調査・撮影

・近代の家族写真の調査・スキャン

・文書調査　　整理分の関係資料の撮影・未整理の書簡の概況調査

第２回　　2011 年１月 29 日～31 日

・大正期の雛人形調査

・文書調査　未整理の書簡の整理

・写真カードの一部撮影

４．今年度の研究成果

第１回研究会では，共同研究の前提として，国立歴史民俗博物館側より共同研究の主旨と総合展示第４室リニューアル計画の説明を行い，三越の流行創出について神野氏が研究報告を行った。そして，各研究員がこれまでの研究と本共同研究とのかかわりを述べ，今後の計画について議論した。

第２回研究会では，歴史の商品化という点で，近年大きく展開している「昭和レトロブーム」をテーマとした。総合展示第６室の高度成長のコーナーをみたうえで，ゲストスピーカーの金子淳氏にも加わってもらい，とくに展示とのかかわりで「昭和レトロブーム」の現状と問題点を検討した。その結果，「昭和ノスタルジー展示」が，誰のものでもない「架空の過去」を設定し，懐かしくて楽しい過去の表象であること，そしてこの展示が来館者の癒しや楽しみという欲求と，入館者増や近現代史展示のいわば逃げ道という博物館側の意識から形成されていることが共有された。また，国立歴史民俗博物館総合展示第６展示室の「日本住宅公団団地実物大再現」もこうした表象にとらえられる可能性が指摘された。

第３回研究会では，江戸趣味の形成に関わった旧幕臣をテーマにとりあげた。まず，企画展示「武士とはなにか」を素材に「武士」の表象の問題について意見を交わした。そのうえで，ゲストスピーカーの滝口正哉氏を迎え，三越の元禄研究会の立ちあげにかかわった戸川残花と，元江戸町奉行所与力・同心の親睦会である「南北会」の中心人物であった原胤昭について研究報告を行った。その結果，旧幕臣という存在が，江戸趣味の形成や普及に大きくかかわっていたことが確認できた。

第４回研究会では，名産品の創出と「伝統」化について，結城紬と益子焼をとりあげた。実際に，現地で製品や窯を見学してそれぞれの技術を知るともに，こうした「伝統産業」の商品化とその現状を実見し，また民芸運動の展開と百貨店の関係という新たな課題を得ることができた。

まだ初年度であり，論点が多出している段階であるが，展示と有機的な結びつきをもって研究会をすすめることができたことは，大きな成果である。今後の第５・６展示室や進行中の第４展示室のリニューアルに生かすことのできる成果が得られたといえよう。また，田中本家博物館の資料については厖大であるため，調査の段階にある。しかしながら，百貨店で購入した三越関係の実物資料がきわめて良好な状態で残っているだけでなく，地元での購買行動にかかわる文書史料も確認しえた。したがって，大衆文化の受容と展開という点で，田中家の消費全体の中での議論が可能であることが判明した。来年度以降，調査とともに分析をすすめたい。

５．共同研究員（◎は研究代表者，◎は研究副代表者）

青木　俊也	松戸市立博物館	神野　由紀	関東学院大学人間環境学部
瀬崎　圭二	広島大学大学院文学研究科	玉蟲　敏子	武蔵野美術大学造形学部
谷川　章雄	早稲田大学人間科学研究部	長沢　利明	東京理科大学
濱田　琢司	南山大学人文学部	藤岡　里圭	大阪経済大学経営学部
丸山　伸彦	武蔵大学人文学部	満薗　　勇	日本学術振興会
青木　隆浩	本館研究部民俗研究系・准教授	◎岩淵　令治	本館研究部歴史研究系・准教授
内田　順子	本館研究部民俗研究系・准教授	久留島　浩	本館研究部歴史研究系・教授
小池　淳一	本館研究部民俗研究系・准教授	常光　　徹	本館研究部民俗研究系・教授
原山　浩介	本館研究部歴史研究系・助教	○山田　慎也	本館研究部民俗研究系・准教授

〔ゲストスピーカー〕

金子　　淳　　静岡大学

滝口　正哉　　千代田区立四番町歴史民俗資料館

B　「地域開発における文化の保存と利用」2009～2011年度
（研究代表者　青木　隆浩）

１．目　的

地域開発と文化の保存は，従来相反することであった。経験的にも，地域開発は文化を大きく変容させ，反対に文化は開発の遅れた地域ほど古くからのものが残存すると考えられてきた。ところが，ホブズボウムらが「創られた伝統」という概念を用いて，一般に古いと考えられているものが案外新しく創られたものであることに注意を促し，さらに彼らの批判が皮肉にもその議論の前提となっていた本質主義の限界を顕在化させたことにより，両者の関係はますます曖昧に捉えられるようになってきている。実際にも，地域開発をきっかけとした文化の保存，反対に文化を保存するための地域開発が，とくに経済難の深刻な周辺地域で行われている。

前者はまず，ダムや空港の建設を典型とした大規模開発において，強制的に消滅を迫られる地域独自の文化をどのような手段で残すかという問題と関わる。これについては，単なる記録保存を目的とするものから，新たな観光資源の創出に至るまで，様々なパターンが存在する。例えば，ダム開発は地域外からの労働者と金銭の流入を招き，地域社会を大きく変えてしまうため，水没する集落にとどまらず，しばしばその周辺地域にまで記録を残すことになる。このような場合に，国や都道府県を巻き込んだ大がかりな文化の保存活動

が実施されやすい。一方，大規模開発から取り残された地域，あるいは開発事業が終わってしまった地域では，集落を維持するための数少ない選択肢の中から観光開発への道を選び，そのためにしばしば文化の利用と創造をおこなってきた。既存研究では，結果として生じた文化の保存と変化に注目することはあっても，それらを開発との関わりから検討する視点に乏しかった。そこで，本研究会では文化の保存と利用，さらにはその過程で生じる変化について，開発との関わりからより包括的な調査・研究を試みる。

後者も前者と不可分の関係にあるが，より直接的には文化行政の変化と絡んでいる。もともと文化財は面的ではなく点的な対象のうち，特に貴重なものを現状保存することを目的としていた。ところが，点的な保存をしたところで，その周辺の開発が進んでしまえば，結果的に景観が阻害され，地域らしさを維持できないという事例が多発した。そこで，文化財保護行政は，より広い範囲での文化財指定を可能とするため，重要伝統的建造物群保存地区から文化的景観，またそれを保存するための景観法へと進んでいった。しかし，ここで経済的困難に直面しているが故に失われつつある景観を，文化行政の手法で如何に保存するかという点が大きな問題になった。基本的にこれは不可能なことであるが，現状ではファサードなどの工学的措置によって部分的に試行されている。さらには，河川や田園に対しても農業工学的な復元技術が開発されつつある。これらの実態から，文化行政は現状保存から開発による保存へと大きく転換したといってよい。だが，工学的な景観保全は地域の生産や生活の機能を経済的に解決できず，したがって気休め程度の対策にしかならない。既存研究では，このような文化財行政に対して批判を続けてきたが，それでも文化財保護の対象が拡大されつつある背景やその結果として起きている文化ないし生活の変化については,検討が不十分である。そこで，本研究会では，文化の保存を目的とした開発が行われる地域的な背景と，その結果として生じつつある文化ないし生活の変化について現状把握することを第２の目的とする。

２．今年度の研究計画

今年度の本共同研究会では，①大規模開発に伴う環境と環境利用の変化，②歴史的変化と観光化に伴う景観と文化の価値変化，③自然保護をめぐる価値観の違いと生態系への影響にあらためて大きな関心が集まった。これらの問題関心に対し，22 年度はこれまで重視してきたダム建設や炭坑の影響に加え，同じく大規模開発を伴ったその他の近代化遺産，景観を一瞬にして変えた戦争の遺跡，重要伝統的建造物群保存地区から文化的景観へと保護の対象範囲を拡大してきた文化財行政の絡み，知床・白神山地・屋久島といった世界自然遺産登録地域における鳥獣保護区指定の影響と生態系の変化などをより詳しく調査していきたい。

また，環境・景観のみならず，地域おこしとして行われている芸能や宗教的な観光などについても随時調査を進めていく。対象としては，各地のイベント的な祭りや日光，浅草，四国遍路といった観光化された宗教空間などを予定している。

なお，研究会は年３，４回開催する予定である。研究会ごとに大まかなテーマを設定し，それに合わせてゲストスピーカーを招き，議論を活発化させていきたい。

３．今年度の研究経過

第５回研究会　平成 22 年６月 12 日（土）・13 日（日）　場所：歴博

報告：西村　明（鹿児島大学，ゲストスピーカー）「長崎原爆の慰霊について」，山本　理佳「大和ミュージアム設立を契機とする広島における観光空間の変容－被爆都市広島と軍事都市呉－」, 丸山　泰明「聖地・靖国神社の戦後史」

第６回研究会　平成 22 年８月 21 日（土）～24 日（火）　場所：福岡・長崎

講演：清水　憲一（九州国際大学）「北九州の近代化産業遺産をめぐる現状と課題」

調査：田川市石炭・歴史博物館，直方市石炭記念館，宮若市石炭記念館，いのちのたび博物館，新日本製鐵株式会社八幡製鉄所，軍艦島，各地炭坑跡，炭住など

第７回研究会　平成 22 年 12 月 22 日（水）～24 日（金）　場所：北海道白老町・釧路市

報告：野本　正博「白老のアイヌ観光と博物館」

講演：平澤　隆二（阿寒アイヌ工芸協同組合）「阿寒湖畔におけるアイヌ観光の実践活動」

調査：アイヌ民族博物館，丹頂の里，阿寒湖畔エコミュージアムセンター，アイヌ古式舞踊の見学，アイヌ民族の講演

第８回研究会　平成 23 年２月 26 日（土）・27 日（日）　場所：歴博

報告：松尾恒一「夏季の都市祭礼と熱狂，伝承と現在－能登半島宇出津『あばれ祭り』を考える－」，川村清志「ポストモダンの民俗芸能－『ＹＯＳＡＫＯＩソーラン』と『じゃんとこいむぎや』」

講演：澤井　真代（法政大学沖縄文化研究所，研究員）「地域開発と儀礼文化実践の交錯点－八重山諸島石垣島川平の事例－」

調査：白神山地における狩猟採集活動，屋久島の工芸，岩手県遠野市における遠野物語の観光化，四国遍路の観光化と世界遺産登録推進運動，五島列島における世界遺産登録推進運動など

今年度も研究会ごとに共通テーマを設定して，討論や調査をおこなった。第５回研究会では，戦争遺跡をテーマにし，観光資源化をめぐる長崎と広島の比較を中心に議論した。第６回研究会では，北九州の近代化遺産を世界遺産に登録する運動を進めている清水憲一氏からその概要について講演していただいた後，それに関連する諸施設で調査をおこなった。第７回研究会は，アイヌ民族の観光化に関する白老と阿寒での歴史と現在の実践について話をうかがった後，現地調査をおこなった。第８回研究会では芸能・祭礼をテーマとし，宇出津のあばれ祭りの展示目的とよさこいソーランの他地域への波及，観光開発が進む中での石垣島川平集落における伝統的な儀礼の継承などについて議論をおこなった。

４．今年度の研究成果

まず，戦争遺跡については，長崎市が広島市の動向を意識しながら，施設整備やイベント等を実施していることが確認できた。一方で，両者は戦争遺跡に対する意識が異なっており，そのことが観光業のあり方や平和学習への取り組み方などに影響を与えていた。

近代化遺産をテーマとした第６回研究会では，「九州・山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録推進運動における現状や諸問題について，現場に関わっている清水憲一氏から話をうかがった後，各地の炭坑資料館や炭坑跡，炭住，新日本製鐵株式会社八幡製鉄所，軍艦島などの現地調査を行い，共同研究員の間で今後の課題を共有化した。

また，同じく世界遺産登録推進運動を進めている四国遍路や五島列島についても比較検討のために調査をおこなった。その結果，同じ遺産をテーマにしていても対象地域が広域であるがために，観光化の進展に温度差があることを確認した。

アイヌ民族に関しては，二大観光地である白老と阿寒を対象にして議論をおこなった。白老については，ごく少数のアイヌが観光化に携わり，民族イメージを形成したことが確認された。一方，阿寒については，伝統的な儀礼や工芸を続けていく上での課題が検討された。

芸能・祭礼をテーマとした第８回研究会では，宇出津のあばれ祭りを事例とした祭礼の暴力性と，札幌の

よさこいソーランや五箇山のじゃんとこいむぎやを事例とした類似するイベントの地域的な広がりについて，それぞれ映像を使っての成果報告が得られた。また，石垣島川平地区は八重山諸島有数の観光地であるが，その開発下において伝統的な儀礼が続けられつつも少しずつ変化していることが確認された。

その他，戦争遺跡の観光資源化や炭坑開発，八幡製鉄所の変遷などについて，写真や絵葉書，ガイドブック，調査報告書等の資料を収集し，生活や景観の変化について分析をおこなった。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

浅川　泰宏　埼玉県立大学保健医療福祉学部
川村　清志　札幌大学文化学部
野本　正博　アイヌ民族博物館
山本　理佳　青山学院女子短期大学
岩淵　令治　本館研究部・准教授
小池　淳一　本館研究部・准教授
柴崎　茂光　本館研究部・准教授
松尾　恒一　本館研究部・教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
金行　信輔　千葉大学工学部
高橋　晋一　徳島大学総合科学部
宮地　英敏　九州大学附属図書館付設記録資料館
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授
○内田　順子　本館研究部・准教授
重信　幸彦　本館研究部・客員教授
葉山　　茂　本館研究部・機関研究員
丸山　泰明　本館研究部・特任助教

〔リサーチ・アシスタント〕
城石　梨奈　お茶の水女子大学・大学院生

〔ゲストスピーカー〕
西村　　明　鹿児島大学法文学部

〔講演者〕
清水　憲一　九州国際大学
澤井　真代　法政大学沖縄文化研究所
平澤　隆二　阿寒アイヌ工芸協同組合

C　「自然と技の生活誌」　2008～2010 年度
（代表研究者　安室　知）

１．研究の目的

人は「生きるための方法」として，直接的であれ間接的であれ，自然と対峙し，その関係性のなかで生業を営んできた。この自然と人の間を媒介するのが技術ということになるが，その基盤をなすのは豊に蓄積された自然をめぐる民俗知識である。

本研究において第一に着目する点は，列島における生業の技術である。生業の技術とは，道具（機械）と身体的技能および生態的技能の総和であるという観点から，とくに身体的技能と生態的技能に焦点をあわせて，民俗知識（自然知・暗黙知）の総体とその構造を明らかにしたい。

また，生業として取り上げる対象は農業，漁業，林業，狩猟採集，都市型生業および交通・交易など多岐におよぶが，生業の技術に支えられる生活を，生業複合という高次の技術段階から列島の生業文化を捉えなおすことが，第二の着目点となる。

一般に人の生活は進化史的な理解をされてきたが，それは技術のうち道具（機械）の発達に注目した観点

であり，実態は道具の進歩と身体的技能および生態的技能は反比例の関係にあるのではないかというのが，本研究の基本的なアイディアである。たとえば，近世農書や現在の生業技術からうかがうことのできる近世の生業は,身体的技能や生態的技能は,工業技術化の進んだ現代農業より高いレベルにあった可能性もある。したがって，生業技術の変遷として，近世末・昭和初期・現代に時間軸を設定して技術の連続性と非連続性を明らかにする。これが第三の着目点である。

そして「生きていく方法」としての生業活動を突き動かすのは，人の生活を包含する社会性である。従来，人の生業活動における社会的な側面はあまり重視されてこなかった。生産の場である山や海などの所有関係には生業活動との関連でとくに注目したい。つまり親族構造や社会関係などを技術の社会知としてとらえ，それらの運用が技術の効率にどのように関連するか考察することを第四の着目点としたい。

以上の研究を通して新たな生活環境史の構築を構想する。そして，それをもって，総合展示第４室（民俗）リニューアルにおける「生活世界における生業と技術」の展示研究および展示資料収集を推進することを本研究の主な成果としたい。

２．今年度の研究目的

2010 年度は，2009 年度に引き続き，海・山・里・町に展開する生業技術（とくに自然と対峙し自然を資源とする環境利用の仕方）について，共同研究メンバーの提示するフィールド・データを中心に検討を進める。また，それとともに，諸生業がどのように選択され組み合わされるかによって「生きるための方法」となりえるのか，それについて列島各地の多様な複合のあり方とその時系列に沿った変遷の具体像を探る。そのうえで，生活誌が人と自然の関係を探るための方法として有効であるか否かについて検討していく。

さらに，2010 年度は最終年度に当たるため，それまでにおこなわれた討論およびフィールドワークの成果をまとめ，方法論としての「生活環境史」を提言する。また，本共同研究は総合展示第４室リニューアルに向けた展示研究としても機能させる。

３．今年度の研究経過

〇第 1 回共同研究会

・日時　2010 年８月６日（金）

・場所　神奈川大学および日本常民文化研究所

・研究発表

　１．越智　信也（ゲストスピーカー：日本常民文化研究所）

　　「日本常民文化研究所の海民史研究　－漁業制度史料の成立とその背景－」

　２．藤川　美代子（神奈川大学大学院・大学院生）

　　「端午節の儀礼にみる水上生活者たちの所属意識　－中国福建省九龍江河口に暮らす連家船漁民の事例から－」

　３．厚　香苗（立教大学・兼任講師）

　　「20 世紀前半に作成された記録類からみる『家船の村』」

・巡検調査

日本常民文化研究所にて漁業制度資料（筆写稿本）の熟覧

〇第２回共同研究会

日時　2011 年２月５日（土）～６日（日）

場所　新潟市歴史博物館

・研究発表

１．中西　遼太郎（共同研究員）

「明治期の関東地方における牛馬耕の普及について—茨城県の事例を中心に—」

２．岩野　邦康（ゲストスピーカー：新潟市歴史博物館）

「蒲原低湿地帯の生活技術--木造和船と稲作技術--」

３．新潟市歴史博物館の展示参観（展示解説：岩野邦康）

・巡検調査

１．新潟市立ビュー福島潟

２．福島潟

３．新潟県立環境と人間のふれあい館(新潟水俣病資料館)

４．北方文化博物館(豪農の館)

４．今年度の研究成果

2010 年度は，海・山・里・町に展開する生業技術のうち，漁撈技術と農耕技術に焦点を当て，とくに汽水域や低湿地といった通常は人が暮らしづらいとされている環境において，人がどのように自然に向き合い，またそれを利用して暮らしを成り立たせていたかについて現地調査を中心に検討した。具体的には，河川河口部の汽水域において船上で生活する人びとと水位変動の大きい潟湖周辺の低湿地に暮らす人びとに焦点を絞り，農耕や漁撈といった単一の生業に特化することのない複合的な生計のいとなみの実態と，汽水や低湿地という自然環境を逆手にとって多様な生業を生計維持の方途に取り込む人びとの知恵(生きるための方法)を多方面から検討することができた。また，河口部や潟湖沿岸といういわば無主の空間に注目したことで，そうした空間を利用することによって引き起こされる葛藤など社会関係を調整するための社会知についても考察することができた。

５．３年間を通じての成果

自然を資源とする生業の研究は，民俗学では比較的古くからおこなわれてきたが，その多くは聞き書き調査による資料化の段階をでていない。また，他の歴史学分野においては，生態人類学のような分野を除くと，生業という研究概念自体が新しく，資料化以前の段階であるといってよい。とくに，自然利用をめぐる民俗知識や民俗技術の研究は緒についたばかりである。それは，民俗学をはじめとする従来からの歴史学分野においては，生業研究の多くが稲作，畑作，漁撈，狩猟というようにそれぞれ独立したものとして調査・記録化されてきたためである。また，そうした民俗知識や民俗技術の多くが身体技法などの暗黙知として体得され継承されていくため，遺物や文献および聞き書きに頼る従来の研究法では接近が難しかったことによる。

そうした現状を打破し，本共同研究では民俗学・考古学・文献史学の研究手法に加え，人びとの暮らしをありのままに記述する「生活誌」の手法を重視し，また実際の生業者に対する観察調査や参与調査を重視する研究者の参加を積極的に求めた。

その結果，従来，稲作，畑作，漁撈，狩猟というように技術がそれぞれ独立したものとして進められてきた生業研究を，本共同研究では複合生業論の視点に立つことで「生きてゆく方法」として総合化することができた。また，生活誌の手法を導入することで，生業をそれのみで解釈せず，生活全般のなかに位置づけることが可能となった。さらには，以上の研究に歴史性を加味することで，「生活環境史」の構築を目指した。

ただし，この点については本共同研究ではその端緒を開いたに過ぎず，今後のさらなる展開が求められる。

　また，現代的課題にどのように寄与するかという点に関していうと，近年は環境倫理学や環境社会学，さらにはより実学的な農学の分野においても，環境保全のあり方を学ぶものとして，生活のなかで培われてきた民俗知識や民俗技術の重要性が指摘されている。そのため，本共同研究において，社会科学など実学分野の研究者を共同研究メンバーとして協業を進めたことで，現代社会に対していかに歴史科学が寄与できるかをある程度提示することができた。

　最後に，歴博の展示との関係でいうと，本共同研究における問題意識の発端は，共同研究「環境利用システムの多様性と生活世界」（2001～2003 年，研究代表：安室知）および「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究」（2004～2006 年，研究代表：安室知）にある。それは生活世界における生業の多様さとそれをめぐる技術・技能のあり方をさらに深く追及し，かつ歴博における民俗展示としていかに表象するかを検討するものであった。したがって，本共同研究は 2012 年度に予定されている総合展示リニューアルの研究プロジェクトとも有機的な関係をもって進められ，本共同研究の成果は，第４室民俗展示における「生活世界の生業と技術」（仮）コーナーの展示について，それを理論的に支えるものとなっている。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

池田　哲夫	新潟大学大学院	川島　秀一	リアス・アーク美術館
篠原　　徹	滋賀県立琵琶湖博物館	高橋　美貴	東京農工大学大学院
田口　洋美	東北芸術工科大学芸術学部	中井　精一	富山大学人文学部
中西僚太郎	筑波大学大学院	山下　裕作	熊本大学大学院
山本　志乃	旅の文化研究所	常光　　徹	本館・研究部
西谷　　大	本館・研究部	小池　淳一	本館・研究部
内田　順子	本館・研究部	松田　睦彦	本館・研究部
○吉村　郊子	本館・研究部	◎安室　　知	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

［リサーチアシスタント］

2008 年度：渡部　鮎美　総合研究大学院大学・大学院生

2009 年度：岡田　翔平　神奈川大学大学院・大学院生

2010 年度：高倉　健一　神奈川大学大学院・大学院生

（２）「新しい古代像樹立のための総合的研究」2009～2011 年度
（総括研究代表者　藤尾　慎一郎）

１．目　的

　歴博がＡＭＳ−炭素 14 年代測定によって得た新しい年代観をもとに日本古代史を再構築して，第１室総合展示リニューアル開設のための学問的基盤とする基幹研究で，対象とする時代ごとに三つのブランチがある。

　Ａ　旧石器時代の環境変動と人間生活（３万年前ー前 10 世紀）西本豊弘研究代表

関東地方における約３万年前の後期旧石器時代から縄文時代にかけての環境変動と旧石器文化の変化について研究する。

　Ｂ　農耕社会の成立と展開−弥生時代像の再構築−（前 10ー後３世紀）藤尾慎一郎研究代表

水田稲作の起源が500年以上遡ったことによって，ほぼ倍増した弥生時代の存続期間。室町から現代に匹敵する700年間にわたって続いた，中の文化（九州・四国・本州）における縄文文化と弥生文化共存の意味を生業・社会構造・祭祀の分析によって明らかにし，日本古代史を世界の人類史の中に位置づける。

Ｃ　新しい古代国家像のための基礎的研究（後４ー８世紀）広瀬和雄研究代表

律令国家の形成過程として位置づけられていた古墳時代を，もう一つの古代国家として認識し，記紀に縛られない新しい古墳時代像を考古学的に明らかにする。

本研究の３つのブランチは，いずれも来るべき総合展示「第１室−原始−」のリニューアルを目標に設定されており，３年間の共同研究の成果を国立歴史民俗博物館研究報告書にまとめたものを学問的根拠として展示を行うという，本館の新しい理念である「博物館型研究統合」の実践例として位置づけられている。

２．研究成果

Ａ班は西本研究代表が採った科学研究費補助金Ａ「霞ヶ浦沿岸花室川流域の旧石器文化の研究」によって１月に茨城県花前川遺跡の発掘調査をおこなった。この遺跡からは旧石器時代後期のバイソンやナウマン象などの化石骨が以前より表採されているので，洪積世動物群と後期旧石器との共伴が期待されたが，今年度の発掘でも植物化石が見つかった。現在，樹種同定と炭素14年代測定がおこなわれている。来年度は地点を変えて発掘する予定である。

Ｂ班は，４回の共同研究と40点あまりの炭素14年代測定と同位体分析をおこなった。共同研究会は３回を歴博でＢ班単独で行い，１回は韓国京畿道，江原道で行った。今年度は第２年目で，共同研究員がこれまでおこなってきた自身の研究の紹介が一巡したので，研究代表者の指針をもとに，報告書作成のための準備を進めていく予定である。またあらたに２名の共同研究員を追加した。

Ｃ班は，４回の研究会を行い，内１回は仙台で，北限の古墳文化と南限の続縄文文化との混在状況を見学して回り，地元の研究者との合同研究会を行った。また３月にはＢ班と合同研究会を行った。Ｃ班もまだ１年目と言うことで発表が一巡していないので，2010年度にはいってから本格的に始動する予定である。

Ａ　「旧石器時代の環境変動と人間生活」2009～2011年度
（研究代表者　西本　豊弘）

１．目　的

この研究の目的は，茨城県の霞ケ浦にそそぐ花室川流域が約３万年前の旧石器時代の遺跡群であり，この地域でナウマンゾウやバイソンなどの狩猟がおこなわれたことを明らかにすることである。そして，縄文時代へどのように受け継がれていったのか検討することである。

２．今年度の研究目的

昨年度に発掘したＮ地点出土の木材の樹種同定と年代測定を行い，花室川の植生環境を復元することと，動物骨と石器を伴うことを証明するために発掘調査を実施することである。

３．研究経過

まず2009年度に行った花室川左岸のＮ地点の発掘調査で出土した植物遺体の樹種同定と炭素14による年代測定を行った。その結果，この地点では約４万年前から４万５千年前にヤマザクラやカエデなどが生息する環境であったことが明らかとなった。その時期はヴルム氷期の中の亜間氷期と推定される。これらの成果

は，バイソンやトナカイの年代測定結果とともに2010年５月に行われた考古学協会でポスター発表した。

2010年度の発掘調査は花室川の永田橋の上手の左岸河川敷を発掘した。しかし，この地点は約２万年前の川の流心部と推測され，木材も少なく動物骨や石器は発見できなかった。

４．研究成果

これまでの研究活動で，花室川の堆積物は約４万５千年前のヴルム氷期の中の亜間氷期の温かい時期が含まれており，その頃にナウマンゾウが分布していたと推測される。その後約３万年から２万年前の氷期にはトウヒ類などが多くなり，バイオンやトナカイが分布したと推測される。

５．今後の課題

発掘調査によって石器と動物骨が共存することを確認することである。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は副代表者）

安藤　壽男　　茨城大学理学部
小畑　弘巳　　熊本大学文学部
国府田　良樹　ミュージアムパーク茨城県自然博物館
小林　謙一　　中央大学文学部
松浦　秀治　　お茶の水女子大学人間文化創世科学研究科
新美　倫子　　名古屋大学博物館
白石　浩之　　愛知学院大学文学部
中島　　礼　　産業技術総合研究所
鈴木　三男　　東北大学学術資源研究公開センター
今村　峯雄　　本館名誉教授
工藤　雄一郎　本館研究部
○藤尾　慎一郎　本館研究部
◎西本　豊弘　　本館研究部

B　「農耕社会の成立と展開−弥生時代像の再構築−」2009～2011年度（研究代表者　藤尾　慎一郎）

１．目　的

歴博が約15年前から推進しているＡＭＳ−炭素14年代測定法によって得られた実年代は，弥生時代の通説・定説に大幅な見直しを求めている。従来よりも500年早く，水田稲作が始まっていたことによって，弥生前期・中期を中心に存続期間が延びた結果，弥生時代はこれまでの約２倍となる約1200年つづいたことがわかった。弥生水田稲作の本州島各地への拡散はきわめてゆっくりとしたものとなり，当初から存在して弥生社会の急激な発展の原動力とされてきた鉄器は，水田稲作が始まってから600年ぐらいたたないとなかなか出現せず，弥生時代の前半は石器時代であったことがわかった。存続期間は延びても見つかっている住居やお墓の数は変わらないため，一時期における住居やお墓の数は減少することになり，大規模な人口を要した巨大な農耕集落が発達するという見方にも影響は必至となる。イネと鉄を象徴として急激な発展を遂げると考えられてきた弥生時代像から，水田と石器に象徴されるゆっくりと進んだ弥生時代像への見直しを目的

とする。

共同研究員とテーマとの関係は以下の通りである。

1　従来の弥生時代の年代観に基づいていた韓国青銅器時代の年代的見直しと波及する問題(李亨源)。

2　水田稲作開始後，600 年たたないと出現しない鉄器。石器時代が 600 年続いたあと，初期鉄器時代に入る。鉄の普及を前提とした弥生社会発展図式の見直し(野島　永)。

3　食料の獲得と生産。水田中心史観と畑作との混合史観(安藤　広道)

4　弥生時代の存続幅が倍になっても遺跡の数や遺構の数は変わらないので, 一時期あたりの人口が減ることになる。人口が減った弥生社会像の再構築(松木　武彦)。

5　前８世紀までさかのぼった弥生青銅器の起源と儀礼・権力(小林　青樹･吉田　広)

6　本州・四国・九州など日本列島の「中の地域」における条痕文土器文化と遠賀川系土器文化の 700 年間にわたる異文化併存の意味と世界史的位置づけ(設楽　博己・小林　謙一)

7　弥生文化の周辺。前４ー前１世紀のわずか 400 年しか水田稲作をおこなわなかった東北北部の文化的位置づけ(高瀬　克範)

8　楽浪郡の設置に伴う中原文化との接触が倭人社会にもたらしたもの(上野　祥史)

9　定型化した前方後円墳の成立年代(岸本　直文)

10 土壌中の微粒炭素を用いた縄文･弥生時代の植生史(小椋　純一)

また新たに２名の共同研究員を加え，

11 韓半島南部の初期鉄器文化と弥生文化の鉄器文化との関係（イチャンヒ）

12 縄文墓制と弥生墓制の本質的な違い（山田　康弘）

以上の項目を再検討することによって，新しい弥生時代像を再構築する。

２．今年度の研究目的

２年目にあたる今年度は，昨年度同様，共同研究員自身がこれまでおこなってきた研究内容の紹介を夏までに実施した。後半は，来年度の報告書提出用原稿のための準備に入る予定だったが，第６回目の研究会として予定していた３月の研究会が東日本大震災のために延期となったため，次回（平成 23 年５月）に持ち越すこととした。

３．今年度の研究経過

［研究会］　今年度は５回の研究会を開催した。

第１回研究会　５月 16 日（土）・17 日（日）　本館

研究発表　小林　青樹　「弥生祭祀の起源と系譜」

吉田　　広　「弥生青銅器祭祀の展開」

ゲストスピーカー

石川日出志　「東日本の青銅器祭祀と石製装身具について」

第２回研究会　７月 24 日（土）・25 日（日）　本館

研究発表　松木　武彦　「古墳時代開始論と鉄」

上野　祥史　「日本列島出土鏡の生産と流通」

岸本　直文　「古墳時代の暦年代」

第４回研究会　12 月 25 日（土）・26 日（日）　本館

研究発表　山田康弘「縄文時代の墓域構造と埋葬小群−弥生墓制研究を射程−」

李昌煕「韓半島における鉄器の出現，そして日本列島では」

坂本　稔「桜井茶臼山古墳と天理柳本大塚古墳の炭素 14 年代測定」

第５回研究会　３月 20 日（日）・21 日（月）　本館

※　３月 11 日に発生した東北関東大地震のために５月に延期

研究発表　中沢　道彦　　「縄文農耕論をめぐって━栽培種植物種子の検証を中心に━」

藤尾慎一郎　「新しい弥生時代像」報告書作成に向けて

［現地研究会］本年度は３回目の研究会を韓国で実施した。

第３回研究会　10 月 25 日（月）〜28 日（木）　大韓民国江原道春川所在青銅器〜原三国時代の集落・墳墓遺跡の調査」

４．今年度の研究成果

３回の共同研究会を歴博で，現地研究会を韓国京畿道・江原道春川市で実施した。

研究会では，弥生祭祀と古墳成立論，弥生墓制，鉄器の出現に関する研究発表を，現地研究会は青銅器時代と原三国時代の集落や墳墓を日頃，眼に触れる機会が少ない韓国北部の京畿道，江原道で行った。

①　弥生祭祀　小林青樹，吉田広，石川日出志（ゲストスピーカー）の発表から，弥生祭祀は大きく三つの段階と，二つの地域性で語られることが明らかになってきた。灌漑式水田稲作の開始と同時に始まる赤塗り壺（丹塗磨研土器）を対象にした水口祭祀や種籾祭祀を皮切りに，前４世紀前葉以降，青銅器祭祀へと遷っていくが，それは大陸系の論理が支配する武器形祭器と，縄文系の要素も加わった銅鐸祭祀の二つに分かれる。福井から静岡西部を結ぶ線より西の地域に見られる青銅器祭祀のほかに，それより東の中部・関東地方では基本的に，前２世紀以降，それまでの再葬墓文化が，赤塗り壺の祭祀をへて，最終的に小銅鐸，巴型銅器，有鉤銅釧などの青銅器へと遷っていくことが指摘された。しかし西の青銅器祭祀と同列で捉えられるものなのか，そうではないのか，まだはっきりしないこともあって，祭祀・儀礼の実態はまだよくわかっていない。いずれにしても東西の青銅器は，その後，武器の金属光沢と銅鐸の精緻さと造形をもつ青銅鏡へと遷り，古墳時代が成立する。

②　古墳成立論　岸本直文，上野祥史の発表から，考古学的には古墳開始年代が３世紀中ごろに決着した状況が見て取れるが，自然科学的にも 2009 年の土器付着炭化物の炭素 14 年代測定に続いて，坂本稔が 3 世紀後半代に比定される古墳の木棺を対象とした炭素 14 年代測定と年輪年代測定を行った。あいにくコウヤマキという樹種の難しさから年輪年代を出すことはできなかったが，炭素 14 年代測定との関係は極めて高い相関性を示した。舶載の紀年銘鏡の年代と古墳成立年代との間が縮まりつつある現状では，かつての伝世論に大きな意味が見いだせなくなっており，弥生開始年代の遡上に伴う傾斜編年の見直しと同じ状況をみてとれる。さらに松木武彦の発表から，古墳成立論の中で大きな位置を占めた鉄器の役割は，集落や墓制の変化，鍛冶遺構などを含めた総合的な再構成の中で鉄器の問題を捉えるなかで位置づけし直す段階に入ったことがわかる。

③　墓制　弥生開始年代が大幅にさかのぼったことによって各土器型式の存続幅が前期と中期を中心に 100 年，150 年と長くなってくると，弥生墓制研究も方法論の大きな方針転換が必要となってくる。弥生集落論の見直しでもクローズアップされた，いわゆる累積効果をどう考えるかである。しかし縄文墓制論との違いは，九州北部の弥生墳墓には前漢鏡や武器形青銅器を持つものが含まれることである。これら年代を推定

できる考古資料をもとに，縄文とは異なる墓制論を構築できるかどうかにかかっていると言えよう。

④　鉄器の出現　李昌煕が環朝鮮海峡地域の炭素14年代測定を精力的に進めたことによって，韓国南部では前400年頃には鉄器が出現していることが明らかになってきた。日本列島では今のところ前4世紀前葉（前期末）がもっともさかのぼる鉄器の出現年代である。しかし中国遼寧地方の戦国後期ー末期の研究が進んだことによって，前5世紀にはすでにこの地域で鉄器が普及していたことが明らかになってくると，日本列島の鉄器の出現年代もさらにさかのぼる余地を残していることが明らかになってきた。一度は保留した弥生前期後半の鉄器も再評価が必要な段階に至りつつあることが指摘された。

現地研究会では，弥生時代が始まる前10世紀に先行する，前13ー前11世紀の青銅器時代早期・前期の集落遺跡を中心とした踏査と，大学・国立・道立博物館を見学した。

90年代は慶尚南道地域でしかわかっていなかった当該期の集落遺跡の調査が，京畿道，江原道を中心に盛んに行われるようになり，特に早期や前期といった青銅器時代開始期の様相が明らかになってきた。日本列島でいう縄文後期後半ー晩期に併行する。

日本列島でもこの頃から雑・穀物が存在していた可能性を示す証拠が増加し始めるが，韓半島の北部で水田稲作以前の農業が本格化して，農耕社会が成立し始めることからすると西日本の縄文社会にも何らかの影響をあたえていたことが想像される。新しい弥生文化像の提示を目指す本基幹研究の成果に必ずや反映されることを予想するものである。

⑤　韓国現地研究会の日程と見学場所。

10月25日

金浦市陽村遺跡第11次調査　青銅器時代集落，原三国時代墳墓　高麗文化財研究院

広州市駅洞遺跡　青銅器時代の集落・墳墓（遼寧式銅剣出土）

10月26日

江原大学校博物館見学

翰林大学校博物館見学

華川郡・居禮里遺跡第1地区（漢江文化財研究院），第5地区の青銅器時代集落（江原考古文化財研究院）

江原文化財研究院鳳儀洞事務所　突帯文土器調査‒型式学的な差と炭素14年代の測定値に有意性が認められそうなことがわかった。まだ測定数が少ないので，増やした上で検証し直す必要がある。

10月27日

国立春川博物館見学

中島島遺跡群　青銅器時代集落，鉄器時代の畑

泉田里支石墓群　整備された遺跡見学

芳洞里古墳　高句麗の5世紀の古墳（片袖式石室）

10月28日　京畿道博物館見学

5．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

李	亨源	韓国・韓神大学校博物館	安藤	広道	慶應義塾大学文学部
小林	謙一	中央大学文学部	小林	青樹	國學院大學栃木短期大学文学部
設楽	博己	東京大学大学院（4月より）	野島	永	広島大学文学部

松木　武彦　岡山大学文学部	吉田　　広　愛媛大学ミュージアム
高瀬　克範　明治大学文学部	岸本　直文　大阪市立大学文学部
小椋　純一　京都精華大学	山田　康弘　島根大学法文学部
○上野　祥史　本館・研究部・准教授	坂本　　稔　本館・研究部・准教授
◎藤尾慎一郎　本館・研究部・教授	西本　豊弘　本館・研究部・教授
広瀬　和雄　本館・研究部・教授	李　　昌熙　歴博科研支援推進委員（10月～３月）

［リサーチ･アシスタント］

李　　昌熙　総合研究大学院大学博士課程学生（９月30日まで）

［ゲストスピーカー］

石川日出志　明治大学文学部

山田　康弘　島根大学法文学部

C　「新しい古代国家像のための基礎的研究」2009～2011年度
（研究代表者　広瀬　和雄）

１．目　的

国立歴史民俗博物館が進めてきた炭素14年代測定法で得られた新しい実年代は，弥生・古墳時代の通説・定説に大幅な見直しを迫っている。また，環境変化にたいする人間対応の見直しや，国家と民族の再考など，歴史学研究をとりまく情況は，近年大きく変貌している。しかしながら，そうした情勢に対応した研究が十分になされてきたかというと，そうとも言い難い現状が横たわっている。

いっぽう，1970年代以降の「記録保存」のための遺跡の発掘調査（緊急調査，行政発掘とよばれてきた）で，膨大な考古資料をはじめ，木簡や漆紙文書などの史料などが滞留し，それにともなう研究者の増加によって，個人では把握しがたいほどの個別論文も発表されてきた。また昨今，各所ですすめられてきたＣＯＥ研究などでも，つぎつぎと膨大な研究成果が蓄積されている。

ところが，それらの多くは，分析的な研究が主流を占めていて，多岐におよぶテーマがなかなか総合化されにくいという研究現状を，生みだしているようにも見える。いま要請されているのは，そうした現況を打破するための，長期的な視野に立った総合的な共同研究―文献史学・考古学・民俗学などの学際研究―である。

上記のような研究情況に鑑み，古代史像の再構築をめざした総合的な研究を推進していくという視座のもと，古墳時代から律令国家への転換期である７世紀を中心にしながら，５～８世紀ごろを対象にして，中国・朝鮮半島などをふくめた東アジア史的観点にたって，古代国家像を再検討するための基礎的研究を進めることが，この共同研究の目的である。

これまでは古代国家といえば律令国家である，が通説となっているが，それは本当に自明なのか，３世紀中ごろから７世紀初頭の350年間におよんだ前方後円墳の時代は，これまで言われているように律令国家の形成過程にすぎなかったのか，そして古墳時代の内的な要因で律令国家は成立したのか，東アジアの動向はそれらにたいしてどのような契機を占めたのか，北東北や九州や南島の「国境」では何があったのか等々，既往の通説の問い直しもふくめた共同研究を実施する。

２．今年度の研究目的

第２年次の平成 22 年度 は，第１年次につづいて各共同研究員の共同研究テーマに関する個別発表にしたがって，それぞれの研究の到達点を確認し，考古学と文献史学の立場からの議論をおこなうことを目的とした。そのなかから研究課題の抽出をおこない，年度の後半からはテーマ討論を展開する予定であったが，第８回研究会が中止となったため，いくつかは次年度に持ち越さざるを得なかった。

また，昨年度の東北地方につづいて，本年度は沖縄諸島の文化を対象にしながら国家領域の問題などの検討を目標にし，さらに研究目的にふさわしい７世紀ごろの遺跡が集中している畿内，もしくはその周辺地域を踏査して，テーマの一つとしての政治中枢についての立体的な議論をおこなうこととした。

３．今年度の研究経過

４回の研究会を開催する予定であったが，第８回研究会（３月 20～21 日）は東日本大震災のため中止となった。実施した３回の研究会の概要は次の通り。

第５回共同研究会

2010 年７月３～４日（歴博第１会議室）。

研究発表１　田中俊明「７世紀中葉の東アジア情勢と倭国の外交姿勢－高句麗の動向を軸として」，研究発表２　菱田哲郎「７世紀における地域社会の変容－播磨の古墳と集落，寺院の動向から」，研究発表３　林部　均「古代宮都からみた郡山遺跡と多賀城」，研究発表４　鈴木一有「古墳時代後期の墓制にみる東海の地域秩序」。菱田，鈴木，林部の３氏は，７世紀を中心とした地域社会の動態を考古学的方法で述べた。田中氏は文字史料にもとづき唐と朝鮮三国の情勢を，倭国のそれと関連させて展開した。

第６回研究会（沖縄県立芸術大学）

2010 年 10 月１日～３日。

首里城，首里玉御殿（玉陵），天山ようどれ，浦添ようどれ，小禄墓，安慶名グスク，百按司墓，漢那ウエーヌアタイ古墓など，グスクと王陵を中心とした遺跡を踏査し，沖縄県立博物館を見学するとともに，沖縄県立芸術大学で研究会をおこなった。

研究発表１　安里進「沖縄のグスクと王陵」，研究発表２　大平聡「グスク研究の現状と課題－安里進氏の研究を中心にー」。安里進氏と大平聡氏からの関連発表にもとづいて討論を実施し，貝塚後期文化につづくグスク文化が交易を主体としていたことが明らかにされた。

第７回研究会

2010 年 12 月 25～26 日（大津市埋蔵文化財調査センター）。

大津市埋蔵文化財調査センターで崇福寺跡等出土品を見学し，崇福寺跡，百穴古墳群，南滋賀廃寺，近江大津宮錦織遺跡などを踏査した。７世紀の宮都，寺院，古墳群が集中している大津宮とその周辺を踏査し，それらに関する研究会を実施した。

研究発表１　亀田修一「瀬戸内海沿岸地域の古代山城」，研究発表２　太田博之「古墳時代後・終末期の墳墓造営に見る関東地域の動向」，研究発表３　吉水真彦「近江大津京研究の一動向」。瀬戸内海沿岸地域に築城された古代山城の国際性，その頃の東国における古墳の動向，同じ時期の政治中枢であった大津宮の実態などが議論された。

４．今年度の研究成果

３回の研究会では，東アジアもふくめた７世紀の動向を，東北，東国，東海，播磨，畿内周辺，沖縄諸島などの

具体的な地域を対象に，各々の地域社会の特性や政治秩序維持のためのメカニズムなどを明らかにすることができた。ことに，これまでは古墳や古代寺院，宮都や官衙など，個別的にアプローチされることが普通であった７世紀史を，遺跡・遺物の考古資料と文字史料を一堂に会して，文献史学や考古学などの多分野から，東アジア的環境のなかで論究したことの意義は大きい。また，沖縄ではグスクや王陵を実地に踏査することをとおして，異文化接触の実像の把握につとめながら，グスク文化は交易の比重が高い社会であったことを議論した。

東アジア的史的視野にたった学際的議論のなかから，今後，深めるべき研究課題として次のような研究テーマが浮かびあがってきた。隋・唐や新羅などを対象にした国家形成史における外交や交易の位置づけ，日本列島各地の地域社会の７世紀の実態，国家領域の問題などである。さらに，沖縄諸島のグスク文化は，交易を主軸においた国家形成がたどれそうで, これまでの水田稲作を基調とした国家形成とは異なった筋道が描ける可能性が出てきたが, それと地域社会の実相が明らかにされつつある「日本」国家との比較研究を深めることが。今後の日本古代史の大きな課題となってきた。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

安里　　進　沖縄県立芸術大学
鈴木　一有　浜松市生活文化部
菱田　哲郎　京都府立大学
亀田　修一　岡山理科大学
田中　俊明　滋賀県立大学
熊谷　公男　東北学院大学
吉川　真司　京都大学
藤澤　　敦　東北大学埋蔵文化財調査室
太田　博之　本庄市教育委員会
山中　　章　三重大学
渡辺信一郎　京都府立大学
大平　　聡　宮城学院女子大学
荒木　敏夫　専修大学
坂本　　稔　本館・研究部・准教授
高田　貫太　本館・研究部・准教授
仁藤　敦史　本館・研究部・教授
林部　　均　本館・研究部・准教授
平川　　南　本館・館長
広瀬　和雄　本館・研究部・教授
藤尾慎一郎　本館・研究部・教授

[基盤研究]

（１）科学的資料分析研究

Ａ　「【科研型】日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」2008～2010 年度
（研究代表者　齋藤　努）

１．目　的

2004～2006 年度に行った科研費基盤研究（Ｂ）（２）「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」（研究代表者：齋藤努，課題番号：15300296）において，青銅器時代～三国時代を中心に韓国嶺南地域（旧加耶諸国および新羅の一部）と日本列島出土の青銅製品を調査し，鉛同位体比測定を行った結果，これまで中国華南産の鉛と考えられていたグループの中に，慶尚北道大邱近郊の漆谷鉱山産の鉛が含まれる可能性のあることがわかった。この鉛を含む青銅製品が４世紀ころ出現し増え始める

事実が，新羅の大邸地方への勢力版図の拡大と一致する傾向が認められた。

本研究ではこれと同時代の旧百済地域における状況を調査していく計画である。2007 年度にその端緒として，韓国国立中央博物館と本館との国際学術交流協定にもとづく研究プロジェクトの一環として，リーダーシップ支援経費により，韓国国立中央博物館（中央博）が所蔵する青銅製品と日本国内出土資料について調査を行った。

2008 年度からは科研型の共同研究として，引き続き韓国中央博とともに，主として三国時代を中心に韓国出土資料およびそれと比較できる日本出土資料の調査を行う。当初の申し合わせにより国際学術交流協定による中央博との研究プロジェクトは 2008 年度までで終了し，その後はソウルや京畿道などにある旧百済地域の資料を所蔵するいくつかの文化財調査財団との協力関係によって，研究を継続している。なお，2009 年度より３ヶ年の計画で科研費基盤研究（B）「古代日韓における青銅器の製作および流通と原料産地の変遷に関する研究」（研究代表者：齋藤努，課題番号：21300331）が採択された。

２．今年度の研究計画

大きく分けて２つの課題に重点をおいて研究を展開する。

⑴ 朝鮮半島出土資料を対象とする研究

韓国の文化財調査財団（韓国文化遺産研究院，漢江文化財研究院，京畿文化財研究院など）が所蔵する青銅器時代・三国時代の青銅製品を中心として調査を行う。本研究の目的に合わせ，日本の古墳出土資料と対応関係が比較できるものや，考古学的な型式の研究から年代的な系統を追うことのできる資料を意識的に選択する。

⑵ 日本出土資料を対象とする研究

今年度は東国（群馬県）を中心に新羅・百済系の遺物を出土している古墳の調査を行う。

３．今年度の研究経過

７月６日～８日

韓国・漢江文化財研究院において共同研究の打ち合わせと，金浦・雲陽洞遺跡出土資料の調査および鉛同位体比分析用試料の採取

７月 21 日～25 日

韓国文化遺産研究院より３名の研究者が来日し，青銅資料に関する共同研究の打ち合わせと，日本出土資料の調査

９月６日～９日

竹原市，高松市，真庭市，津山市，智頭町において，古墳出土の銅鋺などの調査および鉛同位体比分析用試料の採取

９月 20 日～22 日

出雲弥生の森博物館において，中村１号墳出土資料の調査と鉛同位体比分析用試料の採取

３月 15 日～18 日

かみつけの里と藤岡市教育委員会において，古墳出土青銅資料および遺跡調査と，鉛同位体比分析用試料の採取

４．今年度の研究成果

日本の銅・鉛製錬開始時期前後の資料と，韓国で製錬が始まった可能性が想定される青銅器時代～三国時

代における旧百済地域の資料について鉛同位体比測定を行い，データを蓄積した。現在までのところ，以前に実施した韓国嶺南地域（旧加耶諸国および新羅の南の一部）の研究で見出されたのと同様の数値を示すものが検出されている。

これまで，鉛同位体比分析によって指摘された日本で最も古い国産鉛の使用例としては，出雲市上塩冶築山古墳出土の銅鈴（６世紀後半～７世紀初）と，安来市高広Ⅳ区３号墓出土の耳環（６世紀末～７世紀初）がある。今年度の研究により，島根県出雲市の中村１号墳（６世紀末～７世紀初）出土資料の中から，日本産と判断される原料を使用しているものが見出された。これは，前記の２例に続いて新たに見つかった，６世紀末～７世紀初において日本産原料が使用されていたと推定される事例である。

５．３年間の研究成果

本研究は科研型共同研究であり，科研費での研究期間は2011年度までの予定であるので，まだすべての資料の分析が終了していない。2010年度までにあげることができた成果は以下のとおりである。

韓国百済地域の資料を分析し，韓国嶺南地域の研究において得られた数値の集中領域「グループＧＢ」に入るものが見出されたことから，百済地域においても朝鮮半島産原料の使用が始まっていた可能性のあることが示唆された。韓国においては，銅や鉛に関する鉱山遺跡や製錬遺跡の調査がほとんど行われておらず，製錬の開始された時期がわかっていない。それに対して，鉛同位体比分析という考古学とは異なる自然科学的なアプローチによって，その時期に関する考察につながる検討材料を提示した点が，本研究の成果の一つである。

日本の資料については，中国地方において６世紀末～７世紀初の古墳から出土した青銅製品の中に，日本産原料が使用されたと判断できるものがみつかった。日本産鉛原料の開始時期については，考古学と自然科学の両面からみたこれまでの研究結果によると，大量に使用され始めるのは８世紀からであり，また製錬の開始は７世紀半ばとされていた。ただし，鉛同位体比分析の結果から，わずか２点ながら，６世紀末～７世紀初に国産原料が使用された可能性のあることが指摘されていた。本研究においては，鉛同位体比分析によって，同時期の資料でより確実に日本産と判断されるものが新たにみつかったこと，またこのような資料の出土地がいままでのところ島根県内のみであることなど，国産原料の開始時期と地域についての検討材料となる事例を見出すことのできた点が，意義のある成果である。

なお，2011年度は，韓国の資料については引き続き分析事例を蓄積し，また日本の資料については2010年度内にサンプリングを行った群馬県の古墳出土製品などの分析を行うことによって東国における原料産地の状況について考察を加える。本研究の成果については，科研費の研究期間が終了する2011年度末に，研究成果報告書として2000部程度を作成し，日韓の関係機関・研究者に配付する予定である。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

亀田　修一　岡山理科大学総合情報学部　　　　　土生田純之　専修大学文学部
◎齋藤　　努　本館・研究部・准教授
○藤尾慎一郎　本館・研究部・教授
［リサーチアシスタント］
李　　昌煕　総合研究大学院大学・大学院生

B 「江戸から明治初期にかけての絵画材料および製作・流通に関する調査研究」2010～2012 年度
（研究代表者　小瀬戸　恵美）

１．目　的

歴史資料において，その構成材料を明らかにすることは保存や修復のみならず，資料の歴史的・美術史的位置づけをおこなううえでも非常に重要である。本研究では自然科学的手法をもちいて材質同定をおこなうとともに自然科学・美術史学双方の観点から製作技法や流通経路の解明もこころみる。また，画像分析による製作時の色彩復元や技術解明の手法開発とその有効性の検討もおこなうことにより，年代や製作地における技術変遷の解明をめざす。化学分析については，組成分析，ラマンや赤外などの分光分析，抗体を利用したウェスタンブロット法によるたんぱく質抽出，鉛同位体比法による材料産地推定，構造の材質調査，年代測定などを中心とする。画像分析については，歴史資料計測に適した光源や資料の表面状態を観察するのに適した解析法の検討などをおこなう。対象資料は館蔵資料を中心とするが，必要に応じて他機関の資料をも扱う。また，上記研究組織のメンバーは中心となるものであり，個々の資料調査および技法調査の際には関係する館内外の研究者や伝統技術保持者にも協力を仰ぐ。主な対象資料は以下のとおりである。

１．江戸後期から明治初期の美術資料の材質と製作，流通

当館が平成 20 年度に購入した「歌川派錦絵版木」368 枚とその版木をもちいて摺られた錦絵を対象として，使用された顔料・染料・膠着材の同定をおこなうとともに，版木の残された彫り目や記された墨書などを精査して技法の解明を試みる。また同時に明治初期にかけて極端に誇張された西洋由来の遠近法をとりいれた民画である泥絵も対象とする。これは近年，絵画として再発見されたものであり，製作技法の双交流の端となりうる。加えて，これら美術資料の表面状態計測などの画像分析手法について検討する。

２．顔料，染料や膠着材の流通

１．と関連して，日本と東洋，西洋間での顔料・染料・膠着材など材料の双交流の解明を目的として，調査をおこなう。特に江戸後期は西洋の人工顔料の日本への輸入やアジア経由での材料の流入が文献の記述として残っているので，化学分析と文献の双方から流通の解明をめざす。

３．天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明

伝統的な天然顔料は金属鉱物をその原材料として製作された。これらに鉛同位体比分析や組成分析を適用し産地推定をおこなうことにより，顔料や原材料の流通経路の解明をめざす。また，同時期の金属の製錬・精錬技術を自然科学的に調査することにより，その時代の加工技術を明らかにする。

２．今年度の研究目的

１．美術資料について化学分析を先行し，材質成分の同定やデータ蓄積をおこなう。また材質の状態や混合による変化を再現画像化するに適した画像分析の手法や条件を検討する。

２．西洋，東西アジアの顔料・染料・膠着材の収集・採取，および，文献や美術史関係資料などをもとに情報収集をおこない，記述の調査，精査をおこなう。

３．天然顔料の原材料を採取していた鉱山など産出地の調査を中心におこなう。

３．今年度の研究経過

第１回研究会　３月 17 日　国立歴史民俗博物館

発表：趣旨説明（小瀬戸恵美）

「クロスセクションの染色による膠着材の判別の試み」（高嶋美穂（国立西洋美術館））

「ラマンイメージング装置を使用した文化財の測定」（小瀬戸恵美）

歌川派錦絵版木群実見

調査（秋田）　11 月 15 日～27 日，史跡尾去沢鉱山・鹿角市鉱山歴史館・秋田大学鉱業博物館

４．今年度の研究成果

平成 22 年度は「１.江戸後期から明治初期の絵画資料の材質と製作，流通」における分析方法の確立とデータ蓄積を先行し，「２.顔料，染料や膠着材の流通」「３.天然顔料の原料となる金属鉱物の産地推定と技術解明」については主として文献による情報収集と次年度以降の試料採取計画の立案を行う予定であったが，分析機器の不具合（ＩＣＰ－ＭＳ修理，ＥＰＭＡのデータ取得用ＰＣ，可搬型蛍光Ｘ線修理，ラマンイメージング装置不具合調整）などが発生し，その対応のため，年当初計画を若干修正し，機器修理を行うと同時に，機器修復後ただちに測定が行えるよう，化学分析前処理（ＥＰＭＡ測定及び鉛同位体比測定)，鉄製品及び土壌の中性子放射化分析依頼を行った。今年度は研究を始めたばかりであり，自然科学的分析結果としてはまだ具体的な成果はでていないが，鉱山坑道調査，材料物質調査など次年度の研究の基礎となる調査結果を得た。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

岩切友里子　学識経験者，国際浮世絵学会編集委員
谷口　陽子　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
高嶋　美穂　国立西洋美術館・保存科学研究員
高塚　秀治　学識経験者
眞鍋　佳嗣　千葉大学大学院融合科学研究科・教授
古田嶋智子　学識経験者
杉崎佐保恵　東京都市大学・非常勤講師
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
坂本　　稔　本館・研究部・准教授
鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
大久保純一　本館・研究部・教授
○齋藤　　努　本館・研究部・教授
◎小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授

（２）総合的年代研究

A　「歴史・考古資料研究における高精度年代論」2009～2011 年度
（研究代表者　坂本　稔）

１．目　的

炭素 14 年代法に代表される自然科学的な高精度年代測定法は，これまでも歴史・考古資料の研究に応用され，成果を上げてきた。ところが自然科学的に達成される「測定の確からしさ」と，歴史・考古学的に要請される「年代の確からしさ」との間には，未だ少なからぬ乖離が認められる。本研究は，両者の間に横たわる課題を整理し，年代測定の精度向上を両者の立場から実現することを最終的な目的とする。

本研究では，単に年代が事象と合う，合わないといった議論にとどまることなく，合わないとすればどこ

に原因があるかを自然科学的，ならびに歴史・考古学的に明らかにすることで，より精度の高い年代観の獲得を目指す。

２．今年度の研究目的

分担者が対象とする時期・資料の年代測定を行い，その結果について考察を加える。研究期間を目途に実施するため，高い精度で広範囲の編年を行うことは困難と思われるが，個々の事象に対する考察は今後の年代研究の推進の上で有用な情報となることが期待される。

自然科学からのアプローチとして，測定に対する方法論，ならびに年代較正に対する整備を行う。暦上の年代のよりどころとなる「較正曲線」は，広く用いられる国際標準（IntCal09）と日本産樹木による結果がわずかに異なる時期があることが明らかになりつつある。この違いは日本の考古・歴史学においては極めて大きな問題となる。研究期間を目途に，注目される時期について日本版較正曲線の整備を効率的に行う。

３．今年度の研究調査

〇研究会

第１回：９月 16 日，国立歴史民俗博物館

林部　均（ゲストスピーカー，本館研究部准教授）：飛鳥・奈良時代の考古学と年代論

文字資料が存在するこの時代は，共伴する土器や軒瓦が与える相対編年に暦年代を付与できる。ただし木簡の廃棄年代や，製作年代を示す瓦の作笵年代との時間差は考慮されるべきである。また列島各地の土器様式に対しては，都周辺の土器編年の適用が難しいことに注意が必要である。

坂本　稔：紀元前後の東アジア産樹木年輪の炭素 14 年代測定

桜井茶臼山古墳，天理柳本大塚古墳の木棺から採取した柱状試料の炭素 14 年代測定を実施し，その変動パターンが日本産樹木年輪に共通したものであることを確認した。一方，韓国東南岸の古村里遺跡出土の木柱は，一部のパターンが類似するにとどまった。当時の大気循環の様相を推定しながらその理由を検討する必要がある。

第２回：12 月 17 日，宮島（広島県廿日市市）

中尾七重：宮島町家年代調査の経緯

民家の用材は樹種が多様で年輪数の少ないものが多く，その年代調査は年輪年代法では困難である。宮島の町屋について，編年に基づいて推定された最初の部分が炭素 14 年代法で 17 世紀にさかのぼる可能性が示され，文化財として価値の高いものであることが明らかになった。

藤田盟児（ゲストスピーカー，広島国際大学教授）：放射性炭素分析による宮島の町屋編年の再検討

厳島神社門前町の町屋について，外観，仕口の深さなどを指標とした編年を行った。その過程で，飯田作業所は日本最古の都市型庶民住宅である可能性が示された。また田中家は 17 世紀建造の町屋を嘉永２(1849) 年に改造されたもので，放射性炭素分析による結果と対応する。

坂本　稔：炭素 14 年代法による厳島神社門前町・町家柱材の年代測定

厳島神社門前町に所在する町家の柱材について，炭素 14 年代法による年代測定を行った。炭素 14 年代値は較正曲線 IntCal09 に対するウィグルマッチ法により暦上の年代に変換され,それぞれの柱材の最外層は主に 17 世紀中頃の値を示した。

〇資料調査・測定

６月 28 日：吉村家住宅の調査

羽曳野市に所在する吉村家住宅において，床下柱材から年代測定試料を採取した。測定は次年度を予定する。

７月２日：古今伝授の間の調査

熊本市に所在する古今伝授の間について，移築年代に関する調査について助言を行った。

11 月１日：与楽鑵子塚古墳出土炭化物の調査・測定

高取町に所在する与楽鑵子塚古墳の床面から炭化物を採取し，炭素 14 年代測定を実施した。結果は来年度刊行予定の同古墳調査報告書に掲載される。

12 月 17・18 日：厳島神社門前町の調査

研究会に伴い，厳島神社門前町における町屋の調査を実施した。

２月 23 日：難波宮出土壁材の調査

難波宮出土壁材から，年代測定試料となる植物繊維・炭化材を採取した。測定は次年度を予定する。

４．今年度の研究成果

研究代表者は 2009ー2012 年度科学研究費補助金（基盤Ａ）「日本産樹木年輪による炭素 14 年代の高精度較正曲線の作成」の採択を受け，本研究との連関が図られている。研究会では編年研究に対する自然科学的な年代測定法の有用性が確認され，特に時代を下った歴史時代の資料研究や，古民家の編年研究などに一定の成果を上げることができた。また較正曲線の整備は喫緊の課題ではあるが，その地域差が限定的である可能性が示されたことから，日本列島各地の樹木年輪の炭素 14 年代の測定が急がれる。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

光谷　拓実　総合地球環境研究所
小林　謙一　中央大学文学部
松崎　浩之　東京大学大学院工学系研究科
◎坂本　　稔　本館・研究部・准教授
西本　豊弘　本館・研究部・教授
広瀬　和雄　本館・研究部・教授
○工藤雄一郎　本館・研究部・助教
小田　寛貴　名古屋大学年代測定総合研究センター
中尾　七重　武蔵大学・総合研究所
井原今朝男　本館・研究部・教授
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
仁藤　敦史　本館・研究部・教授
藤尾慎一郎　本館・研究部・教授

Ｂ　「建築と都市のアジア比較文化史」2009 年度～2011 年度
（研究代表者　玉井　哲雄）

１．2010 年度の研究目的

日本建築の特質をあきらかにするためには，日本列島内の建築だけではなく，広くアジア全体を視野に入れ，それらの地域の建築との比較考察を行う必要がある。2007・2008 年度に行った共同研究「東アジア比較建築文化史」において，東アジアの現地調査，日本と韓国，日本と中国，そして日本とアジアの比較を主題にしたシンポジウムを開き，研究討議を重ねた。このような東アジアの研究成果を基礎に，地域を東アジアからさらに外のアジア世界に広げ，なおかつ個々の建築だけではなく，その背景となっている都市を視野に入れた共同研究「建築と都市のアジア比較文化史」を 2009・2010・2011 年度に計画した。

１年目である 2009 年度に行ったネパールの調査，および研究会における議論の結果から，２年目である

2010 年度には，南アジアの中心であるインドの建築・都市調査を行い，なおかつ日本の建築・都市を考える立場から，アジア全域の建築と都市との関係をあきらかにするための研究の枠組み設定を目的とした。

２．研究経過

2010 年７月 31 日の第１回研究会（国立歴史民俗博物館）において，2009 年度の議論，およびネパール調査における都市遺構調査の実体験に基づく意見交換などから，研究全体の方向性として，ヨーロッパによる近代化以前，さらに 13 世紀のモンゴルによる影響を受ける以前のアジアの都市に重点を置くことが提起され，基本的には合意を得た。ただ研究分担者各自の研究テーマをこれに沿って進めるのは，必ずしも現実的ではないので，「前近代の都市と建築にアジア的な根源を探る」という全体テーマの下に各自の専門分野に応じたテーマ設定をすることになった。

2010 年 10 月 18 日〜27 日にインド南部東側のタミル・ナードゥ州の都市および建築の調査を行った。訪れた主な都市は，チェンナイ，カーンチプラム，マハーバリプラム，チダンバラム，タンジャヴール，シュリーランガム，ティルチラーバリ，マドゥライである。それぞれの都市において都市全体の街路構成や町並の現状の確認を行い，核となる宮殿およびヒンドゥー教寺院の調査を行った。特にヒンドゥー教寺院においては日常的に行われている宗教行事の様相も観察調査を行った。

2010 年 12 月７日に研究打ち合わせを行った。インドの実際の調査に参加した研究者は限られたため，その実際の経験を共有できるように，インド調査報告の場を設けてインド調査に参加できなかった研究者の参加を求め，インド調査報告を行い，さらに研究テーマについての議論も行った。

2011 年２月 19・20 日に第２回研究会（国立歴史民俗博物館）を行った。

１日目にはゲストスピーカーとして　応地利明（京都大学名誉教授・地理学）氏を招いて①「隋唐・長安論―新たな形態読解の提出」②「最後の城下町―札幌とニュー・デリー」という講演をお願いし，コメントを同じくゲストスピーカーとして妹尾達彦（中央大学教授・東洋史）氏に求めた。さらに参加メンバーが中国・インドの建築文化・都市文化について広い視野から討論を行った。

２日目には，参加メンバー各自の研究テーマについての議論を行った。さらに共同研究の研究成果の公開方法などについて具体的な検討を行い，共同研究の一つのまとめとしての国際シンポジウムを計画し，さらに研究報告についても日程の確認を行った。

３．研究成果

2009 年度のネパール調査に続いてインドの建築・都市の調査を行うことができた。アジア全域の文化を考える場合，東アジアの中国と南アジアのインドという２つの中心がある。日本から見た場合，まず東アジア中国との比較を行うのは当然であるが，その中国を相対化する視点としてインドを考える必要があることが重要な課題として確認できた。特に今回調査対象とした南インドタミールナドゥ地方はインド南部の固有の都市文化がその形態をよくとどめており，方形を基調とする都市構成の要所を占める宗教施設として生きているヒンドゥー寺院，そして宮殿は，建築年代はさかのぼらなくても，12・13 世紀以前の様相を十分につたえていることが実感できた。

ゲストスピーカーを招いての研究会は研究メンバーだけでは得られない広い視野からの知見が示され，また問題提起が行われた。共同研究員との議論とともに大いに収穫があったと考える。

またこの間の調査現場，および研究会において異なる分野，考古学と建築史学との間で研究方法および問題意識をどのような形で共有するのか，という課題についての具体的かつ厳しい議論は大いに有益であり，

この間の個別テーマの議論の内容も含めて今後の「建築と都市のアジア比較文化史」研究の展望が開けたと考える。

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大田　省一	京都工芸繊維大学・准教授	小泉　和子	昭和のくらし博物館・館長
藤井　恵介	東京大学大学院・教授	布野　修司	滋賀県立大学・教授
包　　慕萍	東京大学生産技術研究所・外国人研究員	韓　　三建	蔚山大学校・教授
黄　　蘭翔	台湾大学芸術研究所・副教授	佐藤　浩司	国立民族学博物館・准教授
Mohan Pant	国立トリブバン大学・教授	岩淵　令治	本館・研究部・准教授
○上野　祥史	本館・研究部・准教授	大久保純一	本館・研究部・教授
高橋　一樹	本館・研究部・准教授	◎玉井　哲雄	本館・研究部・教授
仁藤　敦史	本館・研究部・教授	広瀬　和雄	本館・研究部・教授

（３）高度歴史情報化研究

Ａ「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」2009～2011 年度
（研究代表者　小島　道裕）

１．目　的

洛中洛外図屏風歴博甲本（以下「歴博甲本」）は，現存最古の洛中洛外図屏風として著名な，館の代表的資料のひとつである。しかし，これまでの洛中洛外図屏風研究は上杉本に偏っていたため，歴博甲本独自の研究は必ずしも盛んでなかった。

しかし，2007 年に開催した企画展示「西のみやこ 東のみやこ―描かれた中・近世都市―」を契機とした館内の研究から，発注者，作者，制作目的，制作時期などの基本的な成立事情について仮説を提示するに至り，描かれた人物の特定や事物の解釈も進んできた。

洛中洛外図屏風は歴史資料としても大きな価値を持つため，その研究の進展は，美術史のみならず，政治史，社会史など多くの分野に影響をおよぼし，新たな課題を生み出すことになると思われる。そこで，この機会に館外からも各分野の研究者の参加を求め，共同研究として研究を進めることで，成果を学界共有のものとすることを目指している。

また，歴博甲本は，一部に大きな欠失部分があり，全体的にも画面の破損・汚損がかなりあるため，本来の画像を復元した複製を制作することが以前から館内で検討され，館外でも欠失部分復元の試みがなされていた。これについても，図像研究の水準が上がり，また今日のデジタル技術を用いることで，蓋然性の高い復元を行う条件が整ってきた。

復元という共通の目標を掲げて図像研究を行うことは，各分野からの研究を，焦点を合わせて進展させる効果が期待でき，また絵画をどのように分析しどのような手続きで復元していくかという作業自体もすぐれて研究的な営為である。

そして，成果として制作された復元画像は，展示や教育普及活動の素材として活用することが可能であり，そのための活用方法の研究もまた，これまで当館で行われてきた博物館学的研究を受け継ぐものとして重要

である。
　このように，本研究は洛中洛外図研究の水準を向上させ共有化すると共に，復元複製についても研究実績を積み，またその成果を用いて博物館活動の充実化にも資することを目的とする。

２．今年度の研究計画

　引き続き各分野からの報告を行うことで，歴博甲本の研究状況と今後の課題を共有し，前進させる。画像の復元に関しては，昨年度作成した現状複製の画像データを加工して，図像の修復を進める。原本の調査や，類例に基づいて，個別の画像について妥当な復元案を考案し，試行的な出力を行いつつ，検討を進める。活用方法については，人物データベースの構築を引き続き進め，現状複製等の活用についても，実践的な機会をとらえて検討を進める。

３．今年度の研究経過

　昨年度の３回に続き，今年度は研究会を４回開催し，また随時関係者が参加する形で作業を行った。
　研究会では，描かれた法華寺院，衣服，踊りと祭礼などの問題を通じて，画像の意味や年代を考察し，また実際の現地で，描かれたものとの対比を行った。歴博甲本および関連資料の原本調査も行い，特に復元作業における今年度の中心的な課題であった，欠失した画像の復元については，研究会で検討を行う他，原本の接写や赤外線写真撮影も行いながら，関係者が随時協議を行った。

第４回研究会
日時：2010 年６月 10 日（木）
場所：国立歴史民俗博物館 第２研修室
内容：
【作業の報告と検討】
　復元複製に向けて
　　・欠損部分の補筆　方法と現状の検討
　　・人物データベースの作成　改善版の現状
【研究発表】
　古川元也（神奈川県立歴史博物館）
　「描かれた洛中寺院―法華寺院を中心に―」
　澤田和人（国立歴史民俗博物館）
　「サントリー本『三十二番職人歌合』の制作年代について－洛中洛外図屏風を手掛かりにして―」

第５回研究会
日時：2010 年９月 16 日（木）
場所：国立歴史民俗博物館 第２研修室他
【復元作業の報告と検討】
　・欠損部分の補筆と疵等の修復　方法と現状の検討（左隻作業の現況確認）
【研究発表】
　松尾 恒一 （国立歴史民俗博物館）
　「中世京都の風流―踊りと祭礼―」

第６回研究会

日時：2011 年１月 19 日（水）～20 日（木）

場所：同志社大学寒梅館会議室

　　同志社大学構内遺構（旧相国寺境内）発掘調査現場

　19 日は，発掘担当者の鋤柄俊夫氏（同志社大学文化情報学部）より，現在の発掘状況，およびこれまでに発掘が行われた「花の御所跡」「近衛邸跡」の調査について，現地および会議室で，案内と報告をいただいた。

　20 日は，「歴博甲本」に描かれた，「柳の御所」跡付近と，法華寺院＜妙顕寺・本法寺・妙覚寺・妙蓮寺＞を中心に，上京の巡見を行った。法華寺院については，古川元也氏から，現地でご報告いただいた。

　この外，人間文化研究機構連携研究「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究―京都と江戸―」（都市風俗画研究会）と合同で，下記の研究会を開催した。

期日：2010 年 11 月 25 日（木）

場所：国立歴史民俗博物館　第２研修室および第２修復室

【研究発表】

　岩崎均史「洛中洛外図屛風歴博Ｅ本と『京童』」

　および「洛中洛外図屛風歴博Ｅ本」原本調査

４．今年の研究成果

　研究会での発表や，現地での検討，原本の調査等によって，それぞれの分野での検討を進めた。

　画像の復元に関しては，既存部分や類似資料の検討に基づいて，疵の修復や新たな画像の作成を行った。また，後世の補筆が予想外に多いことも判明したため，これも極力オリジナルの状態に戻す方向で作業を進めた。一通りの画像復元は終えることができ，全体の復元に向けて大きく前進した。

　人物データベースの作成も引き続き進め，すでに過半の作業を終えて，描かれた内容についての理解を深めると共に，画像データとリンクしての活用などにも展望を持つことができた。

　成果発表の場でもある企画展示についても検討し，内容をほぼ固めることができた。

　なお，『歴博』No. 164（特集「洛中洛外図」，2011 年１月）において，研究員が分担執筆して，これまでの研究成果の紹介を行った。

５．研究組織

　岩崎　均史　たばこと塩の博物館　　岩永てるみ　愛知県立芸術大学美術学部
　神庭　信幸　東京国立博物館保存修復課　　佐多　芳彦　立正大学文学部
　末柄　　豊　東京大学史料編纂所　　鋤柄　俊夫　同志社大学文化情報学部
　古川　元也　神奈川県立歴史博物館　　安達　文夫　本館・研究部・教授
　井原今朝男　本館・研究部・教授　　大久保純一　本館・研究部・教授
◎小島　道裕　本館・研究部・教授　　小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授
　澤田　和人　本館・研究部・准教授　　高橋　一樹　本館・研究部・准教授
　玉井　哲雄　本館・研究部・教授　　松尾　恒一　本館・研究部・教授
　宮田　公佳　本館・研究部・准教授

※共同研究でも，「科研型」として同じ課題で進めている。経費的には，研究会開催に関する部分を共同研究で，複製制作の作業に関わる部分を基本的に科研費で扱っている。

B 「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」 2010～2012 年度

（研究代表者　鈴木　卓治）

1．目　的

インターネット時代の到来とともに，近年歴史研究情報のデジタルデータ化が各所で精力的にすすめられている．国立歴史民俗博物館（歴博）はその設立時より他所に先駆けて日本歴史学のデータセンターとしての使命を担っており，データベースれきはくを始め，さまざまな種類の歴史研究情報をデジタル化し，研究・教育・展示への活用につとめているところである。ゆえに，単にデジタル化しただけでは有効な利用が難しい歴史研究情報の，よりよい活用の典型を示すことが，現代における歴博の重要な任務であるといってよい。

本研究は，日々蓄積されていくデジタル化された歴史研究情報をより高度に利用するための基礎となる具体的な研究課題を提示し，課題への解を見いだす過程に人文学的フィードバックをかけることによって，異分野の研究者が集う国立歴史民俗博物館の特色を生かした，意味論と技術論をかみあわせた研究を実施しようとするものである。

本研究では，具体的な研究課題として，「高度情報検索」，「大規模デジタル画像処理」，「デジタル展示」，「利用者分析」の４つの研究班を設定する。

高度情報検索班は，歴博で公開されているデータベースについて，専門知識に乏しい一般利用者あるいは初学者が所望の情報にたどりつくために必要な技術の開発を目的とする。館蔵資料データベースを具体例として，データに含まれる隠れた相互関係を抽出することにより，関連する概念を連想的にたどりながら利用者に提供することのできる利用者インタフェイスについて考える。

大規模デジタル画像管理班では，歴博のデータベースの中に存在する，数万枚～数十万枚の大量の画像データが付与されたデータベース，しかもデータ１件あたりに数百枚の画像が付与されている場合を含むような事例について，利用者が所望の画像を獲得することが極めて困難な状況が生ずることから，これを解決するための方法について検討を行う。

デジタル展示班では，高精度に計測された歴史資料のデジタルデータを永続的に保存し活用しようとするデジタルアーカイブの活動が近年盛んになってきていることをふまえ，数値として保存されるデジタルデータをどのように提示すれば利用者がより歴史資料への正しい理解を深めることができるかを検討し，必要な基礎技術の開発を行う。実際に試作を行って利用者の評価を受ける形で研究をすすめる．また，近年急速に技術開発が進んだ，タブレットコンピュータや，ゲームコンピュータのコントローラや簡易モーションキャプチャ装置について，博物館展示への応用の可能性を調査する。

利用者分析班では，本館の第３展示室は全面的に情報端末を導入している本館第３展示室を事例として，本当に利用者の歴史理解を支援できているかどうか，各端末で記録している利用者の端末操作の記録を分析の対象とし，数量的な客観分析を試みる。

各研究班の当初構成は以下の通りである。ただし，これは固定的なものではなく，研究の進捗やディスカ

ッション等を経て，プロジェクト内で活発に相互交流を行う。

高度情報検索班：小町，山田，仁藤，安達；大規模デジタル画像管理：村田，青山，仁藤，安達，鈴木；デジタル展示：田中，北村，津田，大久保，鈴木；利用者分析：徳永，安達，鈴木。

２．今年度の研究目的・計画

全体スケジュール：原則として全体研究会を２回，課題ごとの分科会を２回開催する。まず全体研究会を開いて課題の設定を確認し，分科会で研究を進捗させ，もう一度全体研究会を開いて研究成果を確認しその意味づけを行う。ミクロな議論を分科会で，マクロな議論を全体研究会で行うことにより，技術論と意味論の有機的なかみ合いを常に意識して研究をすすめることとする。

高度情報検索班では，データベースの入力フィールドの項目ごとの利用度を分析するとともに，入力される語を分析する。つぎに，もの資料を対象として，関連語抽出の適合性を評価する。

大規模デジタル画像管理班では，館が所蔵する大規模画像群のいくつかをとりあげ，その構造を理解し，どのように画像データが利用者に提供されるべきかについて検討を行う。

デジタル展示班では，試作するデジタル展示の概要を検討するとともに，コンピュータグラフィックスやマンマシンインタフェイスの基礎技術を確認する。とくに体感操作型ゲームコントローラを用いた身体動作の検出と操作情報の抽出についての基礎的な技術を会得する。

利用者分析班では，端末操作の記録から所望の情報を抽出するためのデータ解析技術を確認する。

３．今年度の研究経過

徳永教授には，ご本人からの申し出により，大規模デジタル画像管理班に参加していただき，館蔵錦絵コレクションを題材として，画像管理手法の研究を手がけていただくこととした。

村田研究員には，研究代表者からの要請により，デジタル展示班に参加していただき，東京国立博物館における背景画像の撮影作業等のサポートをお願いした。

津田氏には，ご本人からの申し出により，デジタル展示班から，高度情報検索班と大規模デジタル画像管理班に変更し，具体的な研究テーマについて９月の分科会でご検討をいただいた。

今年度末における各班の構成は以下の通り。高度情報検索班：小町，山田，津田，仁藤，安達；大規模デジタル画像管理：徳永，村田，津田，青山，仁藤，安達，鈴木；デジタル展示：田中，村田，北村，大久保，鈴木；利用者分析：徳永，安達，鈴木。

７月 23 日に，第１回全体研究会を本館において実施した。各班の活動計画が改めて示され，各班ごとに分科会を開催して，研究を進展させることを確認した．また，公募研究者である北村，津田については，分科会を通じて研究テーマを絞り込んでいただくこととした。参加者：鈴木，仁藤，青山，大久保（以上館内），小町，田中，徳永，山田，津田（以上館外）。

８月 26 日・27 日に，デジタル展示班第１回分科会を，東京国立博物館および本館において実施した。田中よりこれまでの研究成果について概要が説明され，おもにデジタル資料をどのような環境下で鑑賞することが効果的かについて，ディスカッションを実施するとともに，両博物館の展示の現状を観覧し，意見交換を行なった。参加者：鈴木（館内），田中，村田（以上館外），望月，林（以上研究協力者）。

９月３日に大規模デジタル画像管理班第１回分科会を本館にて実施した。本館錦絵コレクションについて，大久保より概要を説明し，どのような画像管理が有効であるかについてディスカッションを行なった。参加者：鈴木，大久保（以上館内），徳永（館外）。

９月 15 日・16 日に大規模デジタル画像管理班第２回分科会を本館にて実施した。写真コレクションについて青山より，高松宮家コレクションについて小倉より，それぞれ概要を説明し，どのような画像管理が有効であるかについてディスカッションを行なった。参加者：鈴木，安達，青山，小倉（館内），津田（館外）。

９月上旬に，北村（国文研）と，これまでの研究成果についてのプレゼンテーションならびに今後の研究の進め方について打ち合わせを電子メールにより実施した。

３月 17 日に第２回全体研究会を計画したが，東北地方太平洋沖地震の発生にともない，中止を余儀なくされた。

４．今年度の研究成果

高度情報検索班については，館蔵資料データベースのうち考古資料に関する記述をデータとして，関連語の抽出ならびにその適合性について評価を行ない，その成果を画像電子学会画像ミュージアム研究会で発表した。

大規模デジタル画像管理班については，館蔵錦絵コレクション，高松宮家伝来禁裏本データベース，ならびに石井實フォトライブラリーについて，各コレクションの概要の確認，画像群の構造の理解，ならびにどのように画像データが利用者に提供されるべきかについての検討を実施した。

デジタル展示班については，試作するデジタル展示の概要を検討した。東京国立博物館における調査では，これまでの研究の状況と，本研究で何を目指すかについての確認，ならびに，デジタル展示の背景画像として，東京国立博物館が所有する茶室や庭園等を利用することの可能性について検討を行なった。あわせて，コンピュータグラフィックスやマンマシンインタフェイスの基礎技術を確認を確認し，体感操作型ゲームコントローラを用いた身体動作の検出と操作情報の抽出についての基礎的な技術について調査を行ない，実用のめどを得ることができた。

利用者分析班については，端末操作の記録から所望の情報を抽出するためのデータ解析技術を確認することをめざしたが，これについては，ログ取得ソフトウェアの準備が遅れ，実施に至らなかった。

高度情報検索班，大規模デジタル画像管理班，デジタル展示班については，計画通り研究を実施することができたが，利用者分析班については予定の計画を実施できなかった。来年度には挽回できるよう巻き返したい。

研究者には，対外発表を積極的に行なってほしいことと，平成 25 年度に研究をとりまとめて国立歴史民俗博物館研究報告への論文投稿を目指して，内容のある研究の実施をお願いしているところであり，目標達成に向けて努力したい。

５．本共同研究に関連する研究発表

［デジタル展示班：基盤技術］戸谷重幸，林一成，望月宏祐，田中法博，禹 在勇：ＧＰＵを用いたマルチプラットフォーム型の分光レンダリングシステム，第４回色彩情報シンポジウム in 長野 2010．2010 年 11 月 6 日，長野大学（長野県上田市）。

［デジタル展示班：基盤技術］林 一成，望月宏祐，田中法博，禹 在勇，三浦幹彦，森川英明：Wii リモコンを用いたデジタルアーカイブのためのユーザインタフェイスの開発。同上。

［デジタル展示班：基盤技術］宮下朋也，権田一樹，鈴木雅也，斧尭弘，田中法博，禹在勇：分光ベースレンダリングを用いた複合現実感技術。同上。

［高度情報検索班：成果発表］小野田賢人，徳永幸生，杉山精，安達文夫：歴史ＤＢの検索インタフェース

設計に向けた検索語の分析。画像電子学会第９回画像ミュージアム研究会「博物館資料とその情報」。2011年２月18日，常翔学園大阪センター（大阪市北区）。

［デジタル展示班：成果発表］山田　篤，小町祐史，安達文夫：博物館情報探索における到達容易性向上のための資料群分割の効果，同上。

［デジタル展示班：基盤技術］鈴木卓治：PowerPointを用いた外部機器との連携をともなう展示用電子コンテンツの作成事例，同上。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

氏名	所属	氏名	所属
小町　祐史	大阪工業大学情報科学部	田中　法博	長野大学企業情報学部
徳永　幸生	芝浦工業大学工学部	村田　良二	東京国立博物館
山田　　篤	（財）京都高度技術研究所	北村　啓子	国文学研究資料館
津田　光弘	イパレット	青山　宏夫	本館・研究部・教授
○安達　文夫	本館・研究部・教授	大久保純一	本館・研究部・教授
◎鈴木　卓治	本館・研究部・准教授	仁藤　敦史	本館・研究部・教授

C 「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究―『死・葬送・墓制資料集成』の分析と追跡を中心に―」 2010～2012 年度

（研究代表者　関沢　まゆみ）

１．目　的

1997 年度・98 年度に本館が行なった博物館資料調査「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」から，10 年以上が経過した現在，その後の日本各地の葬送墓制の伝承はまたさらに大きく変化している。とくに，2000 年を境に，農村部においても葬祭場の建設が相次ぎ，葬儀の場所が自宅から葬祭場へと移り，それにともなって葬送儀礼の省略や死穢忌避観念の稀薄化などが指摘されるようになってきている。本共同研究では，第一に，この博物館資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４（1999 年・2000 年刊行）をもとに，その追跡調査を行ない，葬送・墓制の変化の実態を調査分析することを目的とする。これには，Ａ：各地の葬送・墓制の変化の実態を調査分析（地域単位），Ｂ：テーマごと（広く面で）（例：洗骨・改葬習俗の変化，サンマイ利用の変化，土葬から火葬へ，自宅葬から葬祭場へなど過渡期のケースの情報蓄積など）の２つを考えている。そして，第二に，各地に伝承されている葬送・墓制に関する民俗とその分布についての情報整理を行ない，日本列島の民俗の地域差の問題を葬送・墓制の側面から考察する。（例：お盆の墓参習俗〈近畿と東北との違い〉，巳正月の習俗〈四国〉，盆に迎える霊と盆棚，その類型差，血縁的関係者と地縁的関係者との役割分担を示唆する例〈棺担ぎ，穴掘り，最初に土を入れる喪主，野焼き等〉など）。第三に，1960 年代から 70 年代の高度経済成長期における生活変化と 2000 年以降におきている生活変化，とくに葬送・墓制の大きな変化と，両者の時差・タイムラグに注目することによって，民俗の伝承の変化と世代交代という問題などについての分析を行なう。

本共同研究は，本館の資料調査報告書『死・葬送・墓制資料集成』１～４に得られている情報資料をもとにそれを活用して，民俗学の基本的研究課題である時間差と地域差という両者を視野に入れた研究展開を試

みるものである。

２．今年度の研究目的

東北，関東，東海，中部，北陸，近畿，四国，中国，九州の各地方における2000年以降の葬送・墓制の変化に関する追跡調査を行なうことに重点をおき，秋以降，研究会において共同研究員各位による中間報告を随時行なう。中間報告の内容は，研究会記録として刊行し，情報の共有をはかる。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕今年度は３回の研究会を開催することができた。

第１回研究会　日時：2010年５月８日（土）　場所：国立歴史民俗博物館

（１）共同研究員各位の研究紹介，（２）代表者による本共同研究の主旨説明が行なわれた。研究の目的においては，①『死・葬送・墓制資料集成』をもとに，その追跡調査の実施（各地の葬送・墓制の変化の実態を調査し分析する，1960年代と1990年代の事例調査に加えて現在の2010年前後の実態調査を行なう)。②テーマごとに一定範囲で調査と分析を試みる（南西諸島における洗骨・改葬習俗の変化，近畿地方のサンマイの利用の変化，土葬から火葬へ，自宅葬から葬祭場葬へなど過渡期のケースの情報蓄積など)。③列島の範囲での民俗の地域差への視点を取り入れる。④高度経済成長期の変化への注目，の４点について提案がなされ，各位の意見交換が行なわれた。

第２回研究会　日時：2010年11月13日（土）　場所：国立歴史民俗博物館

研究発表

関沢まゆみ「火葬の普及とサンマイ利用の変化―滋賀県下の事例より―」

鈴木　岩弓「東北地方の骨葬習俗」

倉石あつ子「高度経済成長期以降の葬儀の縮小化―家族・介護・看取り・葬送儀礼―」

西村　　明「習俗の伝承か，さらなる変化のプロセスか」

第３回研究会　日時：2010年12月４日（土）・５日（日）　場所：国立歴史民俗博物館

研究発表

松田香代子（愛知大学・非常勤講師）「静岡県裾野市における葬儀の現状」

菊池　建策「葬式の今と昔」

大本　敬久「四国における巳正月行事」

武井　基晃「移動をともなう祖先祭祀と自動車の普及
―沖縄のシーミーとウマチーを中心に―」

〔調査〕

共同研究員各位によるフィールドワークにより，各地の葬送・墓制の変化についての資料情報が蓄積されている。

４．今年度の研究成果

2010年度は共同研究の第１年目であり，共同研究員各位が葬送墓制の変化に関する民俗調査を行ない，研究会においては各地の葬送墓制の変化の実態に関する情報共有と意見交換を行なった。

まず，福島県，長野県，静岡県などの追跡調査の報告では，死亡から通夜，葬儀（告別式)，火葬，納骨までの順番が多様で混乱していることがあらためて確認された。なかでも公営火葬場の利用による新たな火葬の普及によって現れた，葬儀より前に遺体を火葬にしてしまう「骨葬」が注目された。論点の一つは，骨葬

について現在までにどのような地域差が生じてきているのか，という点であった。もともと伝統的には土葬であってそこに新たに火葬が入ってきた地域の場合と，もともとが野焼きなど伝統的な火葬が行なわれていたところに，新たにより簡単便利に火葬ができる公営の火葬場施設が作られた場合と，その両者における火葬骨に対する意識，受け入れ方の違いがみられるのではないかという問題であった。また二つ目は，この簡便な遺体処理の普及と従来の死霊に対する畏怖の観念の変化との関係についてであった。この問題は，近年，葬儀の場での霊魂話があまり語られなくなってきていることとも関連し，また逆に「トイレの花子さん」などの現代的な怪談のたぐいが流行ってくるプロセスや，楳図かずおのホラー漫画や水木しげるの妖怪漫画などのブームの起こりとその変遷とが，葬儀の変遷と関係しているのではないかというその可能性についての追跡が提案された。また，共同研究員自身の問題として，都市移住と墓の問題，高度経済成長期に起因する習俗の変化の追跡と研究上の世代責任，などについても意見交換が行なわれた。

共同研究員および研究協力者の間で本研究会の情報を共有し，今後の研究活動への参考とするために，第２回研究会 2010 年 11 月 13 日（土）と第３回研究会 12 月４日（土）・５日（日）の発表要旨と質疑応答とをまとめて編集のうえ，簡易製本を行なった（95 ページ）。これらを次年度以降の調査研究に反映させていくことができればと思う。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大本　敬久　愛媛県歴史文化博物館・専門学芸員
菊池　健策　文化庁文化財部伝統文化課・主任文化財調査官
倉石あつ子　跡見学園女子大学文学部・教授
新谷　尚紀　國學院大學大学院・教授
鈴木　岩弓　東北大学大学院・教授
武井　基晃　筑波大学大学院人文社会科学研究科・助教
西村　　明　鹿児島大学法文学部・准教授
米田　　実　甲賀市教育委員会歴史文化財課・市史編さん室係長
小池　淳一　本館・研究部・准教授
常光　　徹　本館・研究部・教授
○山田　慎也　本館・研究部・准教授
◎関沢まゆみ　本館・研究部・准教授

D　「民俗研究映像の制作と研究資源化に関する研究」2010～2012 年
（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

歴博が民俗研究の一環として 1988 年よりおこなってきた民俗研究映像に関して，完成作品と素材映像の保存・活用を推進するとともに，新規で制作する映像の方法論について，館内外の研究者とともに検討するため，2004 年度以降，共同研究の枠組みで取り組んできた。

第１期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」（2004－2006 年，代表：内田順子）では，制作から活用にいたるプロセスを検討し，権利処理等，活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築し，第２期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」（2007－2009 年，代表：青木隆浩）ではそれに基づいて映像制作をおこなってきた。その成果は，2006 年度にはじまった歴博映像フォーラムの開催による民俗研究映像の一般公開や，2007 年度から実施がスタートした，DVD での館外への貸し出しなど，

民俗研究映像の公開促進につながっている。また第２期では，過去の作品の素材のコピーを作成するなど，映像の保存対策も講じてきた。

しかしながら，多量に存在する撮影素材の保存と活用については，適切なメディア，フォーマット，データベースなど，技術的な問題を解決するという課題が残されている。そこで第３期では，大学における民族学や科学分野での映像の制作と資源化のとりくみおよび理論構築を参考にしつつ，新規で制作する３作品と，過去に制作された３作品を対象に，撮影素材の保存と活用のためのデータベース化まで含んだワークフローを構築することを目的とした共同研究を実施する。また，新規で制作する作品では，それぞれの作品のテーマに適したかたちで撮影地の人びとや研究者などと共同で制作してゆく。成果を共有しつつ発信することによって，日常生活や儀礼，信仰，生業の伝承という問題への関心を高めるとともに，立場の異なる人びとを結びつけ，あらたなネットワーク構築に貢献できる映像メディアのありかたの開発へとつなげてゆくためである。

２．今年度の研究目的

今年度のテーマ：生活技術伝承における映像活用

生活形態の変化や自然素材の入手の難しさから，かつてはその地域では誰でも知っていた生活技術の伝承が困難な状況になっている。それぞれの地域では，さまざまなネットワークをつくり，その活動を通して生活技術の伝承を図ろうと取り組んでいる。地域の有志で長年取り組んでいる平取アイヌ文化保存会による植物利用技術の伝承活動，国・道・白老町によっておこなわれているアイヌの伝統的生活空間（イオル）再生事業，博物館を基盤とした伝承活動をおこなっている白老のアイヌ民族博物館の取り組みを撮影対象とし，これらの地域的取り組みに，記録としての映像をどのように活用することが可能であるのか，映像による記録，データベース化，地域への映像のフィードバックをおこないつつ，地域ネットワークに参与する形で映像を制作してゆく。その他，2009 年度作品に関する研究会，映像の研究資源化およびデータベース化に関する研究会，2009 年度作品の英語版の制作，過去の作品のデジタル化を行う。

３．今年度の研究経過

第１回研究会

日時：５月 30 日（日）14:00～18:30

場所：国立歴史民俗博物館　応接室・講堂

内容：共同研究会の目的と共同研究員の紹介

「平成の酒造り　製造編」（88 分）

「平成の酒造り　継承・革新編」（88 分）

制作者による解説（青木隆浩）

質疑･討論

第２回研究会

日時：１月 23 日（日）　13:30～17:00

場所：国立歴史民俗博物館　第二会議室

内容：「アイヌの伝統と現在」の制作の中間報告（上映と解説：内田順子）

討論

第３回研究会

日時：２月 17 日（木）　15:00～18:00
場所：株式会社東京光音（渋谷区初台）
内容：古いフィルムの保存・複製をおこなっている業者において，施設の見学をおこなったほか，基本的な事柄から専門的な事項にいたるまで，技術者の解説を受け，質疑をおこなった。

４．今年度の研究成果

〔映像制作〕

内田順子「アイヌの伝統と現在」

今年度は，アイヌ文化の継承活動を対象として，民俗研究映像の制作をおこなった。

地域の有志による伝承活動として，平取アイヌ文化保存会の活動を記録したほか，博物館という場を基盤としておこなわれている伝承活動として，白老のアイヌ民族博物館の取り組みを撮影した。平取では，山の資源に関する生活文化の伝承活動を中心に撮影した。一方白老では，シリカプ（カジキ）の送りの儀礼など，海の資源に関わる儀礼を中心に撮影した。編集では，アイヌ文化の地域的多様性，保存会/博物館という伝承基盤のほか，現在進行形で進んでいるアイヌ文化振興事業との関わりなど，映像に映り込んでいる 2010 年度だからこそ起こりえた様々な事象に留意した。受け継ぐべき「伝統」について，それを伝承しようとする人々自身が，生活の中で，伝承活動の中で，さまざまに模索している姿が記録できたのではないか。

〔民俗研究映像の英語版制作〕

「平成の酒造り　製造編」（2009 年度，青木隆浩制作）
「平成の酒造り　継承・革新編」（2009 年度，青木隆浩制作）

〔研究会〕

第１回研究会では，2009 年度に青木隆浩が制作した「平成の酒造り　製造編」（2009 年度，青木隆浩制作）および「平成の酒造り　継承・革新編」を上映し，それらの内容について議論をおこなった。その際，映像を編集して完成させる前に，撮影素材を共同研究員で見て，どのように仕上げていくのがよいのか，制作者と討論をおこなったほうがよいとの提案があった。そこで第２回研究会では，2010 年度制作の「アイヌの伝統と現在」の素材の一部を上映し，編集の方向性について研究員で議論した。制作者自身は，制作期間中，撮影対象を近視眼的に見てしまう傾向があるため，作品完成前に第３者と意見を交わすプロセスの重要性が実感された。第３回研究会は，古いフィルムの保存と複製についての専門的な知識と技術を有する業者を巡検し，技術者の解説と質疑を経て，映像の保存や活用について留意すべき事柄の整理をおこなった。

〔歴博映像フォーラム〕

「平成の酒造り」

日　時：2010 年９月４日（土）11 時 00 分～17 時 30 分
場　所：新宿明治安田生命ホール
上　映：「平成の酒造り　製造編」（2009 年度　青木隆浩制作）
「平成の酒造り　継承・革新編」（2009 年度　青木隆浩制作）
講　演：岡本竹己（栃木県産業技術センター食品技術部・特別研究員）「栃木の酒造りと次世代酒造技術者育成への取り組み」
報告：宮地英敏（九州大学附属図書館付設記録資料館・准教授）「杜氏労働の歴史的特性」
湯澤規子（筑波大学大学院生命環境科学研究科・助教）「甲州勝沼におけるぶどう生産とワイン醸造の展開」

［撮影素材のデジタル化］

昭和 30 年代に屋久島で撮影されたホームムービーの８㎜フィルム 44 本の提供が現地調査により受けられることになり，内容的に，歴博の民俗研究の資料として重要であると認められたため，ＨＤテレシネを実施した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

乾　　尚彦	学習院女子大学		梅野　光興	高知県立歴史民俗資料館
新谷　尚紀	國學院大學		分藤　大翼	信州大学全学教育機構
村尾　静二	総合研究大学院大学葉山高等研究センター		青木　隆浩	本館・研究部・准教授
小池　淳一	本館・研究部・准教授		関沢まゆみ	本館・研究部・准教授
常光　　徹	本館・研究部・教授		松尾　恒一	本館・研究部・教授
山田　慎也	本館・研究部・准教授		上野　祥史	本館・研究部・准教授
鈴木　卓治	本館・研究部・准教授		○松田　睦彦	本館・研究部・助教
◎内田　順子	本館・研究部・准教授			

Ｅ 「中近世における武士と武家の資料論的研究」2008～2010 年度
（研究代表者　高橋一樹）

１．目　的

本研究は，日本における通史的武士論構築のための段階的・問題提起的研究として，中世・近世の武家文書以下の各種資料（群）にもとづいた新しい時代像・歴史像を検討するものである。そして，その成果の一端を企画展示として構成，公開し，研究者のみならず社会一般からの意見・批判を含めて，研究の到達点の可視化と新たな研究課題の発見を得ることを目的とする。

歴史資料としての武家文書は，これまで，①内容分析による歴史叙述，②様式分類を中心とした古文書学的研究，それぞれの素材として取り扱われてきた。そこでは，中世と近世という既存の時代区分に依拠して研究が分断的に進められてきた。また，近世以来の考証史学的手法と近代歴史学に共通する古文書の偏重姿勢によって，それと一緒に伝来した多様な史資料との関連性が等閑視されてきた。

しかし，12 世紀末葉から 19 世紀後半におよぶ武人政権の断続的な出現や「武士」「侍」の存在といった歴史的事実，あるいは近代以降の武士イメージの再生産や新たな創出といった政治的イデオロギーとの関係に照らしても，従来型の縦割り的な研究方法がもつ弊害を認めざるを得ない。比較史的研究が警鐘を鳴らしているように，長期間にわたる武人政権の存続と武士の行政官僚化は特殊日本的な現象である。武士が文書行政の担い手として展開するプロセスをはじめ，武士やその家にもとめられる政治的・社会的要素の変化が文書以下のモノ資料にいかに反映し，どのような影響を与えたのか，つまり武士を武士たらしめているものはなにか，ということも決して自明ではない。

文書などの武士関係資料は，家を媒介として一定の時間軸のもとに連続性をもって伝来・存在している。このことに注視しながらも，それを固定的にとらえるのではなく，たとえば文書の内容や性格の移り変わり（中世の権利証書から近世の儀礼資料へ），文書そのものの移動や偽作，頻繁な書写や情報の改竄・隠蔽，資料群としての再編成の繰り返しなど，モノとしての動態的な要素を観察することによって，それを行う人間

＝武士の意識や武士（武家）の連続と断絶を明らかにし，それらを取り巻く国家・社会のあり方を読み解き，既存の時間区分とは異なる新たな枠組みを設定することが可能と考える。

本研究は，武家文書の通時代的研究の必要性を訴える近年の研究動向もふまえながら，既存の時代区分の枠を取り除いて，上記のような観点から文書以下の武家資料群を原本調査に即して分析する。さしあたっては，モノとしての文書のライフサイクルはもとより，文書のフォーマットや外的な形態に着目し，公家文書や寺社文書あるいは地域の民衆世界に残された文書史料とあわせみることによって，武家文書の作成・保存・機能がもつ社会的影響を考察する。また，モノとしての機能や伝来理由という点については，武士あるいは武家の表象としての文書（たとえば威信材）という視点を導入し，文書以外の史資料（武器武具・絵画・和歌資料・茶道具・華道資料など）との関係構造を検討する。その際，これまで研究の蓄積の薄い中近世の漆紙文書などの考古資料も検討材料として重視する。

研究の体制としては，本館が所蔵する中世・近世の武家文書等を中核としつつも，人間文化研究機構内の研究機関はもとより，国内の歴史博物館との協業により，可能なかぎりの資料の集成と検討の体制を作りたい。あわせて，本館を含む全国の歴史系博物館・資料館が抱える文書展示の困難性を打開するために，情報工学等との連携を含めて，新たな文書展示の方法を開拓することも模索したい。

２．今年度の研究計画

展示準備に関する全体研究会・資料調査　武士・武家の史資料（群）に関して，展示構成および展示資料の具体化と選定，図録の執筆を念頭に，企画展示の開設以前に２回の全体研究会・資料調査を行う。前年度に実施できなかった考古学の城館・屋敷論も組み込む。

展示開設　上記の調査研究活動とリンクさせて，展示開設準備と実験的な図録の製作を行う。その際，デジタル技術の援用による展示手法を組み込む。あわせて，展示場でのギャラリー・トークや大学・大学院の講義・見学への対応などを通じて第三者からの成果と課題の抽出を行う。

継続する資料・展示調査　本多家文書を中心とする近世の資料調査を，ワーキンググループ形式で館外共同研究員の随時参加を得て，メール等を通じて全体で共有しながら進める。また，過去に開催された武士・武家資料に関係する他館の展示図録等についての情報を活用し，武士展示の手法（現代の研究者による表象の方法）やその歴史についての検討を実際の展示構築に生かす。

展示開設後の全体研究会・資料調査　企画展示の現場における批評会を含めて，機能論の観点のもとに史料学的研究の報告と表象論的研究の報告を中心にした全体研究会と資料調査を本館で２回開催する。博物館型研究統合の観点から，展示によって得られる新たな論点・課題の発見・整理に重点をおく。展示批評のゲストスピーカーも招聘する。当初計画との変更点は特にないが，博物館型研究統合の観点から，企画展示を準備する共同研究という位置づけだけでなく，企画展示の開設後（つまり実際の史資料が配列された場の共有）を重視する（ある意味，あらためて出発する）共同研究という性格づけをも自覚し，その具体的な方法論についても模索することとしたい。

３．今年度の研究経過

本研究のもっとも重要な研究方法の柱である企画展示の開催準備と実際に展示空間と資料を使った研究を中心に最終年度の活動を展開した。

５月 15 日・16 日　第９回研究会　於新潟県立歴史博物館

・研究報告

湯浅　治久「中世武士と寺院に関する議論と史料」（ゲストスピーカー）

久留島典子「益田家文書を活用した由緒論的展示について」

菱沼　一憲「戦功認定文書の通史的展示について」（ゲストスピーカー）

・全体討論

企画展示「武士とはなにか」展示資料全点の趣旨説明と検討

・新潟県立歴史博物館の常設展示および企画展示の見学

・越後文書宝翰集の原本熟覧および紀州本川中島合戦図屏風複製の熟覧

12 月 7 日　第 10 回研究会　於国立歴史民俗博物館

・展示批評　平川新（ゲストスピーカー）

12 月 25 日・26 日　第 11 回研究会　於国立歴史民俗博物館

・企画展示「武士とはなにか」および総合展示１室・２室・３室・５室における関連展示・特集展示の自己批評と展示の成果・課題についての全体討論

１月 30 日　第 12 回研究会　於国立歴史民俗博物館

・研究会　共同研究の成果・反省と研究報告特集号への集約について

高橋　一樹「企画展示「武士とはなにか」を通してみた成果と課題」

小島　道裕「武士関係資料の分類に関する再検討」

・全体討論

４．全期間の研究成果

本研究は展示型共同研究として館内初めてのケースであり，その研究活動の進め方について試行錯誤の要素を多分に含むが，研究期間３年目の秋までは企画展示準備を主たる方法とする共同研究という性格づけとし，展示オープン以後から実際の展示空間・資料を活用した狭義の共同研究をプロジェクト外の研究者も含めて行うこととした。2010 年秋の企画展示開催までを共同研究のなかでの展示準備研究と位置づけ，より狭義の共同研究を展示開催中からの約半年間と割り切って設定したのであり，それによって研究活動の計画性が高まり，かつ各年度の目標もより明確になったと考えられる。

１年目は，武士・武家の関係資料をどのように資料論的に把握するかについて，文書・典籍・武器武具・絵画・諸道具などのように，学問分野や研究方法に立脚した即物的なステレオタイプの分類ではなく，現代までを視野に入れた通時的な機能の観点から，

①　武士・武家による自己表象

②　武士・武家以外の他者による表象

という類型立てを作業仮説として提起した。

さらに，人間文化研究機構の連携研究「武士関係資料の総合化」との合同の研究会・資料調査および討論を経て，そこに資料が生成される動機の変化や伝来形態のバリエーション，あるいは多次的な機能の変容といった，資料をめぐる歴史的動態を組み込むために時間軸を導入し，

ア）同時代

イ）後世

の軸で把握する方法が提案された。ただし，この「同時代」と「後世」という時間軸は絶対的かつ静態的な

区分ではなく，可変性をともなう重層的なものであることに留意することが必要であり，その時期区分の変動を規定する要素の具体的検出がもとめられる。さらに，上記に加えて，通時的な資料の量的推移も組み込むことによって，三次元による武士関係資料の動態を可視的に把握することが可能になる。

武士・武家関係資料の総体を十分に掴むことは容易ではないが，現実にはさまざまなかたちで存在する（存在した）資料の立ち位置を理論的に整理・把握する仮説が得られたことは大きな成果である。そのうえで，関東圏の博物館で開催されている展示の見学を重ねるなかで，中世と近世を通じた武家の家伝資料群のバリエーションについても，研究史のレビューから得られた想定を超える事例が，具体的な素材（資料群）の裏付けをもって獲得でき，その実際の展示（現代における歴史研究に裏付けられた表象）方法のあり方についても展示の現場で議論することができた点も重要である。

２年目は，武士の実像を表現する武器・武具の通史的展示に関する報告と議論を中心とした研究会と，展示構成案の報告と議論を行う企画展示プロジェクト委員会と合同の研究会を開催した。それと並行して，群馬県桐生市の彦部家資料および同家住宅の個別調査を実施し，本研究とタイアップして開催する企画展示での活用を含めて検討した。この間の活動を通じて，本研究の研究目的にある，中世と近世を通じた武士と武家に関する資料論的研究と表象論的研究を総括する分析視角として，武士・武家にかかわる多様な資料の機能とその多次的変容に着目し，それらを各時期の社会的文脈のなかに位置づける作業を意識的に進めた。

３年目は過去２年間の活動の蓄積をふまえて，企画展示の準備と実際の展示を使った独自な研究方法をとりうる最終年度であり，年度当初に資料論的な観点から展示を構成するためのメルクマールを以下のように設定した。

① 中世と近世を一貫させた視座の確保。とくに時代間の連続と断絶の両面に留意する。
② 資料（群）の機能とその変化，つまり資料が生成され存在していくことの意味を問う。
③ 自己表象と他者表象（後世の武士による前代の武士に対する表象をも含む）の分別とそれぞれの具体相の追究を行う。
④ 各分野ごとの資料における武士の固有性の有無について検討する。
⑤ 武士個人（男）と武家（男と女）の区別とジェンダーの視点を組み込んだ分析。
⑥ 武士の存在理由とその表象のあり方を国際関係の文脈のなかで検証する。
⑦ 武士階級内部の階層的秩序，とくに「差別」の実態を資料に即して掘り起こす。
⑧ 生活史の視点を保持して，可能なかぎり衣・食・住の具体像に配慮する。

以上の８点をふまえて，これまで各分野ごとに縦割りの研究対象とされてきた文献資料・武器武具資料・美術資料・考古資料などを武家関係資料（群）として総合化することを基調としながら，展示趣旨の概要を示すプロローグ「武士を描く・武士が書く」につづき，「戦いのかたち」「武家のひろがり」「武士のイメージと軍学者」「文武両道」の４テーマに，武士身分の消滅した近代以降にも論及するエピローグの「武士の消滅と新しい「武士道」」を配した構成のもと，武士・武家の社会的機能とその変質，生活史，そして武士イメージの創出とその歴史的背景やメディアの特色を中心に学際的な資料を展示することができた。あわせて，総頁 213 ページにおよぶ展示解説図録を編集し刊行することができた。

武士の多様性や時代的特質を示すことから「武士とはなにか」という基本的な問題設定の有効性を問いかけた企画展示では，資料の総合化とその機能の変遷を軸とするコーナー設定と資料配置がおおむね好評を得ることができ，中世と近世の協業によって長い時間軸を扱いながら武士イメージの創作をも対象にしたこと

で，偽文書や系図，由緒書，文学作品，軍学資料，錦絵などの資料的性格と相互関係が展示によって可視化され，それらの史料としての研究を活性化させるうえで一定の問題提起を行うことができた。また，これらの資料（群）が生成されるコンテクスト自体の慎重な検討と，それに即した資料の配列やその解説（共同研究員＝展示プロジェクト委員による展示場でのギャラリー・トーク）は，文書を中心とした文字資料の難解な読解とその内容理解を「強要」してきた従来の文書展示に反省を迫り，必ずしも文字読解を必要としない展示方法の開拓に大きなヒントが得られた。衣・食・住の生活史についても，屋敷・館（ハードウェア）の枠組みのもとに資料群を組織し,考古学の成果を取り入れた屋敷じたいの時代変化と組み合わせて展示した。

一方，中世と近世を結んだ資料内在的な共同研究には大きな課題が残されており，近世以降における武士イメージの形成とも密接不可分にかかわって，近世末期の再軍備の時期に武器武具資料や戦功認定文書などさまざまな資料群において中世への回帰，中世武士のイメージが呼び出されて実体化する現象が確認されたが，その歴史的背景を論理化する作業は今後の課題となった。また，戦士を本質とする武士の存在理由ともかかわる番役の通史的検討や，武芸の担い手に関する社会的広がりの追究とその歴史的評価の問題なども残された。とくに最後の論点は，平川新氏による展示批評（『歴博』165 号，2011 年３月）でも強く指摘されたところである。

歴史展示という現代における表象手法の研究に関連して，歴博でははじめて資料原本の代替物として戦国合戦図屏風のデジタル資料をタッチパネルを使って展示したのをはじめ，展示箇所以外の資料内容をみることができるよう設置したデジタル・ツールは iPad の導入もあって観覧者の好評を博した。当初，目標としていたテジタル・ツールを活用した文書展示の開発は種々の事情により断念せざるをえなかったが，いわゆる複合文書の理解にデジタル画像がきわめて有効に機能することなどが議論され，その実用化を総合展示で検討していくこととした。

企画展示で刊行した展示解説図録には論考編を掲載せず，展示趣旨の解説を補うコラムのみ執筆・掲載した。実際の資料配列をともなう展示の開催と図録刊行をふまえたうえで，本研究（企画展示を含めて）を通して得られた上記のような新たな視角にもとづいて共同研究員等が各自，論考にまとめ，2012 年度内に研究報告の特集号として編集，刊行する予定である。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大友　一雄　国文学研究資料館研究部　　久留島典子　東京大学史料編纂所
近藤　好和　本館・研究部客員教授　　佐伯　真一　青山学院大学文学部
佐藤　宏之　鹿児島大学教育学部　　高久　智広　神戸市立博物館
高橋　裕次　東京国立博物館　　富田　正弘　学識経験者
マルクス・リュッターマン　国際日本文化研究センター・研究部
前嶋　　敏　新潟県立歴史博物館　　青山　宏夫　本館・研究部
安達　文夫　本館・研究部　　岩淵　令治　本館・研究部
井原今朝男　本館・研究部　　大久保純一　本館・研究部
久留島　浩　本館・研究部　　工藤　航平　本館・リサーチアシスタント
西山　　剛　本館・リサーチアシスタント　　三野　行徳　本館・リサーチアシスタント
菱沼　一憲　本館共同研究協力者　　○小島　道裕　本館・研究部
◎高橋　一樹　本館・研究部

Ｆ　「【展示型】『地理写真』の資料化と活用」2009～2011 年度
（研究代表者　青山　宏夫）

１．目　的

本館所蔵の「石井實フォトライブラリー」は,小学校・高校・大学の地理教員であった故石井實氏（1926-2007）が，終戦直後から 2007 年までの 60 年あまりのあいだに，日本各地（一部に外国を含む）で撮影した，40 万点を越える「地理写真」を中心とする一大資料群である。本研究は，この「地理写真」を研究利用に供しうるように資料化するとともに，有効性と限界を見きわめつつ，その活用を図ることを目的とする。これは，近代以降において多量に残されている写真を，近現代研究に活用する可能性を探る試みでもある。また，最終年度の平成 23（2011）年秋には，その成果にもとづいて企画展示を開催する。

近代以降，写真は多量に撮影されているが，撮影日や撮影場所などの基礎データが整備されたものは一部にすぎない。また，資料としての写真の利用法や読解法も含めた資料論も，必ずしも充分に確立しているわけではない。

このようななかにあって，石井實フォトライブラリーの写真は，撮影日ごとに整理され，克明な撮影日誌も残されている。本研究では，以上の点をふまえて，第一に，同フォトライブラリーの写真について，時間データ・空間データ・被写体・撮影テーマなどの付与すべき基礎データの検討と，写真資料データベースの検索法の検討とを試みる（写真の資料化）。第二に，写真に写された景観について，①当該分野の専門的研究者によるモノグラフ的な視点，②関連する写真以外の資料からの検討，③写真相互の時間的・空間的連続性への配慮などの諸点から読解する（写真の活用）。とりわけ，自然景観・都市景観・農山村景観などや，生業・祭礼などの生活文化に注目して読解し，その成果を展示として公開する。これらを通じて，資料化・主題的研究・展示などを連関させて，写真資料を中心とした博物館型研究統合を実践する。

なお，本研究における作業効率の向上，および３年後に開催予定の企画展示とその後の写真資料の公開のために，同フォトライブラリーの写真フィルム約 40 万点について，適宜スキャニングしてデジタル化を進める。

２．今年度の研究目的・計画

前年度から行った写真検索のためのキーワードの検討を継続するとともに，検索法の構築に向けた準備に入る。また，写真の読解をふまえて，写真以外の文献資料・モノ資料などと関連づけることによって，写真に写された主題・景観・生活文化などを立体的に展示する方法について検討する。あわせて，奥多摩町峰地区の三匹獅子舞などの社会調査，および景観・生業に関する調査のほか，東京都市部における都市景観の調査も実施する。これらの検討を通じて展示資料の選定を進めるとともに，企画展示の構成を検討して開催要項と展示図録の構成案を決定する。

３．今年度の研究経過

第１回研究会（８月７日　国立歴史民俗博物館）

第６展示室および特集展示における写真利用について検討するとともに，次年度の企画展示開催に向けて展示構想について資料論的な立場から検討し，展示の基本的な方向性を確定した。

東京都奥多摩町調査（９月 18 日～19 日　東京都奥多摩町峰）

石井實フォトライブラリーの多数の写真で撮影対象となった奥多摩町峰の三匹獅子舞について，ビデオ

撮影，写真撮影のほか，現地での聞き取り調査により，追跡調査を実施した。

第２回研究会（11 月 13 日～14 日　国立歴史民俗博物館及び新宿区立歴史博物館）

次の２本の研究報告を中心に絵はがき及び写真帖について検討した。

関戸明子「名所絵はがきから草津温泉の景観を読む」

三木理史「明治・大正期における府県写真帖の成立」

また，新宿区立歴史博物館で開催中の「写真展　新宿風景　Part 1（戦前編）」を観覧し，資料調査するとともに，写真の展示方法について検討した。

長崎大学附属図書館所蔵資料及び長崎市原爆資料館所蔵資料の調査（12 月 16 日～18 日　長崎県）

長崎大学附属図書館の所蔵する幕末・明治期の写真の資料調査及び長崎市原爆資料館の所蔵資料調査並びに展示観覧を行い，それぞれの担当者と意見交換して展示構想の参考とした。

江戸東京博物館及びＪＣＩＩフォトサロン（２月 20 日　東京都）

江戸東京博物館で開催中の「140 年前の江戸城を撮った男　横山松三郎」及びＪＣＩＩフォトサロンで開催中の「古写真にみる明治の東京―芝区・麻布区・赤坂区編」を観覧し，資料調査及び写真の展示方法について検討した。

第３回研究会（２月 24 日　国立歴史民俗博物館）

次の研究報告を中心に，石井實氏の「地理写真」の地理教育史及び地理学史上の意義及びその特質等について検討した。

寺本　潔「地理写真家，石井實の仕事―地と図で切り取る国土の景観―」

また，青山が展示構想について報告した。とくに，幕末江戸の写真について資料的検討の報告を行った。

奈良大学附属図書館所蔵資料の調査（３月 24 日～25 日　奈良県）

奈良大学附属図書館が所蔵する明治・大正期の府県写真帖等の資料調査を実施するとともに，展示構想について検討した。

展示構想の検討及び写真資料の読解並びに現地調査

館内の共同研究のメンバーを中心に展示構想を検討するとともに，石井實フォトライブラリーの写真等の読解を進めた。また，必要に応じて，現地調査・資料調査等（我孫子市教育委員会・旧新橋停車場・宮内庁等）を随時実施した。

35㎜フィルムのデジタル化

35㎜フィルムのうち劣化の著しいものを優先的にスキャニングしデジタル化を進めた。

４．今年度の研究成果

１．研究会等における写真資料に関する議論を踏まえて，企画展示のタイトルを「風景の記録―写真資料を考える―」とし，風景を記録する媒体としての写真に注目して展示を構想し，風景の広がり，風景の変化，風景の多様性を３本の柱とすることを決めた。

２．展示構想を練るなかで展示資料の確定を進めるとともに，資料調査を実施して当該資料の調査カードを作成した。

３．幕末に撮影された写真の資料論的検討により，撮影の時期と場所等について新たな知見をえた。

４．奥多摩町の調査において，石井實フォトライブラーにある 30 年以上前の同地を撮影した写真が，現地の人々の記憶を呼び覚まし，新たな話題も生むことを実感し，写真のもつ記録性や記憶との結びつき

の問題について，認識することができた。

５．写真の撮影地点と日時の基礎的テータを引き続き整理し，エクセルデータとして追加した。

６．石井實氏撮影の写真のなかに建設中の東京タワーがあることから，それとの比較の観点から，現在建設が進んでいる東京スカイツリーの定点撮影を引き続き実施した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

島津　俊之　和歌山大学
中林　一樹　首都大学東京
松尾　容孝　専修大学
畠山　　豊　町田市立博物館
福田　珠己　大阪府立大学
安達　文夫　本館・研究部・教授
久留島　浩　本館・研究部・教授
松尾　恒一　本館・研究部・教授
◎青山　宏夫　本館・研究部・教授
磯谷　達宏　国士舘大学
関戸　明子　群馬大学
椿　真智子　東京学芸大学
小方　　登　京都大学
三木　理史　奈良大学（2010 年度より）
大久保純一　本館・研究部・教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
○原山　浩介　本館・研究部・助教

［リサーチアシスタント］
辰巳　唯人　東京芸術大学・大学院生

G　「【展示型】中世の技術と職人に関する総合的研究」2010～2012 年度
（研究代表者　村木　二郎）

１．目　的

職人技とも呼ばれる日本の伝統技術は，中世に大きく花開いた。海外へ輸出される貿易品目にも工芸品が名を連ね，銅鏡のように中国や朝鮮半島で日本製品のコピーが作られるまでに至る。そういった技術を支えた職人たちの具体的な姿が，次第に明らかになりつつある。

新潟県新発田市北沢遺跡では，陶器窯と製鉄炉，炭焼窯，杣場遺構が一緒に見つかっている。茨城県東海村の村松白根遺跡は大規模な製塩遺跡であるが，遺物から骨細工や鋳物師の存在も知られ，複合的な生産状況が窺える。また，博多や京都，鎌倉などの都市部のほか，港や宿でも生産関連の遺跡や遺物が多数発見され，その蓄積は膨大なものである。さらに，大分市豊後府内遺跡や長崎の遺跡群からは，「キリシタン関連遺物」を中心に海外の技術が多数見受けられる。外来技術が果たしたインパクトとその受容の経過は，技術の転換をリアルに示してくれる。しかし，こういった事例は個別に検討されてきたものの，なかなか全体像を把握するまでには至っていない。そこで，いくつかのテーマにそって整理をし，研究を進めたい。

まず，「時代を作った技術」として，巨大石塔造立，鎌倉大仏鋳造，安土城築城など時代のモニュメントが示す技術の集約を考える。鉄砲のように最先端技術がすぐに反映される道具や，技術の粋を集めた美術工芸品，外来技術もその対象となる。これらは時代のエネルギーの結晶であり，それぞれから技術の到達点を明らかにしたい。

次に，「日常生活を変えた技術」として，焼物，漆器，木製品，石製品やそれらを加工する道具についての基礎的な研究をおこなう。古代以降の技術転換によって道具が普遍化し，中世の生活変化をもたらした。

また日常生活道具ゆえに，それらの生産も消費者の動向を直接反映してさらに変化してゆく。陶器が一般消費者に浸透すると，いかに安くて大量に生産するか工夫を重ね，窯の構造が大きく革新した。同様のことは石臼にも言えそうで，河原の転石を利用して簡便に仕上げるものが登場する。その分，製品が粗悪化するため，道具の差別化も進んだと考えられる。時代性とも合わせ追究していきたい。

また，「技術を担った人々」として，町，村，海山の生産状況を具体的に検証し，技術者集団と権力の関係にまで踏み込んで考える。技術者の背後にある権力のあり方もまた，中世の特徴である。寺院から武家権力への権力交替，自立した職人の存在など，新たな遺跡の発見を踏まえて従来の文献史学との協業を具体的に大いに更新することも可能であろう。

以上のようにして，文献・考古・民俗・美術・分析科学などの多視点からの検討を重ね，新しい中世の技術史像を描きたい。そして，それらの成果を展示で公開したい。

２．今年度の研究目的・計画

初年度は，基本的な遺跡情報・文献資料情報を共有し，展示に利用する資料を大まかに絞っていきたい。そのため，まずは館蔵資料を共同研究員で熟覧・調査し，その活用方法を検討する。また，重要な遺跡をできるだけメンバー全員で見学し，資料を調査しながら，具体的な研究報告を重ねていく。

ほかにも，展示で活用できる資料の複製品を製作しておく。博多・豊後府内出土の生産関連資料を計画している。

３．今年度の研究経過

第１回研究会（６月 19・20 日　国立歴史民俗博物館）

第１回研究会として，共同研究員全員による研究計画の報告。

個別研究報告：齋藤努「金めっきの技法について」

館蔵資料の熟覧・検討：日高薫・高橋一樹・仁藤敦史

第２回研究会（８月 10・11 日　国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：村木二郎「職人図の読み解き－「職人尽絵」を使って」

館蔵資料の熟覧・検討：小野正敏・村木二郎

個別現地調査（９月 30 日　小田原）

石切図屏風・石引図屏風の調査

第３回研究会および現地調査（12 月３日～５日　広島県立歴史博物館ほか）

沼田荘の現地調査および，出土遺物調査

個別研究報告：鈴木康之「草戸千軒町遺跡の近年における研究成果」

：鈴木康之「草戸千軒町遺跡出土井戸材にみる木材加工技術」

：下津間康夫「草戸千軒町遺跡出土漆器の編年」

：四柳嘉章「草戸千軒町遺跡出土漆器の特質」

草戸千軒町遺跡出土遺物の調査

第４回研究会および現地調査（２月 11 日～13 日　諫早市郷土館・松浦史料博物館ほか）

雲仙市神代小路・神代城跡巡見，諫早市沖城跡出土遺物の調査

個別研究報告：佐伯弘次「中世の大島氏と的山大島」

的山大島の中世遺跡巡見，松浦史料館所蔵「絹本著色松浦義像」「渡来上着」調査

４．今年度の研究成果

共同研究を開催するにあたり，これまでの研究成果をわかりやすくまとめておく必要があった。そこで，総合誌『歴博』160 号を「特集 中世の生産技術」とし，共同研究員６名が以下の稿を執筆した。

小野正敏「生産遺跡から中世をみる」

佐伯弘次「寧波と博多の文物・技術の交流」

大澤研一「モノづくり都市 中世の堺」

坪根伸也「外来技術としての鍵と錠」

村木二郎「技術革新の熱意」（コラム）

鈴木康之「結物の普及と木材加工技術」（コラム）

研究会では，各自の計画を報告したため論点が集約され，問題意識も高じ，これまで見逃されていた外来技術の遺物を発見することもできた。また，館蔵資料をリスト化するなかで，展示につながる多くの資料を見出した。

また，博多および豊後府内出土のキリシタンや生産関連の資料を製作した。これらは本研究が目指す企画展示だけでなく，総合展示にも活用できる資料群である。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

大澤　研一	大阪歴史博物館	小野　正敏	人間文化研究機構本部
川口　洋平	学識経験者	栗木　　崇	熱海市教育委員会
佐伯　弘次	九州大学大学院	佐々木健策	小田原市教育委員会
鈴木　康之	広島県立歴史博物館	関　　周一	つくば国際大学
坪根　伸也	大分市教育委員会	中島　圭一	慶應義塾大学
福島　金治	愛知学院大学	四柳　嘉章	石川県輪島漆芸美術館
齋藤　　努	本館・研究部・教授	高橋　一樹	本館・研究部・准教授
仁藤　敦史	本館・研究部・教授	日高　　薫	本館・研究部・教授
○松田　睦彦	本館・研究部・助教	◎村木　二郎	本館・研究部・准教授

H　「中世における儀礼テクストの綜合的研究－館蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として－」2008～2010 年度

（研究代表者　阿部　泰郎・研究副代表者　松尾　恒一）

１．研究の目的

唱導文献は, 中世の仏教文化の中核を担うテクストとして, 儀礼と結びつき, 芸能に展開する基盤となり，また，歴史状況と密接に関わり，時代をその人間の心意を象る史料としても高い価値を有する資料である。その研究は, 文献学的資料調査と解読分析を基礎として, 人文学の諸分野から学際的になされる必要がある。

歴博田中旧蔵文書中の『転法輪鈔』は，中世唱導の主流であった安居院唱導の代表的文献の中で最古最善のテクストであり，金沢文庫蔵安居院唱導文献群に比してはるかに古態をとどめ，それらを位置付ける上で不可欠な伝本である。安居院唱導文献の研究については,『安居院唱導集上巻』（1975）以降，大きな進展がみられない。その停滞は，こうした基幹資料が多く未公刊であることが影響している。この状況を打開する

一歩として，歴博本『転法輪鈔』を研究・紹介することは急務であり，その公刊は，歴史・文学および美術史と建築史等の重要資料として学界の求めに応えるものとなろう。

加えて，唱導文献を広く宗教テクストとして認識し，特に儀礼テクストとしての普遍性のもとに把えることにより，唱導が担う仏教文化の構造と体系が明らかになり，ひいては説経や延年など芸能へと展開する機能を明らかにできよう。それらは，仏教が王権や国家と結びついた東アジアに共通する現象であり，中国・韓国の仏教儀礼と芸能の研究者が参加することは，そうした広い地平において唱導文献の位相を捉える格好の機会となろう。また米国の中世仏教に深い知識と多様な問題意識を有する研究者の参加も，こうした課題を国際的な視野の許で展開する契機ともなる。

すでに研究代表阿部泰郎は，副代表松尾恒一も加わった共同研究として，科研費基盤研究（B）「中世寺院の知的体系の研究」で真福寺等において唱導文献を含む仏教資料全般にわたる綜合的研究を深め，また 21 世紀ＣＯＥプログラム「統合テクスト科学の構築」の推進担当者として，その宗教テクストとしての普遍的構造を追究してきた。さらに，新たに採択されたグローバルＣＯＥ「テクスト布置の解釈学的研究と教育」（2007 年～）では，その成果をより高度化して，自身の科研費研究の主題である中世宗教テクストの綜合的研究を，国際的な連携を築きつつ展開すべく努めているが，本研究はその重要な基盤ともなり，また，これらと連動するこしによって，より大きな次元の成果へ発展させることが期待される。（阿部代表執筆）

２．今年度（第３年次）2010 年度の研究目的

館蔵『転法輪鈔』の翻刻と，院政期の仏教活動における本資料に基づく唱導が，いかなる宗教的な特質を有していたのかを考究する。

また，東アジア世界における仏教とこれを基盤とする諸文化について，国際研究集会を開催して討議し，これにより，東アジア宗教を異文化として理解し研究を進める研究者との交流，相互理解を推進する。

３．今年度（第３年次）2010 年度の研究経過

第１回　共同研究会　８月 13 日（金）　歴博

『転法輪鈔』等，田中旧蔵文書，中近世芸能関係資料の調査

第２回　国際研究集会　10 月６・７日　アメリカ・イリノイ州立イリノイ大学

Religious Texts and Performance in East Asia

東アジアにおける宗教テクストと表象文化

WEDNESDAY, OCTOBER 6, 2010

Welcoming Remarks: Brian Ruppert, EALC; Elabbas Benmamoun, Director, School of Languages, Cultures, and Linguistics; Akira Tajima, Consul and Director, Japan Information Center, Consulate General of Japan at Chicago

Introductory Discussion of Nara Buddhist Ritual (Levis, 3rd Floor)

Matsuo Kōichi, National Museum of Japanese History, “Acolytes (*Dōji*), Hall Acolytes (*Dōdōji*): Buddhist Rites of Nara and the People Who Support Them”（童子と堂童子—奈良の仏教儀礼と支える人々—）

Kojima Yasuko, Wakō University, “The Rites and Tradition of the Tōdaiji Shuni’e (O’Mizutori): The Ritual World of Kami-Buddha Combinatory Relations and the Hachiman Shrine Priests’ Protection of Kogannon（東大寺修二会（お水取り）の儀礼と伝承――小観音を守護する八幡宮司，神仏習合の儀礼世界――）

Public Screening and Discussion: Documentary: “The Flower Assembly Rite (Hana’e-shiki) of

Yakushiji: The Ceremony and the People Who Support It" (薬師寺花会式～行法と支える人々～, National Museum of Japanese History, Inter-University Research Corporation, National Institutes for the Humanities, Japan, 2009).

Discussants: Director, Matsuo Kōichi, 11:30 Ronald Toby, University of Illinois, and David Plath, University of Illinois.

Keynote Addresses (Levis, 3rd Floor):

Abe Yasurō, Nagoya University: "Medieval Japanese Liturgical Texts and Performance: The World of Buddhist Ritual as Religious Text"

(中世日本の儀礼テクストと芸能―宗教テクストとしての仏教儀礼の世界―)

Ryūichi Abé, Harvard University: "Visuality and Power in the Rituals of Mikkyō Patriarchal Portraits"

Session 1 (Levis, 3rd Floor): Buddhist Ritual and Arts Across East Asia

東アジアを超える仏教儀礼と芸能

Arami Hiroshi, Hiroshima University: "Research on Dunhuang Manuscript Commentaries on the Eight Fasting Precepts" (敦煌本八關齋戒儀軌寫本研究)

Alexander Mayer, University of Illinois: "Forms of Scriptural Practice in Chinese Buddhism"

Michael Jamentz, Kyoto University, "Reading the *Shôken hyôbyakushû*: Clues to the Creation of the *Heike monogatari* in the Family of 'Sakuramachi Chūnagon'Fujiwara no Shigenori"

Discussants: Alexander Mayer (Arami), Zong-qi Cai (University of Illinois; Mayer), Brian Ruppert (Jamentz)

THURSDAY, OCTOBER 7, 2010

Session 2 (Levis, 3rd Floor): The World of the Medieval Preaching Text *Tenpōrinshō* (National Museum of Japanese History Archives)　中世唱導文献『転法輪鈔』歴博本の世界

Makino Atsushi, "On the National Museum of Japanese History Manuscript of the *Tenpōrinshō*" (歴博本『転法輪鈔』について)

Miyoshi Toshinori, Nagoya University, "From the World of the 'Mikkyō' Section"

(「密教」帖の世界から)

Abe Mika, Shōwa Women's University, "From the World of the 'Good Acts of the Regent-Chancellor House' Section" (「「関白家修善」帖の世界から」　)

Session 3 (Levis, 3rd Floor): The Systematization of Religious Knowledge in Japanese Buddhism　日本仏教をめぐる宗教知識の体系化

Koike Jun'ichi, National Museum of Japanese History, "Phases of Religious Knowledge Seen in Shugendo Writings" (修験蔵書にみる宗教知識の位相)

Brian Ruppert, University of Illinois: "Networking Monks and the Dissemination of Liturgical Literatures"

Discussant:　Ronald Toby, University of Illinois (Koike);　Michael Jamentz　(Ruppert).

Session 4 (Levis, 3rd Floor): On Aesthetes and Preaching as a Religious Practice

宗教実践としての唱導と芸能者

Elizabeth Oyler, University of Illinois: "Narrating Space: Geography of the Provinces in *Heike monogatari*."

Makino Atsushi, Meiji University: "*The Tale of the Heike* (*Heike monogatari*) and Buddhist Preaching (*Shôdô*)"（平家物語と唱導）

Discussant: David Goodman, University of Illinois.

Session 5 (Levis, 3rd Floor): Performance and Medieval Japanese Buddhism

芸能と日本中世仏教

Thomas Hare, Princeton University: "Training, Transgression and Wonder in Zeami's Performance Notes"

Ikumi Kaminishi, Tufts University: "Performances of the Picture-preaching (*etoki*) Kumano Nuns: Sacredness and Sexuality"

Chikamoto Kensuke, Tsukuba University: "Preaching and *Setsuwa* Literature of the Medieval Era: Considering the Writings of Gedatsubō Jōkei"

（中世説話文学と唱導—解脱房貞慶の著述をめぐって—）

Discussants: Elizabeth Oyler (Hare), Anne Burkus-Chasson (Kaminishi), Brian Ruppert (Chikamoto)

General Discussion of the Implications of the Symposium Findings.

総合討論

第３回　共同研究会　歴博　３月 11 日（金）

〔研究発表〕

ゲストスピーカー：三後　明日香（アメリカ カールトン大学）

「米国における日本仏教の研究動向から見る中世論義会研究の意義—宮中最勝講を中心に」

ゲストスピーカー：王　媛（一橋大学大学院）

「舞楽「迦陵頻」の一考察—古代仏教儀礼における奏演とイメージ—」

小島　裕子「金沢文庫本収載「清涼寺供養」について」

４．今年度の研究成果

共同研究会では，その１回をアメリカ・イリノイ大学での国際研究集会「Religious Texts and Performance in East Asia　東アジアにおける宗教テクストと表象文化」を行った。

本歴博共同研究が中心となり，アメリカ・イリノイ大学，及び阿部泰郎代表科研「中世宗教テクスト体系の綜合的研究－寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合－」の３者の共催による国際研究集会である。開催代表は，日本側は松尾恒一（歴博），アメリカ側はブライアン ルパート（イリノイ大学）。

州立イリノイ大学において，アメリカを中心とする日本，東アジアの宗教・宗教文化の専門研究者とともに，報告と討議を行った。歴博共同研究の中心に据えられている歴博蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』の内容や資料的価値・意義の紹介，及び，民俗研究映像『薬師寺花会式～行法と支える人々～』（英語版）の上映と討議をもおこなった。

アメリカ側からは，前近代の日本・中国の宗教文化の専門研究者の講演と発表がなされた。日本—アメリカ，互いに，異なる歴史と社会背景のなかで進められている日本・東アジアの文化研究についての報告・発表，討議によって，東アジアの精神史の上で大きな役割を果たした仏教の新たな側面を照射し，成果を共有

することができた。

三後明日香「米国における日本仏教の研究動向から見る中世論義会研究の意義―宮中最勝講を中心に」は，アメリカの研究者のみならず一般における，日本仏教への関心，注目の様相と，1960 年代以降の研究動向について論じた。

教理的側面，特に禅の東洋哲学的な側面への西洋哲学からの関心からはじまった日本仏教への注目は，1980 年頃より，政治・社会・制度的な側面へと関心を移すといった，反動ともいえる動向が認められる。

しかしながら，僧侶の教理に対する探求は，古代・中世に不断に続けられており，こうした側面をおろそかにすることはできない。注目されるのは，古代・中世の，国家による仏教行政や，北嶺天台宗と南都法相宗との小乗をめぐる対立的な論争を反映しつつ，教学についての論争が繰り広げられたことで，そうした論争の公的な場として南都・北京の年中行事における論義を位置づけることができることを提示した。教学と，その方法としての論義と，官僧の昇進制度の整備とは，有機的な関係にあったのだとする説を，宮中最勝講やそこで行われた論義の内容を具体例として，論じた。

さらに，具体例を積み重ねて論証を行うべきと考えるが，本視点からの研究が進展すれば，大陸・半島を経由して伝来した日本仏教が，半島・大陸とは異なる展開をしつつ，日本の精神文化・伝統文化に大きな影響を与える基盤となった歴史が明らかになってくるものと，期待される。

王媛「舞楽「迦陵頻」の一考察―古代仏教儀礼における奏演とイメージ―」は，大陸より伝来し，日本の宮廷舞踊として形成された舞楽の文化史的な考察として，特に舞楽「迦陵頻」に注目し，論じた発表。日本の唐楽の起源となった，唐代の宮廷舞踊「燕楽」にも言及し，大陸のいかなる舞踊が日本舞楽の起源となったのか，より実証的な研究が必要であることを説いた。

舞楽「迦陵頻」は，中国宮廷舞踊中にその名が見えず，日本への伝来には謎が多い。迦陵頻伽は，『阿弥陀経』等の仏典に説かれる，極楽に住むとされる霊鳥である。舞楽「迦陵頻」は，東大寺等，古代寺院の仏教儀礼において，その開会部分における仏への供養舞として「菩薩」等とともに奏演された。こうした奏演の仕方は，仏典に説かれる極楽の世界を，舞台をはじめとする仏前の装置や装束等と，音楽・身体によって表彰した芸術であると認められる。

舞楽「迦陵頻」に相当する舞踊は，現在のところ中国の資料に見出せないが，迦陵頻伽を含む極楽世界描いた絵画や工芸は，中国・日本の両方に数多く残されている。これらに描かれる迦陵頻伽のイメージの比較・検討もあわせて，舞楽「迦陵頻」の形成についても論じた。

古代・中世の日本仏教が，音楽・舞踊等の芸能や芸術の奏演の基盤として大きな役割を果たしたことも，その音楽や舞踊が，大陸・半島の大きな影響を受けていることも周知のところである。しかしながら，その相関関係をあらためて，東アジアの関連資料にも注目し，これらとともに位置づけ再考することによって，東アジア世界のなかでの，古代・中世日本の宗教文化の新たな側面を発見し，現出させることができることを印象づけた，今後のさらなる研究の進展が期待される発表であった。

小島裕子共同研究員「金沢文庫本収載「清涼寺供養」について」は，本共同研究において研究の核となる『転法輪鈔』と関連の深い，金沢文庫本収載の「清涼寺供養」について考察した発表。国家仏教，特に後白河院政期の仏教儀礼の性格を考える上での有用性等について論じた。

５．３年間の研究成果

①『転法輪鈔』の解読と宗教テクストとしての特質の考究

本共同研究は，平安後期～鎌倉前期の唱導資料である館蔵の『転法輪鈔』を核に据えて，これを解読しつつ，古代寺院における唱導の実態や，その宗教文化としての特質を考究することを第１の目的とする。

筒井「「為小堂供養祈修同供祭文」の考察」，牧野「歴博本『転法輪鈔』について」，ゲストスピーカー三好俊徳「『転法輪鈔』「密教」帖の世界から」，阿部美香「『転法輪鈔』「関白家修善」帖の世界から」によって，院政期の顕密仏教の諸儀礼においておこなわれた唱導の実態を明らかにした。

三好はほかに「田中穣氏旧蔵『転法輪鈔』からみる源頼朝の宗教政策」を発表し，『転法輪鈔』の２篇の源頼朝主催法会の表白を中心に，儀礼の分析とその歴史的位置づけを検討した。頼朝の宗教政策について，京洛と鎌倉との関わりを視野に入れて，本表白の分析を試みた。

京洛とならぶ，仏教活動の拠点となった南都の唱導について，近本「中世説話文学と唱導―解脱房貞慶の著述をめぐって―」の発表がなされた。南都世界ならではの神祇（春日神）信仰の反映や，貞慶の唱導における言説が，澄憲をはじめとする安居院流の唱導との関わりを有すること，真言律宗や融通念仏宗とも関わることなど，テクスト分析というミクロな視点と，時代における仏教諸宗派の活動といったマクロな把握とのいずれの視点をも欠かせないことを認識させた。

『転法輪鈔』に続く時代，鎌倉中期以降の，仏教と仏教テクストの在り方についてもまた考究された。ブライアン ルパート「奥書・識語が語るもの―中世真言密教祖師自筆の言説と修法・聖教伝授の関係に関する一考察―」は，鎌倉中期以降の，日本密教テクストについて，奥書・識語―テクストの筆者・書写者・伝来・刊記等の記載―に注目して，古代後期，院や朝廷と結びついた顕密仏教，国家仏教体制下の仏教とは異なる密教のあり方を考究した。これらの密教テクストの生成は主に，地方において弟子たちの手によってなされ，その由緒の正しさ，正当性＝正統性を，師匠からの誤りのない伝授によってなされたことを根拠としている点が，注目される点であることが明らかにされた。

なお，この発表に対して，これらの密教修法がどの程度実践されたのかといった指摘，また，これが地方において行われた目的や，これを可能とした経済的基盤は何だったのか，といった問題，地方の中でも，事例が東国に偏向している点に注目すべきであり，これは，東国にもう一つの政権，鎌倉幕府が成立し，朝廷―幕府の往還といった，列島内に生起した新たな政治的状況の反映と認め得るのではないか，その場合の中央―東国の結びつきは，ストレートなものではなく，畿内の一地域，あるいは複数地域を介したものだろうといった指摘がなされた。

『転法輪鈔』の研究と関連して，名古屋大須文庫，金沢文庫，京都仁和寺等，諸寺・諸文庫に伝来する，関連の資料の開拓にも努めた。具体的な成果としては，松尾「古代，延暦寺根本中堂修正会の咒師作法の特質，新資料真福寺蔵「『中堂呪師作法』を中心として」，阿部美香「新資料，金沢文庫蔵『上素帖』の唱導資料の特質」等の発表があるが，いずれも，新資料の紹介・内容分析により，仏教儀礼と密接に結びついた古代・中世の芸能の新たな側面を照射したが，現行儀礼や中国仏教との相違点等について今後の課題として浮上した。

ほかにゲストスピーカー三後明日香による，古代・中世仏教について，政治・社会・仏教行政・儀礼・教理を統合的に把握しようとする，意欲的な発表（「米国における日本仏教の研究動向から見る中世論義会研究の意義―宮中最勝講を中心に」）等も行われた。

②東アジアの仏教儀礼の調査・研究

古代・中世における，中国，中国から仏教が伝来した韓国の仏教文化，及び，その民俗的展開としての現

在への伝承についても，本共同研究の調査・研究の対象とした。

荒見泰史の 10 世紀の敦煌文献を資料とする中国の唱導研究（「敦煌本八關齋戒儀軌寫本研究」），尹光鳳の古代韓国における国家仏教の儀礼（八関斎・燃燈会等）は，今後の中国を起点として展開した東アジアの仏教儀礼の比較研究へと進む土台となり得る成果である。

ゲストスピーカー坂田沙代の「金剛山遊覧と僧侶の役割」も，日本の古代・中世における社寺参詣との比較の上でも意義の大きい研究である。

ゲストスピーカー王媛「舞楽「迦陵頻」の一考察—古代仏教儀礼における奏演とイメージ—」は，日本の宮廷舞踊として奏された舞楽の伝来について考究するものであるが，日本の唐楽の起源となった，唐代の宮廷舞踊「燕楽」にも言及し，また，唐代の浄土変相図に描かれる迦陵頻伽にも注目するなど，中国仏教やその音楽・舞踊を移入しつつ，いかに日本的な展開を遂げたかといった，根本的な課題に取り組もうとする意欲的な研究である。

東アジアにおける仏教儀礼，及び，これと深く関わった芸能の伝承の実見・調査をも実施した。

第１年次には，韓国奉元寺霊山斎の調査を行ったが，密教的作法や，禅宗的な儀礼等との複合，在地の精霊信仰に基づく諸作法等が確認され, 中国を経由して伝来した仏教の地域的な定着と展開を考究するうえで，今後，日本の諸事例との興味深い比較が必要となる確信を得た。

第２年次には，中国における，仏教儀礼，唱導関係の調査を実施した。

第一に，古代・中世の日本仏教の祖師らの修行と習得が行われた寺院，及びそれらの寺院における儀礼の時間・空間と身体所作・音声の調査として

・天台大師智顗円寂の地，新昌県城大仏寺（元隠岳寺・石城寺，巨大弥勒石仏）の踏査
・天台山国清寺にて，法会の歴史と現況
・天台山国清寺の朝の勤行（朝課）聴聞，及び山内踏査，特に伝教大師関係堂舎・碑等
・天童寺，禅宗法要（晩課）聴聞・調査，道元禅師関係堂舎・碑等，踏査
・鎮江金山寺にて水陸法会の調査，特に内壇の荘厳について，現況（施主や催行状況等）と歴史についての聞き取り

さらに，中・近世芸能の伝承・伝習状況の調査として

・蘇州評弾学校における，校長・作曲家の教師・演奏の教師への，学校の成立，評弾伝習のための課程等についての聞き取り
・蘇州評弾博物館にて評弾の実態の調査

を実施した。

日本仏教の歴史と民俗的な展開，たとえば琵琶法師による平曲や，説経・講談等，唱導や仏教音楽・舞踊を考究する上で，東アジア世界における比較の有用性が認識され，今後，さらなる精緻な調査に基づく比較研究へと進むことを目標とすべきとの認識を共有した。

③フォーラム・国際研究集会の開催

共同研究の社会発信，中国・韓国，及び欧米の仏教文化研究者との発表・討議を公開にて行う国際研究集会をも積極的に行った。

第１年次には，2007 年度の民俗研究映像「薬師寺花会式」「春日大社・興福寺の年中行事」を一般公開上映した映像フォーラムにおいて，本共同研究の分担者(阿部代表・松尾副代表・尹研究分担者)による，報告

と討議を行った。寺院の建造に関わる職能者の，行事への奉仕と，大陸より伝播した仏教の，日本と同様に古代以来の歴史を有する韓国の事例との比較討議を行い，共同研究の一般への広報をも兼ねた，公開のフォーラムを実施した。

第２年次には，阿部代表の本務である名古屋大学との共催による国際研究集会「東アジアの宗教儀礼と表象文化」を韓国・中国の研究者を招聘し，公開にて共同研究会を開催した。

東アジアにおける国や地域による差異はあるものの，古代・中世に仏教の実践として，寺院における儀礼が大きな役割を果たし，これを基盤として特徴のある文化が生成した。その文化生成は，建築・絵画・歌舞・音曲・文学…といった多分野におよび，また地域の民間信仰とも結びついて独自の変容を遂げ，その伝承のいくつかを各国に見ることができる。本研究集会は，仏教儀礼の古代・中世の実相を明らかにしつつ，仏教を起源，あるいは基盤とする諸文化の生成と定着についての比較を，韓国・中国の専門研究者，及び国内の専門研究者等とともに考究したが，宗派仏教として成立した日本仏教においては，その後の文化生成や展開の上で，韓国・中国とは大きく異なるものとなったこと等が浮き彫りとなった。今後，死者・施餓鬼供養を目的とする水陸斎（水陸法会）の比較研究等，個別事例についての比較研究を推進することの必要性が，韓国・中国の研究者とともに共通の認識となった。

なお，本研究集会は公開で行い，約 70 名の外国人を含む大学教員・大学院生・一般来館者の参加があり，本共同研究の成果と意義を，大学・関係学会をはじめとする研究者コミュニティに発信することができた。

第３年次には，アメリカ イリノイ大学，及び阿部泰郎代表科研「中世宗教テクスト体系の綜合的研究－寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合－」との共催による国際研究集会「Religious Texts and Performance in East Asia 東アジアにおける宗教テクストと表象文化」を開催した。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

荒見　泰史（広島大学）
牧野　淳司（明治大学）
筒井　早苗（金城学院大学・非常勤講師）
康　　保成（中国・中山大学）
尹　　光鳳（広島大学）
西岡　芳文（神奈川県立金沢文庫）
小池　淳一（本館・研究部）
◎阿部　泰郎（名古屋大学）
近本　謙介（筑波大学）
内田　澪子（東京大学史料編纂所）
阿部　美香（昭和女子大学・非常勤講師）
Brian Ruppert（アメリカ・イリノイ大学）
小島　裕子（和光大学他・非常勤講師）
蓑輪　顕量（愛知学院大学）
高橋　一樹（本館・研究部）
○松尾　恒一（本館・研究部）

Ｉ　「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」2010～2012年度

（研究代表者　藤田　裕嗣）

１．研究の目的

堺環濠都市（大阪府堺市堺区）は，戦国期から近世前期にかけて日明貿易や朱印船貿易の拠点となり，会合衆により自治的に運営されるなど，輝かしい歴史の舞台として知られている。本館所蔵，元禄『堺大絵図』に示されている堺の環濠内が「堺環濠都市遺跡」とされ，その発掘・試掘調査は1,000件を越した。地中に眠

った戦国期までの都市像について，発掘事例が増えた近年では数少ない発掘成果を強引に結びつけることなく，発掘された遺構と遺物自体に素直に対峙する態度が重要となっている。その際，近世初期の状況を１筆レベルの詳細さで示す同絵図は，貴重である。写真複製版も刊行され，近世史学や建築史学など，様々な立場から研究が進められてきたとはいえ，1977年の出版と古いうえに，絵図自体が大型過ぎて，細部までは読みにくい難点があった。この難点は，画像処理技術の進歩により克服できると期待される。本研究は，まず，写真を撮影して，絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータを確認・共有することから始める。本絵図のデジタル画像を用いれば，発掘データをそれとの位置関係で詳細に検討でき，考古学が，歴史地理学・文献史学・建築史学と協働できると期待される。同絵図に示されている堺の都市構造は，大坂夏の陣で全焼の被害を蒙った後，江戸幕府が堺に込めた総意の表現と考えられ，それを理解するためにも，その前提となる戦国期の復原が望まれる。さらに，17世紀になると大坂が，江戸幕府の肝いりで天下の台所として大規模土木工事も伴って整備された。その中で，兵庫と尼崎を含む大阪湾，引いては瀬戸内や日本列島全体との流通関係をも念頭に置きつつ，流通の拠点としての堺が描かれた同絵図に新しい光を当て，再評価を試みる。

２．今年度の研究目的

今年度は，研究の出発点となる絵図の調査から始めるとともに，堺における都市プランの現況と研究状況の把握に努める。

具体的にはまず，同絵図を熟覧した上で，写真を撮影して，同絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータを共有・校訂する。博物館で行う研究集会に加え，堺では発掘調査の現場にも赴く。さらに現地を調査し，同絵図に示された都市構造と残された現況，さらには研究の現状を押さえる。

夏に予定されている国際学会では同絵図が持つ研究資料としての意義を報告し，国際学界への発信も試みる。

３．今年度の研究経過

〇第１回研究会

・テーマ：国立歴史民俗学博物館本「堺大絵図」の概要把握と今後の研究方針

・日時：平成22年８月21－22日（土－日）

・場所：歴博会議室

・趣旨説明　藤田裕嗣（研究代表者）

・絵図調査：国立歴史民俗学博物館本「堺大絵図」

・研究発表

　１　「堺の発掘調査と『元禄二己巳歳堺大絵図』」　嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）

　２　今後の予定に関する意見徴収を含め，総合討論(共同研究メンバー全員)

〇第２回研究会

・テーマ：大阪歴史博物館の展示と堺南部の現地調査

・日時：平成22年９月19－20日（日－月･祝）

・場所：大阪市・堺市

・大阪歴史博物館　「新淀川100年－水都大阪と淀川」展

・研究発表（大阪市，大阪歴史博物館）

１　「文献史からみた中世堺の都市空間」　大澤研一（大阪歴史博物館）

２　総合討論(共同研究メンバー全員)

・現地調査（20日，堺市）　案内者：嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）

堺市役所21階展望ロビー→大小路交差点→開口神社→宿院交差点→宿院頓宮→発掘調査ＳＫＴ10（女性センター地点）→発掘調査ＳＫＴ960（少林寺団地地点）→大安寺→南宗寺

・絵図調査：堺市博本「堺大絵図」の謄写版を熟覧

〇第３回研究会

・テーマ：堺（特に北部の巡検）と住吉大社との関係に関する現地調査

・日時：平成22年11月２－３日（火-水・祝）

・場所：大阪市・堺市

・大阪市立美術館　「住吉さん　住吉大社1800年の歴史と美術」展

・研究発表

１　「美術にみる住吉大社と堺」

井溪　明（堺市立みはら歴史博物館・ゲストスピーカー）

２　「堺大絵図を用いた歴史情報のデジタル化と復元情報の視覚化」

高屋麻里子（筑波大学大学院システム情報工学研究科・研究員）

３　総合討論(共同研究メンバー全員)

・現地調査（３日）

１　堺市堺市内北部　　案内者：嶋谷和彦（堺市市長公室文化財課）

井上家住宅(鉄砲鍛冶屋敷跡)→清学院→高須神社→水野鍛錬所→綾之町交差点→堺市立町家歴史館　山口家住宅（国の重文）→月蔵寺→本願寺堺別院→妙国寺→刃物ミュージアム→ザビエル公園→菅原神社

２　住吉大社とその周辺　案内者：大澤研一（大阪歴史博物館）

〇第４回研究会

・テーマ：国立歴史民俗学博物館本「堺大絵図」の修理作業に伴う諸問題の検討

・日時：平成23年３月３日（木）

・場所：奈良市・元興寺文化財研究所

・絵図調査：国立歴史民俗博物館本「堺大絵図」

・現地調査：元興寺周辺の奈良町

４．今年度の研究成果

本年度は当初計画で，同絵図の写真を撮影する予定にしていたが，熟覧して検討した結果，本プロジェクトで重視している高精細画像作成に耐える水準を確保するには絵図自体の状態が悪く，まず修理が前提になると判明した。そこで，10枚構成のうち２枚を選定して試行的に修理を進め，今後の指針も得た。すなわち，原図の上に付けられた貼紙を剥がし，その下を確認したところ，今回の２枚では目立った描写は認められなかったが，来年度に残された８枚では十分に想定される。この過程を探るには，原図により近いと評価されている堺市博物館本との比較検討が有効であろうと考えられる。そこで，堺市博本の熟覧を試みたが，全体を１枚に貼り継がれているため，開くことも難しく，写真撮影も非現実的であり，謄写本の調査に留めざる

を得なかった。堺市博物館で撮影された後者の４×５ネガフィルムを用いてデジタル化することにした。両者の詳細な比較検討は，来年度の課題の一つである。

同絵図に描かれた土地区画とそこに盛られた文字注記に関する基礎的なデータの共有・校訂については，既に撮影されていた写真データを用いて南部から始め，複製版の解説における読みの誤りも検出できた。『堺大絵図』の複製に基づく画像処理と地図データの分析も進めている。大阪市内で開催された，堺に関連する二つの展覧会を機縁に，堺との関係をにらみつつ，検討した。研究フィールドである堺市堺区内では今年度，発掘調査が行われず，その現場に赴くことは次年度の課題として残された。現地調査により，同絵図に示された都市構造と残された現況，さらには研究の現状を押さえる課題に取り組んだ。

同絵図が持つ研究資料としての意義を国際舞台で報告し，国際学界への発信も試みる点は，中国・中山大学で開催された国際シンポジウムで研究代表者自身が果たした。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎藤田　裕嗣　神戸大学大学院人文学研究科・教授
　鳴海　邦匡　甲南大学文学部・准教授　　　　松尾　信裕　大阪城天守閣・館長
　大澤　研一　大阪歴史博物館・学芸員　　　　嶋谷　和彦　堺市市長公室文化財課・学芸員
　高屋麻里子　筑波大学大学院システム情報工学研究科・研究員（非常勤）
　青山　宏夫　本館・研究部・教授　　　　　　小島　道裕　本館・研究部・教授
　岩淵　令治　本館・研究部・准教授　　　　○玉井　哲雄　本館・研究部・教授

Ｊ　「古代における文字文化形成過程の総合的研究」2010～2012 年度
（研究代表者　小倉　慈司）

１．目　的

国立歴史民俗博物館では 20 年以上にわたって正倉院文書の複製事業に取り組むとともに全国各地の木簡・漆紙文書・墨書土器・銅印など出土文字資料の調査研究およびその体系化を図ってきた。また近年では，早稲田大学朝鮮文化研究所と共同して韓国内の木簡・石碑の調査を実施し，多くの研究成果を挙げてきている。本研究は，それらの研究蓄積を踏まえ，その総合化を図るとともに，これまで未着手であった文字資料の実物・画像データによる調査研究も実施し，広く東アジア世界を見通して，古代における文字文化の全体像を明らかにすることを目的とする。

具体的な課題としては，書写材料としての竹・木・紙・石・金属の使い分けの問題，古代中国・朝鮮・日本における文字資料の記載様式・内容の比較検討，文法・発音など字音表記の国語学的分析による古代朝鮮の複雑な実態とその影響を受けた古代日本の実態の解明，文字文化の伝播で大きな役割を果たした仏教・儒教・道教・呪術などの宗教的要素の解明などが挙げられる。

このような古代史学・考古学・国語国文学・民俗学などを踏まえた幅広い視点から日・中・韓の文字資料を比較検討し，東アジア全体の視点から見た新しい古代文字文化の形成過程，文字文化受容過程の実態を解明する。

２．今年度の研究目的・計画

本年度はまず，具体的検討の前提として，これまで収集してきた全国各地の出土文字資料の出土直後の写

真資料の画像データ作成事業を開始する。

海外調査としては，2回にわたり韓国にて国立羅州文化財研究所・韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所等所蔵出土文字資料調査を行う。

国内調査としては，飛鳥資料館にて開催の特別展を利用しての7世紀出土木簡の調査，また安土考古博物館等にて滋賀県内出土文字資料および石碑の調査を行う。

3．今年度の研究経過

第1回研究会　2010年6月12日（土）　国立歴史民俗博物館

平川　南　共同研究計画の概要説明

本共同研究の研究計画の検討・確認を行う。

第1回調査　2010年8月2日（月）～5日（木）　韓国羅州市・ソウル市

韓国羅州文化財研究所および国立中央博物館にて羅州伏岩里遺跡出土百済木簡および南山新城碑碑文等の調査を実施。

第2回調査　2010年9月8日（水）～12日（日）　韓国ソウル市・慶州市

韓国国立中央博物館・国立慶州博物館・国立慶州文化財研究所にて所蔵・展示中文字資料の調査を実施。伝仁容寺址遺跡・月城垓子，風納土城等漢城期百済関連遺跡の現地調査を実施。

第2回研究会　2010年10月30日(土)　国立歴史民俗博物館

武井　紀子　「慶州雁鴨池出土文字資料 調査報告」

三上　喜孝　「日韓出土の「龍王」関係文字資料―資料紹介と若干の検討」

李　成市　「韓日古代社会における羅州伏岩里木簡の位置」

平川　南　「日本古代の地方木簡と羅州木簡」

第1回・第2回調査の結果報告およびその検討。

第3回調査・第3回研究会　2010年11月28日（日）　飛鳥資料館

秋季特別展「木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち」展示中の7世紀木簡について調査，あわせて検討会を実施。

第4回調査・第4回研究会　2011年3月26日（土）～27日（日）

大津市超明寺・安土考古博物館

大津市超明寺にて養老元年碑を調査，安土考古博物館にて滋賀県内出土の古代印・木簡・文字瓦等を調査,引き続き検討会・研究会を実施。

橋本　繁　「韓国扶余旧衙里遺跡出土古代木簡について」

平川　南　「秋田由利本荘市出土古代印について」

4．今年度の研究成果

写真資料の画像データ化についてはまず資料整理とデータ化の方法に対する検討を行い．委託する業者を選定，約1600枚分の資料の画像データ化を行った。

韓国における調査では，まず，韓国で初の地方官衙出土木簡である羅州伏岩里遺跡出土百済木簡を調査することにより，7世紀初頭の百済においては地方行政の末端機構にも文書行政が日常的かつ広範に行われていたことが明らかとなった。同木簡は韓国出土の地方木簡を分析する上での指針となるものであり，今後，新羅や古代日本などとの比較検討が求められる。

次に，伝仁容寺址遺跡出土木簡や雁鴨池出土墨書土器・刻書土器等の調査を通じ，古代日本と同様，新羅においても龍王祭祀が各地で行われていたこと，雁鴨池出土の刻書土器に見える「辛審龍王」「龍王辛」等の記載は東宮官の官司の一つである「龍王典」に関するものであって，「審」は刻した工人が「番」を誤った可能性が考えられることなどが判明した。木簡に比し墨書土器や刻書土器は韓国ではまだ充分な研究対象となっておらず，今後，古代日本と比較しつつ検討を深めていく必要がある。

国内調査については，飛鳥資料館では７世紀木簡を検討，釈文の再検討を行い，展示に携わった山本崇氏も交えて７世紀木簡研究の課題を抽出した。また渡来人が多く居住し文字文化が地域社会に早期に浸透していた近江国地域の出土文字資料，真偽について議論のある超明寺養老元年碑を検討し，古代印等近年出土した文字資料に関しての意見交換を行った。

なお，研究会には研究分担者のほか，補助業務に携わっている大学院生も加わり，活発な意見交換がなされた。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

安部聡一郎　金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系
市　　大樹　大阪大学大学院文学研究科
神野志隆光　明治大学大学院
関　　和彦　共立女子第二中学高等学校
田中　史生　関東学院大学経済学部
中林　隆之　新潟大学人文社会教育科学系
森下　章司　大手前大学人文科学部
吉岡　眞之　東京大学史料編纂所
◎小倉　慈司　本館・研究部・准教授
高田　寛太　本館・研究部・准教授
永嶋　正春　本館・研究部・准教授
平川　　南　本館・館長
犬飼　　隆　愛知県立大学文学部
新川登亀男　早稲田大学文学学術院
關尾　史郎　新潟大学人文社会教育科学系
寺崎　保広　奈良大学文学部
三上　喜孝　山形大学文学部
山口　英男　東京大学史料編纂所
李　　成市　早稲田大学文学学術院
小池　淳一　本館・研究部・准教授
高橋　一樹　本館・研究部・准教授
○仁藤　敦史　本館・研究部・教授

［リサーチアシスタント］
高木　　理　早稲田大学・大学院生

（４）博物館学的研究

A　「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」2010～2012年度
（研究代表者　原山　浩介）

１．目　的

本共同研究は，近現代史をめぐる歴史展示に関わる諸課題を検討し，展示の背景になっている歴史叙述に関わる問題点の抽出，および歴史叙述及び歴史展示の将来像を構想しようとするものである。近現代史，なかでも時間的・内容的に現代との関わりが深い歴史の表象をめぐっては，いくつかの課題がある。これは，歴史叙述が，その時代を生きた者が生存しているなかで，歴史が生々しく語られていることを前提として成

立してきたことと関係している。こうした近現代史の性格は，しかし，それら語り部となるべき人びとの他界と，それに伴う伝承の途絶により，変容を迫られることになる。

この局面は，展示において先鋭的に表面化する。展示は，書籍や教科書といった媒体と比べて，専門性を背景にした研究ベースの歴史叙述と，一般の来館者などの受け手が，よりダイレクトに対峙する媒介となる。具体的に本館の展示に即していえば，既存の第５展示室，ならびに平成22年３月に開室した第６展示室と関わって，主に「戦争」と「日朝関係史・在日朝鮮人史」に既に問題が露呈しつつある。本共同研究では，以下のふたつの課題を軸に議論を進め，現代史叙述の見直しの第一歩とする。

「戦争」をめぐっては，本館第６展示室における展示が，これまでの歴博における戦争研究の到達点であるのみならず，学界における研究や他館における展示の現段階を少なからず反映したものとなっている。これは，敗戦を契機に醸成された，戦争体験とその伝承に基づく，現代日本の政治ならびに思想状況に特有な戦争観を基底に据えている。しかしながら，戦争体験者が少なくなり，また日常の場における伝承が途絶えていくなかで，この戦争観を支える世代的なベースを喪失していくことが予想されるだけでなく，学校教育や博物館の展示場などにおいては既に言説と来館者や聞き手の乖離が始まっている。またその一方で，世界では第二次世界大戦までとは異なる性格を持つ戦争が起こっており，しかも日本社会はそれら戦争の背後にある構造から決して自由ではなく，そうした今日的な視角から戦争というものそのものを見直す必要が生じている。

こうした事情に鑑みたとき，戦争をめぐって博物館展示は変革を迫られていると同時に，平和ということを戦争との関わりからどのように伝えていくのかという点においても，これまでとは異なる手法や文脈化が求められているといえる。その兆候は，例えば，博物館では，既に「悲惨さ」に関わる展示手法をめぐる来館者の受け止め方の違い（世代間ギャップ）として現れ始めており，また過去の日本の戦争について学ぶことが今日の世界の戦争に関わる理解と結びつきにくいという現象として表面化しつつある。

したがって本研究では「戦争」をめぐり，第二次世界大戦以降の世界における戦争のあり方とその変容を視野に入れ，かつ，日本社会が戦後においてそれら戦争を支える構造にどのように組み込まれていたのかを明らかにしつつ，戦争体験に依拠した既存の歴史叙述が醸成する戦争のイメージがそこからどれだけ乖離しているのかを見いだし，将来的に歴史叙述の中で，あるいは博物館における平和教育として，「戦争」をどのように表現していくことが可能なのかを模索することを主目的とする。なお，この課題は研究期間内に一定の結論を出し得ない重大さを持っているため，本共同研究においては，今後の歴史叙述ならびに展示の見直しを議論していく上で共有するべき論点を見出していくこととする。

なお，本共同研究では，歴博の展示に対する来館者等の反応が，現状把握のための重要なデータとなる。さらに，第６展示室の展示内容に連動させる形で議論をスタートさせ，展示内容の見直しが迫られる際にはその対応も含めて検討する形で共同研究を進めていくこととする。

次に「日朝関係史」「在日朝鮮人史」に関しては，これまでの日本史の叙述において，必ずしも十分に説明されてこなかったことが，歴史展示のあり方にも強く影響を及ぼしている。すなわち，朝鮮人が日本に来るまでの諸要因が整理されないまま示され，その結果，例えば関東大震災における朝鮮人虐殺といった突出した出来事に過剰に象徴させることで，「差別」の局面を示すという手法を採らざるを得なくなっている。こうした展示は，「差別」の日常的な諸相を来館者に看過させる結果になるばかりか，近代以降の日朝関係や在日朝鮮人に関わる歴史を矮小化することにもつながっている。

この事態は，戦後における在日朝鮮人史についても同様である。1945年以降の歴史叙述においては，地政学的な状況を反映する形で，突如として「朝鮮」が日本の外部に置かれることとなり，日本にとどまった朝鮮人については，これを規定する諸事情が戦前以上に説明不足となる。

こうした諸課題がもたらされている要因として，日本史におけるこれまでの関心の持ち方が，日本人の歴史への関心と，それ以外の他者への関心という形で分断され，双方に目配りした叙述が十分に検討されてこなかったこと，その結果，在日朝鮮人史は，日本史と朝鮮史の双方から疎外された状態になってきたことが挙げられる。加えて，とりわけ在日朝鮮人史およびそれと関わる近代の日朝関係史が，在日朝鮮人の権利獲得運動のなかで形成された一連の言説と混淆する形で歴史研究者を含む知識人により把握される例が少なくなく，このことが実証性の甘さと歴史像の単純化をもたらしている。

以上の状況に鑑み，「日朝関係史」「在日朝鮮人史」に関しては，この分野の歴史叙述をめぐって実証的な検証を行うとともに，日本において歴史としての文脈化がどのように可能かを検討する。また同時に，近年になって変化の兆しが見える，韓国における研究動向ならびに近現代史展示の動向を把握し，それらとの連動の可能性を探る。さらにこれらを踏まえて，最終的に日本において歴史展示を行う際にどのような手法が有効かを検討する。

２．今年度の研究目的・計画

歴博第５・第６展示室の展示内容についての検討を行い，戦争展示の現段階をめぐる現状把握と課題の抽出を行う。また，大阪における在日朝鮮人に関わる展示の検証ならびに在日朝鮮人社会の動向調査を行うこととする。同時に，沖縄においては様々な形態の戦争展示があり，それらは戦争展示のあるべき姿を考えていく上で参考になるとともに，有効な批判材料を提供するものと考えられるため，それらについての検討を行う。

また本年度は，共同研究員以外の報告者による報告を積極的に企画し，共有すべき論点を見いだしつつ共同研究員の拡充を図る。同時に，特に韓国の研究者との研究交流の可能性について検討を行い，可能であれば韓国におけるこの分野の歴史研究に関わる動向を把握しながら，展示・研究の両面を通じた共同作業の可能性を模索する。

３．今年度の研究経過

第１回研究会（７月19日　国立歴史民俗博物館）

第６展示室を見学の上，共同研究員に展示内容に関する講評を受けると同時に，今後の研究方針の策定を行った。

拡大研究会（８月９日・10日　国立歴史民俗博物館）

同時代史学会との共催による展示見学と研究会を実施した。９日に，館内教員の案内による展示見学を実施し，10日には立命館国際平和ミュージアム学芸員の兼清順子氏の問題提起を踏まえた，現代史展示に関わる討論を行った。

拡大研究会（９月３日・４日　国立歴史民俗博物館）

日本史研究会との共催による展示見学と研究会を実施した。３日には館内教員の案内による展示見学を実施した上，高野宏康・福島在行の両氏を報告者として研究会を実施した。また４日には，高岡裕之・大門正克・廣川和花の三氏によるミニシンポジウム形式の研究会を実施した。

第２回研究会および巡検（１月29日・30日　大阪）

１月 29 日に，大阪猪飼野地区において，コリアンタウンの巡検を実施した。さらに１月 30 日には，ピースおおさか（大阪国際平和センター）において展示見学を行った上で，市内において研究会を実施し，歴博第６展示室に関わる経過報告と，これを踏まえた研究方針の検討を行った。

展示見学（３月 13 日　立命館国際平和ミュージアム）

同ミュージアムの「「韓国併合」100 年特別展　巨大な監獄，植民地朝鮮に生きる」を見学の上，朝鮮史に関わる展示をめぐって議論を行った。

４．今年度の研究成果

第６展示室の展示内容に関する評価を複数回にわたって実施したことで，展示ならびに研究上の課題を抽出することができた。とりわけ戦時の展示をめぐっては，様々な方向から批判を含む評価を得ることができた。そこには，研究の現段階を反映した展示としてどのような形が妥当なのかという論点のほか，世代交代が進む中での戦争をめぐる歴史叙述の可能性についての議論もあり，新たな研究課題の析出を含む論点整理ができた。

また，猪飼野巡検と立命館平和ミュージアムの展示見学を通じて，朝鮮史に関する展示の可能性と問題点がみえてきた。とりわけ，事実関係において正確性を期すことが，今日の状況においては重要であること，また民衆史の水準における叙述の可能性を探る必要性が共有できた。

このほか，第５展示室の関東大震災展示に関わる議論も，上記の経過のなかで行われ，今後の展示内容の検討に資するものとなった。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

原田　敬一　佛教大学文学部・教授・日本現代史
山本　和重　東海大学文学部・教授・日本近代史
吉田　　裕　一橋大学社会学部・教授・日本近現代史
中野　　聡　一橋大学社会学部・教授・米比関係史
大串　潤児　信州大学人文学部・准教授・日本近現代史
荒川　章二　静岡大学情報学部・教授・日本近現代史
崎山　政毅　立命館大学文学部・准教授・ラテンアメリカ近現代史
冨山　一郎　大阪大学文学部・教授・植民地研究
矢口　祐人　東京大学大学院総合文化研究科・教授・アメリカ研究
趙　　景達　千葉大学文学部・教授・朝鮮史
宋　　連玉　青山大学経営学部・教授・朝鮮近現代史
愼　　蒼宇　都留文科大学・非常勤講師・近代朝鮮史
小川原宏幸　明治大学文学部・非常勤講師・近現代朝鮮史
宮本　正明　㈶世界人権問題研究センター・専任研究員・近現代日朝関係史
水野　直樹　京都大学人文科学研究所・教授・朝鮮近代史
高村　竜平　秋田大学国際文化学部・准教授・在日朝鮮人史
鳥山　　淳　沖縄国際大学総合文化学部・准教授
板垣　竜太　同志社大学社会学部・准教授・朝鮮近現代史
高岡　裕之　関西学院大学文学部・教授，戦時下の社会史

○久留島　浩　本館・研究部・教授・日本近世史
　高野　宏康　本館・研究部・機関研究員・日本近代史
　安田　常雄　本館・研究部・教授・日本現代史
◎原山　浩介　本館・研究部・助教・日本現代史
　リサーチアシスタント
　木村　智哉　千葉大学大学院　社会文化科学研究科

［開発型共同研究］

（１）「縄文時代における人と植物の関係史」2010～2012年度
（研究代表者　工藤　雄一郎）

１．目　的

1980年代以降，低湿地遺跡の発掘調査事例が増加したことから，通常の遺跡では残りにくい植物遺体の検出例やその研究が蓄積されてきている。その結果，この20年で縄文時代の植物利用に関する研究が著しく進展し，植物利用の実態が解明されてきた。特に，縄文時代早期の段階でウルシやアサ・ヒョウタンといった外来植物が存在していたことや，縄文時代前期以降の東日本では，定住的な集落遺跡周辺にクリなどの人為的な生態系が維持され，野生植物を利用するだけでなく，植物の生育環境にも積極的に働きかけた植物利用が行われていたことなどが明らかになってきた。この中には，食料資源として利用したものだけではなく，建築・土木用材，塗料，繊維など，様々な形で利用されていた植物が含まれている。

縄文時代の人々が高度な植物利用技術を有していたことは一般的に理解されつつあるが，それぞれの種の利用が「いつ」，「どのように」始まったのか，また，縄文時代以降の環境変動史とどのように関係していたのか，またどの程度，縄文時代の人々が生態系を改変し，人為的な環境が作られていたのか，これらの諸点が正確には把握されていない。それにも関わらず，これまでの考古学研究では，特定の植物のみに言及して，「栽培」，「栽培植物」，あるいは「縄文農耕」といった点が追及されてきた。

本研究の目的は，縄文時代の人と植物利用の関係史を生態学的に明らかにすることである。そのため，縄文時代の植物利用の実態について，現在明らかになっている遺跡出土資料を再検討し，人が積極的に働きかけたと思われる種の時空間的分布傾向を整理する。検討の主な対象とする植物は，縄文時代の人々と関わりが特に深い，クリ，ウルシ，トチノキ，アサ，ヒョウタン，ササゲ属やダイズ属などのマメ類，ヒエなどである。単に出土資料からその利用方法を検討するだけでなく，現在の植物利用との比較や，それぞれの種の生態的特徴や分布などを検討し，年代測定，木材化石分析，花粉分析，種実遺体の分析，デンプン分析，DNA分析などの最近の研究成果を融合して，縄文時代の植物利用の在り方を体系的に示すことを目的とする。

２．今年度の研究目的

2010年度は，東京都下宅部遺跡の漆関連製品や植物遺体の研究を中心として進める。また，埼玉県石神貝塚遺跡の土壌サンプルの花粉分析や^{14}C年代測定を進め，関東平野における晩期から弥生時代の植生変化と植物利用の変化との関係を検討する。これと並行し，茨城県大子町のウルシ栽培地，栃木県鹿沼市のアサ栽培農家の見学を継続的に行い，縄文時代の植物利用を検討するための比較資料を収集する。縄文時代のアサ

利用を検討するために，栃木県鹿沼市のアサ栽培農家の協力を得て，アサの収穫から繊維を作るまでの工程を，民俗例を参考としながら縄文時代に可能であった方法を検討し，実験考古学的研究を行うための基礎データを収集する。

３．今年度の研究調査

○　研究会

第１回研究会　2010 年４月 24・25 日　於：歴博

１．共同研究の目的と今後の研究計画・予定について（工藤）

２．縄文時代のウルシ利用研究の現状と課題（能城）

３．下宅部遺跡のマメ科炭化種子からみる縄文時代のマメ利用研究の現状と課題（佐々木）

４．花粉からみた縄文時代のクリとトチノキ利用研究の現状と課題（吉川昌）

５．種実遺体からみた縄文時代のクリ利用研究の現状と課題（吉川純）

６．遺跡出土大型植物遺体データベースの意義と問題点（百原）。

第２回研究会：2010 年７月 11・12 日　於：栃木県鹿沼市および栃木県立博物館

研究会初日は鹿沼市でアサ栽培農家を見学し，２日目には栃木県博で３本の研究発表を行った。

１．野州麻の生産用具（篠崎）

２．縄文時代におけるアズキ・ダイズ栽培について（小畑）

３．縄文時代晩期から弥生前期における生業活動の変化について（那須）

第３回研究会：2011 年１月８日（土）　於：歴博

１．繊維・糸・布の利用について - 縄文時代から古代までを中心に - （永嶋）

２．漆液はどのように出てくるのか（鈴木）

３．2010 年度の研究成果と 2011 年度の研究計画（工藤）

○　資料調査

資料調査として，鹿沼市のアサ栽培農家の見学を定期的に行ったほか，栽培方法や繊維について聞き取り調査を行った。また，茨城県大子町のウルシ栽培地の見学，東京都東村山市下宅部遺跡の土器付着植物遺体のデンプン分析および年代測定試料の採取，下宅部遺跡出土漆塗土器の顔料分析のためのサンプリング，下宅部遺跡の復元画制作のための検討会，埼玉県石神貝塚の土壌サンプルの分析などを行った。

４．今年度の研究成果

初年度である平成 22 年度は，3 回の研究会を開催するなかで縄文時代の植物利用に関する研究の整理と問題点の抽出を行い，共同研究員間で共通理解を深めることができた。中でも特に話題となったのは，縄文時代のウルシ利用，クリ利用，トチノキ利用，アサ利用，マメ利用，そして縄文時代晩期から弥生時代への移行期にかけてのイネ科栽培植物の利用などである。遺跡出土資料としてどのようなものが出土しており，また現状でそれぞれの植物の利用がどの程度解明されているのかについて活発に議論を行った。

新たな研究・分析も着実に進めている。一つは，東京都東村山市下宅部遺跡の資料の研究であり，河道の土壌サンプルの花粉分析による縄文時代後晩期の植生復元（吉川）や，土器付着植物遺体のデンプン分析（渋谷），蛍光Ｘ線分析によるウルシの塗膜分析（永嶋・千葉），植物遺体研究に基づいた遺跡復元画制作（工藤・佐々木・能城・千葉）などを進めている。

その他，個別には，鹿児島県東黒土田遺跡から出土した縄文時代最古の貯蔵穴出土堅果類の ^{14}Ｃ年代測定

（工藤）や，岡山県津島岡大遺跡から出土した土器の付着炭化物の ^{14}C年代測定および炭素・窒素安定同位体比の分析（工藤・小畑）を行い，縄文時代の植物利用に関連する重要な資料の年代的位置づけに関する，分析結果が得られた。

５．共同研究員（◎は研究代表者）

小畑　弘己	熊本大学文学部・准教授		
佐々木由香	（株）パレオ・ラボ考古分析支援部統括部長		
渋谷　綾子	広島大学総合博物館・学芸職員	篠崎　茂雄	栃木県立博物館・主任研究員
鈴木　三男	東北大学植物園・教授	千葉　敏朗	東村山ふるさと歴史館・主任学芸員
辻　誠一郎	東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授		
那須　浩郎	総合研究大学院大学学融合推進センター・特別研究員		
能城　修一	森林総合研究所木材特性研究領域チーム長		
百原　　新	千葉大学大学院園芸学研究科・准教授		
吉川　昌伸	古代の森研究舎・代表	吉川　純子	古代の森研究舎・研究員
坂本　　稔	本館・研究部・准教授	永嶋　正春	本館・研究部・准教授
西本　豊弘	本館・研究部・教授	◎工藤雄一郎	本館・研究部・助教

（２）「人の移動とその動態に関する民俗学的研究」2010～2012 年度
（研究代表者　松田　睦彦）

１．目　的

戦後の日本の経済成長は都市部への大量の人口移動を引き起こした。戦後の人の移動の特徴は，出発地点，すなわち故郷との双方向的移動ではなく，故郷へ帰ることを前提としない一方的移動であるとされる。つまり，一つの場からもう一つの場へと移動する場合，二つの場は断絶したものとされ，そこに生きる人間もどちらかの場に属した存在として，研究者の側からも，移動した人々自身の側からも語られるのである。その背景には，一定の場に軸足を置き，そこで生活を送る静的な存在としての人間認識が存在する。こういった認識は民俗学のみならず，これまで「出稼ぎ」や「移住」といった人の移動を研究対象としてきた社会学・経済史学・地理学等においても共通してみられるものである。しかしながら，このような視点は，実際には流動的で持続的な人々の移動を，固定的で一時的なものへと矮小化してしまう危険性を孕んでいる。移動を非日常的な状態として日常としての定住と対置することは，自らの置かれた状況に応じてさまざまな戦略・戦術を駆使する人々の生きる実態そのものをとりこぼすことにもつながりかねないのである。今日，Ｕ・Ｊ・Ｉターンのような団塊の世代の定年後の去就が注目を集めている。これは定年後の彼らの移動が都市への移動で完結したのではなく，現在でも持続していることを示している。つまり，人を静的な存在と捉え，人が一つの場のみとの関係性の中で生きることを前提とした研究では十分に分析することができない現実の存在が明らかになりつつあるのである。

本研究は，地方出身の都市生活者が常に移動の可能性を孕んだ動的な存在であるという前提に立つことで，人々の流動的な日常とその背景にある心意を捉え直すと同時に，都市や故郷という場の持つ意味を問い直すことを目的とする。すなわち，場によって人々を捉えるのではなく，人によって場の意味付けを問い直すの

である。本研究では，移動や場に関する従来の研究の方法論を再検討し，新たな理論的枠組みを設定した上で，人びとの移動の実態に焦点を当てた実証的研究を行なう。その過程では，マイノリティとして特殊な状況を生きてきたアイヌや，独自の移動文化を育んできた沖縄の人々をも視野に入れる。また，隣接諸科学との協業による学際的研究を行なうことで多角的視野の獲得を目指すと同時に，人の移動とその動態に関する視点の重要性を共有したい。

以上のような作業は，人の生活を静的なものとし，人の移動を連続的・継続的に捉えない傾向にあったこれまでの都市論やふるさと論を相対化するものであると同時に，民俗学における場に頼った対象把握に再考を促すものである。

２．今年度の研究目的

本共同研究の問題意識を共有した上で，①民俗学・歴史学・地理学・社会学・経済史学・文化人類学等，様々な分野の研究史と現状を整理して課題を抽出する。従来の研究における場に対する認識や移動論・都市論・ふるさと論・都鄙連続論等が議論となる。また，②共同研究メンバー各自が自らの研究構想について発表を行ない，第２年次以降の研究計画を具体化する。

３．今年度の研究経過

・第１回研究会（５月 29 日・30 日　本館第２会議室）

第１回研究会の開催にあたって，研究代表者より本共同研究の趣旨説明（「本共同研究の趣旨」）を行なった。また，松尾恒一氏からは地元を離れた人びとによって担われる年中行事の事例が示され，出郷者と郷土との具体的なつながりと，そこに立ち現われる関係性が提示された（「西表島　祖内／干立の年中行事と芸能　伝統はだれのものか？―公民館，郷友会，ナイチャー―」）。福間裕爾氏からは，これまでの民俗学における都市と地方との関係性に関する議論から導き出される課題が示された（「『都鄙連続論』の課題」）。さらに，メンバー各自が３年間の研究計画について報告を行なった。

・第２回研究会（10 月 23 日・24 日　本館第２会議室）

門田岳久氏からは民俗学・文化人類学・社会学等における出郷に関わる研究史の整理と文献の紹介が行なわれ，出郷研究における民俗学的課題が，民俗学全体の課題と結び付くことが確認された（「出郷の民族誌／民俗学 ―系譜的理解のために」）。また，原山浩介氏からは特集展示「アメリカに渡った日本人と戦争の時代」の解説および現在の移民研究が抱える問題点の指摘がなされた（「「移民」という問い ―移動者の視点から導き出される課題―」）。さらに，金子淳氏からは都市社会学の発生過程とその中における郊外論の位置づけについての報告があり，本研究における移動のモデル化の必要性が指摘された（「都市論・郊外論における「移動」研究の動向」）。

・第３回研究会（１月８日　葛飾区郷土と天文の博物館）

葛飾区郷土と天文の博物館で開催されていた特別展「現場へようこそ～出稼ぎ・集団就職・雇用と就職の近現代史～」の展示見学し，記念講演会を聴講した。本展示では地方出身者が現在の東京の発展を支えたという前提に立っているが，その背景には，これまでの民俗学が移動する人びとを例外として扱ってきたことに対する疑義が存在する。本展示からは，移動に対する従来の研究姿勢が見直されつつある現状が確認された。

・第４回研究会

３月 28 日～30 日に山口県大島郡周防大島町において研究会および現地調査を行なう予定であったが，東

日本大震災発生により中止された。

4．今年度の研究成果

今年度は主に，①民俗学のみならず，歴史学・地理学・社会学・経済史学・文化人類学等，様々な分野の研究史と現状を整理して課題を抽出すること，そして，②共同研究メンバー各自が自らの研究構想について発表を行ない，第2年次以降の研究計画を具体化する，という二つの目標を掲げた。この二つの目標については一定の成果をあげたと考えている。

まず，①の目標については，第1回研究会では主に民俗学に関して，第2回研究会では文化人類学，社会教育学，社会学等に分野を広げて，幅広く隣接諸分野の状況を把握し，そこから課題を抽出する作業が進められた。その結果，移動を常とし，流動的な日常を生きる人びとを捉える視点や方法論が多くの分野において十分ではないという現状が示された。

また，②の目標については，第1回研究会においてメンバー全員から簡潔に研究計画の発表が行なわれたが，①の作業をふまえての議論の深化とともに，メンバー各自の研究計画は具体性を高めてきている。

5．共同研究員（◎は研究代表者）

岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科
新谷　尚紀　國學院大學文学部
福間　裕爾　福岡市博物館
金子　　淳　静岡大学生涯学習教育センター
田中　藤司　成城大学民俗学研究所
関口　由彦　成城大学文芸学部
室井　康成　東京大学東洋文化研究所
門田　岳久　日本学術振興会
松尾　恒一　本館・研究部・教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授
村木　二郎　本館・研究部・准教授
小池　淳一　本館・研究部・准教授
関沢まゆみ　本館・研究部・准教授
山田　慎也　本館・研究部・准教授
原山　浩介　本館・研究部・助教
◎松田　睦彦　本館・研究部・助教

[人間文化研究機構連携研究]

(１)「人間文化資源」の総合的研究

Ａ 「正倉院文書の高度情報化研究」2010～2014 年度

(研究代表者　仁藤　敦史)

１．目　的

歴博が創設以来，遂行してきた正倉院文書レプリカを基礎に，デジタル化したうえで表裏の接続状況を容易に観察できるシステムを整備する。そのうえで木簡・漆紙文書などとの比較により古代における帳簿・文書論の深化を目指し，さらには中世や近世文書との機能論的比較を行う。

約一万点に及ぶ正倉院文書は日本古代史研究の基本資料であり，文献史学だけなく多様な学問全般にわたる貴重な歴史情報資源の宝庫といえる。これまで豊富な内容を有する正倉院文書の情報は，保存の問題から十分には公開されてこなかった。これを原本保管機関である宮内庁正倉院事務所の協力を得て，デジタル情報として利用できる基盤を整備することは大きな意義を有する。

古代日本の歴史資源開発は，新たな古代史像を描くことを可能とし，まさに国立歴史民俗博物館が目指す「博物館型研究統合」(博物館という形態をもつ大学共同利用機関としての特徴を最大限に活かし，資料の収集・共同研究・展示を有機的に連鎖した研究）にふさわしい研究事業であるといえる。

正倉院文書に対する研究者の閲覧は極めて限られており，モノクロマイクロフィルムの焼き付けを使用することによって研究を進めるのが一般的である。そのため，朱やシミ色の区別などを区別することができず，写経所文書の多くを占める帳簿の復元的な分析を行う場合に大きな障害となってきた。デジタル化によりその障害を克服し，正倉院文書の分析を飛躍的に容易化しようとする試みである。

資料目録を継続的に出版し，奈良時代フルテキストデータベースを作成している東京大学史料編纂所および原本保管機関である宮内庁正倉院事務所との連携が可能である。さらに正倉院文書研究の中心の一つである大阪市立大学の栄原永遠男研究室が中心となった科研データベースとのコラボレーションも可能である。

２．今年度の研究目的

五年間の研究計画はおおよそ以下のように予定しているが，重点的年次進行を示すもので内容は重複していく。

第一年目　レプリカ撮影およびデジタル的接続　三年目まで継続
第二年目　自在閲覧方式の改良(表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど)
第三年目　写経所帳簿群の分析，下総・美濃国戸籍等の現地調査，中間総括シンポ
第四年目　中世・近世文書との比較検討，韓国文字史料との比較
第五年目　復元複製の作成，従来の釈文訂正，総括国際シンポ

第一年目の計画としては，レプリカ撮影およびデジタル的接続を主なる目標とする。

３．研究経過

第１回研究会　８月 23 日　歴博第二会議室
小倉慈司「挨拶・概要説明」

鈴木卓治　プレゼンテーション「歴博のデジタル資料について」

討論「歴博正倉院文書ＤＢと他ＤＢとの連携について」

歴博正倉院文書ＤＢの具体的表示形式について

歴博正倉院文書ＤＢの作成手順について

展示における歴博正倉院文書ＤＢの利用について

帳簿論から見た歴博正倉院文書ＤＢの方向性について

第２回研究会　12 月 15 日　歴博第二会議室

仁藤敦史 報告「研究の現状と方向性」

安達文夫 報告「正倉院文書と画像閲覧—表裏の比較, 仮想的再構成」

後藤　真 報告「ＳＯＭＯＤＡと歴博データベースの連携の可能性について」

討論「正倉院文書デジタル化の現状と方向性」「ＳＯＭＯＤＡとの連携の可能性」

第３回研究会　３月１日　歴博第二会議室

古代史研究とコンピューター活用の実践例

今津勝紀　報告「日本古代史研究とシミュレーションー地震・集落・人口ー」

倉本一宏　報告「古代史料とデジタル化ー『御堂関白記』をめぐってー」

第４回研究会　３月 14 日　歴博第二会議室（震災により中止）

宝庫外流出文書「山辺諸公手実」の調査検討

４．研究成果

本年度は，研究会において歴博データーベースの方向性や連携方法，さらには古代史研究とコンピューター活用の実践例から戸籍の人口予測シミュレーション・地図情報システムの導入などの可能性について議論した。

大阪市立大学作成の正倉院文書データベースが，モノクロマイクロ紙焼きを使用しており，これを歴博作成の複製写真および原本デジタル写真に置き換えることで，飛躍的に帳簿研究の精度が上がる可能性が指摘された。しかしながら，東京大学史料編纂所が作成した文字情報と合わせて，統合的運用をはかるには種々の技術的・著作権的制約を調整しなければならないことも問題点として指摘された。

一方，表裏自在閲覧システムの開発および正集・続修以外の公文複製写真のデジタル化を今年度予算で進め，正倉院文書にかかわる仏教・写経・建築などの論文目録を作成した。本年度購入の宝庫外流出文書「山辺諸公手実」の非破壊的研究の可能性についても検討した。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

栄原永遠男　大阪市立大学大学院・特任教授

佐々田　悠　宮内庁・正倉院事務所・研究員

山下　有美　学識経験者

富田　正弘　富山大学名誉教授

今津　勝紀　岡山大学大学院・社会文化科学研究科・准教授

倉本　一宏　国際日本文化研究センター・教授

山口　英男　東京大学・史料編纂所・教授

◎仁藤　敦史　本館・研究部・教授

飯田　剛彦　宮内庁・正倉院事務所・研究員

後藤　　真　花園大学・文学部・専任講師

高田　智和　国立国語学研究所・准教授

高橋　一樹　本館・研究部・准教授
〇小倉　慈司　本館・研究部・准教授
安達　文夫　本館・研究部・教授
鈴木　卓治　本館・研究部・准教授
［リサーチ･アシスタント］
稲葉　蓉子　早稲田大学大学院博士課程学生

B　「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」2010～2014 年度
（研究代表者　青木　隆浩）

１．目　的

近年，伝統産業の衰退や大量生産・大量廃棄の進行，材料・素材の変化などにより，明治時代から高度経済成長期にかけての生活資料が急速に失われつつある。それに伴い，モノを生産してきた技術や道具の使い方なども，徐々に忘れさられてきている。博物館は本来，そのような生活資料を収集し，それに関する技術や知識を記録保存する使命を担っているが，例えば渋沢敬三のアチック・ミュージアムが工業製品を民具と見なさず，収集の対象から除外したことを典型として，民俗学や歴史学の博物館が近代化・工業化以降の生活資料を積極的に収集したとは言い難い状況にある。

また，近現代の生活資料はガラスや金属，樹脂など長期的な保存に向かないものが多く，全国の博物館でその扱いに苦慮している。だからといって，それらを記録・保存していかなければ，近現代の生活活動に関する博物館展示の手法が制限されてしまう。とくに歴博では第６室の現代展示がオープンし，さらに第４室の民俗展示の新構築を進めていることもあり，モノの状態や民俗学，近現代史学の研究蓄積に合わせた，生活資料の収集方針や整理・保存の方法をあらためて検討する必要に迫られている。

２．研究の意義

近現代の生活資料の収集・整理，保存は，まだ全国的にノウハウが蓄積されていない。それは主に素材の面から修復，保存が困難なためであるが，近現代の研究・展示を進展させていくためには，その可能性と限界をどこかで示す必要がある。そこで本研究は，近現代資料の状態調査を通じて，それらの収集から保存に至るまでの提案をいくつか示していきたい。

その際，本研究ではモノ資料を，産業史との関わりに重点をおくことに特徴をもつ。近代化・工場化，大量生産の進展といった産業の歴史は，新商品の開発や素材・材料，部品の転換など，いわばモノの歴史でもある。大量生産・大量流通された近現代のモノ資料には，時代を遡るほど産地や製造年の不明なものが多いが，産業史と関連させることで，それを使用した地域や時代的背景を合わせて調査することができる。また，商品開発や素材・材料・部品の歴史が整理されれば，地域の生活史をモノの面からより具体的に復元し，かつそれらの情報をモノ資料の収集方針や保存計画にも有効活用できると思われる。

３．研究計画

まず，種類や材質が多様な館蔵の「金沢地方近代生活資料」（Ｈ－686）や「石川県白山麓山村生活用具」（Ｆ－12），「飛騨路の民具」（大塚集古資料館旧蔵コレクション，Ｆ－169），「婚礼衣裳・婚礼用具及び生活用具」（Ｆ－148）などを対象として，生活資料の分類・整理の方法を検討しつつ，素材分析を行う。

次に，分類・整理した生活資料を商品開発の歴史や素材の変化などと照らし合わせ，産業史・技術史の中に位置づけるため，商品カタログや取扱説明書，社史などを収集し，それらを用いて「商品・部品データベース」を作成する。商品カタログや取扱説明書などで明らかにできなかった主要な生活資料については，該当する業界団体や個別の企業への訪問によって情報をいただく。

以上の研究成果は，歴博の他，元興寺文化財研究所での研究会で報告し，情報を共有化する。

４．今年度の研究経過

第１回研究会　平成 22 年９月 10 日（金）・11 日（土）　場所：歴博

内容：コンディション調査の内容確認，データベース作成に関する打ち合わせ，研究会の趣旨説明（青木），金山正子・角南聡一郎「館蔵資料コンディション調査の概要」，青木隆浩「試行版コンディション調査の現況」

第２回研究会　平成 23 年２月 11 日（金）・12 日（土）　場所：元興寺文化財研究所

内容：日高真吾「民博における館蔵資料の状態調査について」，青木隆浩「金沢地方近代生活資料の来歴調査」，青木隆浩「連携研究版モノ資料状態調査の試行結果」，斉藤努「金属分析の実施方法と途中経過」，青木隆浩・斉藤努「有害物質を含んだ館蔵資料に対する考え方」，青木隆浩「『商品・部品データベース』の作成経過報告」，民博の常設展示見学

調査

平成 22 年８月５日（木）・６日（金）　金沢地方近代生活資料の状態調査に関する打ち合わせ

平成 22 年 10 月 25 日（月）　金沢地方近代生活資料の来歴調査

平成 22 年 11 月 11 日（木）・17 日（水）　南山大学人類学博物館収蔵の生活資料調査

平成 23 年１月 28 日（金）　大阪くらしの今昔館の企画展示「昭和レトロ家電－増田健一コレクション展－」の見学

連携研究版モノ資料状態調査の試行　平成 22 年８月～　金沢地方近代生活資料（Ｈ－686）のうち 250 点

金属分析　金沢地方近代生活資料（Ｈ－686）を対象に毎週木曜日に実施。使用装置は据置型蛍光Ｘ線分析装置。

５．今年度の研究成果

本研究会では，誰にでも簡単にできて，かつ個人差の少ない状態調査票とそのマニュアルづくりを目指している。そこで，連携研究版のモノ資料状態調査票とマニュアルを作成し，およそ 250 点の資料に対して調査を試行した。その結果を青木が２月 11 日の研究会で発表し，併せて日高真吾氏より民博の状態調査の方法を教えていただくことにより，連携研究版の問題点を浮き彫りにした。いくつかの問題点を改善した上でもう１度調査を試行し，より現実的な調査票とマニュアルを作成する予定である。

また，金属素材の用途や歴史的な変化を明らかにするため，およそ 200 点の蛍光Ｘ線分析を行い，その結果を２月 11 日の研究会で報告した。案外銅の使用率が高かったことや，化学的に無理な合金が発見されるなど，興味深い結果が得られた。その一方で，分析手段の制約により，アルミニウムが検出されなかったという問題が残った。

さらに，近現代資料特有の問題として，有害物質の取り扱い方法が話題となった。きっかけとなったのは，カネミ油症事件で問題となったＰＣＢが古い家電に使用されている可能性が出てきたためであるが，それ以

外の六価クロムやカドミウム，水銀なども合わせて資料の安全性を確保するための検討をおこなった。なお，不安視されたＰＣＢは結果的に検出されなかった。

「商品・部品データベース」を作成については，研究期間の初年度であるため，素材となるカタログや取扱説明書，社史の収集に尽力した。すでに複数のカタログを用いてデータベースの項目をおおよそ確定しており，現在はデータ入力の効率化を検討している。

その他，金沢地方近代生活資料の来歴調査を現地でおこなったことにより，旧蔵者の職業や家族関係，当時の経営状況，展示の様子などが少しずつわかってきた。しかし，肝心の資料の入手先については，依然としてよくわかっていないため，今後も追跡調査をおこなう予定である。

６．研究組織（◎は研究代表者）

松村　　敏　神奈川大学経済学部
金山　正子　元興寺文化財研究所
笹原　亮二　国立民族学博物館
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授
永嶋　正春　本館研究部・准教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
本康　宏史　石川県立歴史博物館
角南聡一郎　元興寺文化財研究所
日高　真吾　国立民族学博物館
斉藤　　努　本館研究部・教授
小池　淳一　本館研究部・准教授
原山　浩介　本館研究部・助教

C　「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」2010～2014年
（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

映画のオリジナルフィルムには，撮影，編集，現像など，その作品の制作に関わる情報が豊かに備わっている。そのため，映画を歴史研究の資料として活かしていくためには，写っている内容についてだけではなく，フィルムという形ある物それ自体についての資料批判的な研究を同時におこなうことが必要不可欠である。本研究では，歴博がコピーを所蔵している昭和初期の記録映画（ニール・ゴードン・マンローによるアイヌの記録映画および宮本馨太郎による民俗学的な記録映画。以下「マンローフィルム」「宮本フィルム」とする）を対象に，オリジナルフィルムを所蔵する機関と連携してオリジナルフィルムの資料批判的研究と内容調査を実施し，得られたプロファイル情報を映像と連動させることを通して，映画を歴史・民俗などの文化研究の資料として保存・活用するために必要な手続きを構築する。

２．今年度の研究目的

宮本フィルムの劣化状況等をふまえ，適切なテレシネ・デジタル化の方針を検討し，それに基づいてデジタル化を実施する。また，フィルムの製造元，編集方法など，フィルムそのものから得られる情報を取得する。さらに，写っている内容や，撮影者・撮影年・撮影機材など，文献や伝承で得られる情報の整理をおこなう。

３．今年度の研究経過

第１回研究会

日時：９月24日　14:00～16:00

場所：株式会社東京光音（渋谷区初台）

内容：宮本フィルムのテレシネ方法の検討

第２回研究会

日時：２月 22 日　18:00～21:00

場所：宮本記念財団

内容：宮本記念財団主催の研究会に参加し，渋沢史料館所蔵の映画資料の概要報告，宮本フィルムのビデオ頒布をしているヴィジュアルフォークロアが宮本フィルムにどのような作業をおこなってきたかについての概要報告をきいた。

４．今年度の研究成果

宮本フィルムの観察により，劣化状況，フィルム製造メーカー，カットつなぎの方法など，１本ごとに 20 数項目のデータを取得した。さらに，全 90 本のうち，劣化の程度から，68 本についてテレシネ（部分テレシネを含む）が可能と判断し，パーフォレーションとエッジを含まない画角でのテレシネをおこない（宮本記念財団の経費），そのＨＤＣＡＭコピーを作成した。アチック関係フィルムと関連が深い 14 本については，写真等との比較研究への展開をふまえ，パーフォレーション・エッジを可能な限り含む画角でのテレシネをおこなった。また，映像のデータベース化の準備として，詳細なショットリストを作成し，概ね作業が完了した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

板倉　史明　東京国立近代美術館フィルムセンター

加藤　　克　北海道大学・植物園・博物館

原田　健一　新潟大学

宮本　瑞夫　宮本記念財団

小瀬戸恵美　本館・研究部・准教授

鈴木　卓治　本館・研究部・准教授

丸山　泰明　本館・研究部・機関研究員

◎内田　順子　本館研究部・准教授

（２）日本関連在外資料調査研究　2010～2015 年度

１．【研究目的】

欧米における日本文化研究の比重が低下するなか，欧米・アジア諸国に現存する日本関連人間文化研究資料に関しては，専門研究者の不在・不足や個人所蔵であるなどの理由から，資料所在情報が把握できていないところも多く，また詳細調査が実施されていないためその全体像や資料的価値が確定していないものも多数存在する。これらについて，文化人類学，民俗学，歴史学，国文学，国語学，美術史学，アジア学など人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請を行うことによって，国際共同研究に基づく調査・研究を実施し，放置・劣化・散逸から資料群をまもって資料の保存・活用に道を開くととともに，資料の詳細な情報をはじめとする調査成果・研究成果に関わる情報を広く提供することで，国内外の日本文化研究の発展・深化に貢献することを目的とする。

２.【研究対象】

日本関連在外資料は，世界各所に点在しているが，資料が作成された時代背景や海外に持ち出された事情等も様々であるため，本事業では比較的所在のはっきりしている，次の資料群を調査研究対象とする。

１）シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19 世紀）に日本で収集された在外資料（A）

２）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料（B）

３.【研究方法】

人間文化研究機構（以下「機構」という）に帰属する大学共同利用機関及び大学附置研究所などで個別に行われてきた在外資料に関する情報蒐集・調査・研究について，機構として計画的・組織的に研究体制を構築し，21 世紀にふさわしい新たな国際共同研究を実施する。

さらに国際的な研究連携を密にした長期展望のもとで，さまざまな学術分野の国内外日本研究者による「在外資料」の総合的な共同研究を展開し，広義の日本文化研究と高度な教育に益する文化資源学的研究領域の創生を試み，海外における日本資料を早急に文化資源化及び体系化しながら国内外の研究者等が有効活用できるような情報を積極的に公開・発信する。

また，海外の貴重な在外資料等の整理・保管等がなされていない問題を解消するため，派遣・招聘を含めた国際研究ネットワークの構築を図り在外資料の維持に対処する。

４.【研究成果の公開】

日本関連在外資料調査研究の研究活動の結果として，以下のような全体的成果のとりまとめを行い研究成果の公開を実施する。

１．目録及びデータベースを作成しホームページ等での公開

２．国際シンポジウムによる調査研究成果の公開

３．書籍，論文集等の刊行による公開

４．巡回展示（海外での展示を含む）による公開

５.【研究組織・研究計画】

日本関連在外資料調査研究は，機構が設置する日本関連在外資料調査研究委員会が，企画・調整等を行い事業の総合的推進を図る。

調査研究は，Ａ・Ｂ２つの研究対象について総括機関（国立歴史民俗博物館及び国際日本文化研究センター）を中心として，実施機関及び連携実施機関が協力して次の調査研究を実施する。

なお，２つの研究対象について各々専門部会（各研究課題の代表者で組織する）Ａ及びＢを設け個別具体的な調査研究の実施計画等を審議する。また，２つの専門部会の調整組織として，各研究課題の総括責任者を中心として総括部会を設置し，日本関連在外資料調査研究の全体調整を図る。

本館では，Ａの研究総括および５つのチームを，Ｂではチームの一つを担当する。

A　シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19 世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究　2010～2015 年度

（研究代表者　久留島　浩）

1．研究概要

本調査研究は，19 世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち，まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを，可能な限り総合的に調査研究する。その際，少なくとも資料に関する詳細なデータを，できる限り多く共有することで，同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19 世紀のコレクションのうち，下記に示すようにいくつかのモデルケースを設定し，国内外の研究者コミュニティが，詳細な「記録」というかたちであれ，「実物」のままであれ，未来にわたって「共有」するために，長期にわたって継続でき，かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案，実行する。同時に，すでに目録が整備されているもののうち，相互利用に関する合意ができる場合は，協定など利用規程を定めたうえで「共用」化を進める。さらに，資料群の現状（状態）を把握することで，今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指したい。

具体的な調査研究は，以下のとおり。

(a)　**シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究**（詳細調査）

1）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究
　　＝19 世紀前半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

2）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究（詳細調査）
　　＝19 世紀後半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

(b) **海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究**

（概要調査が中心だが，一部拠点を決めて詳細調査を行う）

1）ライデンを中心とする，具体的な資料（書籍・地図・絵画など）にそくした詳細調査・目録化とそれをふまえた研究

2）北米・ヨーロッパにおける日本関連資料の概要調査とその目録化（いくつかの拠点を設定して詳細調査を実施し，その目録も作成する）

以上の研究を実施するために，次のような研究チームをたてることにした。

(a) ①**【ブロンホフ・フィッセルチーム】　代表：松井洋子（東京大学史料編纂所教授）**

シーボルト父子コレクションの復元のための前提作業として，ブロンホフ・フィッセルのコレクションについての詳細目録（日本語版，できれば英語版も）を作成する（ライデン国立民族学博物館などと機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【平成 22～24 年度】

②**【ミュンヘンチーム】　代表：日高　薫（国立歴史民俗博物館教授）**

ミュンヘン国立民族学博物館と共同で画像つき詳細目録を作成することを課題とする。この目録を作成するとともに，シーボルトの最後の「日本展示」を復元することで，あらためてシーボルト・コレクションの性格およびそれが表現しようとした「日本」とはどのようなものだったのかについて，できれば「復元展示」（シーボルトが構想した日本展示）を実施したうえで，議論する機会を

持ちたい（同館と機構との間で協定を結ぶ必要がある）。【調査目録作成は平成 22～26 年度，展示は平成 25 年度を予定】

③【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】　代表：宮坂正英（長崎純心大学教授）

ドイツ・シュルヒテルンのブランデンシュタイン家に収蔵されているシーボルトファミリーアーカイヴズについて，とくにアレクサンダーおよびハインリッヒ関係資料のうち未撮影のものについてデジタル撮影し，詳細目録を作成する。そのうえで，シーボルト（父）関係の未撮影資料があれば撮影する（協定が必要である）。なお，ボーフム大学にもシーボルト関係資料が収蔵されており，ブランデンシュタイン家文書と関連づけることができれば，両者の資料的価値も高まり，研究資源の共有化が進むことになる。この点では，この資料をデジタル撮影した宮崎克則氏および同大学との協力も不可欠である。（所蔵者・所蔵機関との十分な協議が不可欠である）【ブランデンシュタイン家の調査は平成 22～24 年度，ボーフム大学は平成 24，25 年度】

(b)　④【ロシア・北欧チーム】　代表：近藤雅樹（国立民族学博物館教授）

⑤【ライデンＡ（書籍）チーム 】　代表：鈴木　淳（国文学研究資料館教授）

【ライデンＢ（地図・絵画など）チーム】 代表：青山宏夫（国立歴史民俗博物館教授）

ライデン大学・ライデン国立民族学博物館などオランダにおける日本コレクションのうちのまとまった資料群について，画像つきの詳細な目録を作成する（日本関連書籍，地図，死絵などが具体的な候補としてあがっている（上記①のような協定を結ぶ必要がある）【平成 22～25 年度】。

⑥【イェールチーム】　代表：近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

⑦【海外所在調査（概要調査）チーム】　代表：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）

現地の研究者・学芸員の助力を得ることができ，所蔵機関の了解が得られること（協定を結ぶこと）が前提ではあるが，北米・イギリス・フランス・スイス・ドイツにおける日本コレクションの基礎的所在情報を収集したうえで，何か所かの概要調査を実施し，概要目録を作成する。これについては，２年目に獲得目標を厳選する。

※北米では，モース・コレクションの現状調査を平成 22 年度に行い，今後の計画をたてるほか，アメリカではオークランド博物館【～平成 27 年度】，カナダでは文明博・ロイヤルオンタリオ博【～平成 24 年度】，イギリスではウェールズ国立博物館【～平成 25 年度】で博物館調査を始める。

⑧【異文化交流・情報共有化推進チーム】　代表：安達文夫（国立歴史民俗博物館教授）

調査地をとくに限定しないが，異文化間の交流という観点から在外日本関連資料の持つ意味を検討すること，および今回の研究の目玉でもある「情報共有方法」について検討することも不可欠なので，別途，チームを設ける。予算は，情報共有化のためのものを計上するが，メンバーが調査地を選択してそれぞれのチームの調査に参加するときの旅費は，それぞれのチームが負担することを原則とする。

※ロシア・北欧チーム，ライデンＡ（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

２．６年間の研究目的

(a) シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究

①現在の所在が分散しているブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションに関する「総合的な目録」を作成すること。

②シーボルト・コレクションの自然史関係資料群と人文文化関係史料群との相互活用を進めること（調査・研究・公開のうえで，自然史系研究者と人文系研究者とが相互交流，共同すること）。

2）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究

①シーボルト（父）が二度目の来日（1859～1862）で収集したと考えられるコレクションの総合目録を作成すること

②シーボルトの二人の息子（アレクサンダーとハインリッヒ）自身が収集した日本関連資料，彼らが残した書簡・記録類，および彼らが収集に関わった日本関連コレクションについての所在とその概要を把握すること

(b) 海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究

この６年間は，おそらく「概要調査」にとどまるものと思われるが，第一に，いくつかの資料所蔵機関（博物館・大学）で，まとまった「もの資料」を中心に，いくつかのデジタル画像つき詳細目録を作成することで，「もの」資料にそくした具体的な研究を進めるとともに，今後の調査研究上の課題を明確にしたい。具体的には，ライデンに伝来するブロンホフ・フィッセル・シーボルト収集の書籍や地図などを中心にしながら，少なくとも，海外の収蔵機関でどのような調査を行い，どのように記録し，目録化するかについてのモデルをつくることにしたい。同時に，資料収蔵機関・収蔵者および海外の日本研究者にとっても「共用」できるようにしたい。

３．今年度の研究目的（課題）

〔総括班チーム〕

・国際シンポジウムの開催

〔国立歴史民俗博物館チーム〕

・ブロンホフ資料目録の翻刻・翻訳作業を実施（３分の１粗原稿作成）

・ブランデンシュタイン家文書のデジタル化作業（長崎市撮影分は終了）

・アレクサンダーによるバイエルン王国への寄贈目録の翻刻，翻訳

〔国文学研究資料館チーム〕

・ライデン大学図書館会議室で，ライデン大学所蔵のシーボルト関係資料に関するワークショップを開催。

・シーボルト等が蒐集した日本書籍について書誌的データを集積。

・シーボルト等が蒐集した日本書籍に関する調査研究の成果として『国文研ニューズ』第22号に「オランダ国ライデン伝来ブロンホフ，フィッセル，シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」（執筆者：鈴木淳）を発表

〔国立民族学博物館チーム〕

・国際シンポジウムの開催

４．今年度の研究経過

【総括チームおよび事務局（歴博に設置）】

・第４回シーボルト会議「シーボルトの調査を支えた人々－ヴュルガーとホフマン－」（於ヴュルツブルグ・シーボルト記念館）の共催・報告。

久留島浩「A Study of Materials Collected in Japan in the 19th Century」

宮坂正英「The Brandenstein Archival Material」

・日独交流150周年記念事業「根付シンポジウム」（10/22～24　於：ドイツ文化会館／OAGドイツ東洋文化研究協会主催）で報告

マティ・フォラー「シーボルトの根付とライデン国立民族学博物館のコレクション」

・日独交流150周年記念事業国際シンポジウム（1/24～28　於：ドイツ歴史博物館・ツォイクハウス映画館）で報告　　1/26久留島浩・原山浩介「日本関連在外資料の調査研究について」

・国際シンポジウム「いまなぜシーボルト・コレクションに注目するか？－シーボルト・コレクションの復元的研究の現状と課題」（３/５　於：国立歴史民俗博物館）を開催。

・ニューズレターの発信

【ブロンホフ・フィッセルチーム】

①研究会　　準備のための研究会　歴博および東大史料編纂所で開催（８月）

「ブロンホフ・フィッセル・シーボルト父子コレクションの現状と調査の進め方について」

②国際シンポ　ライデン民博マティ氏が日本における日独150周年記念国際シンポでこのチームを代表して報告（ブロンホフ・フィッセルが収集した値付け）。国内調査もあわせて実施（10月）

③ブロンホフ・フィッセル関係資料総合目録作成作業（翻刻・翻訳）

④シーボルト関係資料目録の日本語翻訳作業

⑤フィッセル・ブロンホフ目録などのデジタル撮影（目録作成用）

【ミュンヘンチーム】

①研究会　ミュンヘン民博調査の成果と課題についての研究会を歴博で開催（12月）

②海外資料調査

・ミュンヘン民博調査（漆器）　（10月）

・ミュンヘン民博調査（民俗関係資料）　（２月）

③ミュンヘン民博との調査研究協力に関する覚書交換のため訪問（12月）

【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】

①海外資料調査　ブランデンシュタイン家調査（文書）（10月）

【ロシア・北欧チーム】

【ライデンＡ（書籍）チーム】

【ライデンＢ（絵図・絵画など）チーム】

①海外資料調査　ライデン民博（地図）調査（９月）

【イェールチーム】

【海外所在調査（概要調査）チーム】

①海外資料調査

・ピーボディ・エセックス博物館調査（モース・コレクションの現状査）および北米の博物館（カリフォルニアのオークランド博物館を想定）での概要調査（＝モデルケース）を現地の研究者と共同で実施（２月）

・カナダの文明博およびロイヤルオンタリオ博物館予備調査（２月）

※ロシア・北欧チーム，ライデンＡ（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

５．全期間の研究成果

初年度ということもあり，チームごとに調査機関との調整および概要把握が中心となった。当プロジェクトが目標に掲げている「画像付き資料目録」の作成と公開および調査方針等については，今後も関係機関との十分な協議が必要であるが，おおむね好意的な感触を得ている。３月の第１回国際シンポジウムでは，今後５年間の調査先，調査方法，成果公開方法について議論することができた。とくに，ライデン民博のブロンホフやフィッセルのコレクションの目録作成については，具体的なイメージを共有することができた。「画像付き資料目録」の構成については，とくに積極的な意見が交わされた。来年度以降は調査が本格化することから，早急に目録形式を整える必要がある。また，ミュンヘン民博のシーボルト・コレクションについては，シーボルト自身の手書き原稿の精緻な分析結果が示され，彼の民族学博物館構想（方針）についても，石山氏らの先行研究と比較しつつ新たな議論をすることができた。

６．共同研究員（歴博が責任を負っているチームの構成員に限る）

総括班：久留島　浩　本館・研究部・教授　　日高　　薫　本館・研究部・教授
　　　　青山　宏夫　本館・研究部・教授　　大久保純一　本館・研究部・教授
　　　　安達　文夫　本館・研究部・教授　　松井　洋子　東京大学史料編纂所
　　　　宮坂　正英　長崎純心大学人文学部　　鈴木　　淳　国文学研究資料館★
　　　　近藤　成一　東京大学史料編纂所★　　近藤　雅樹　国立民族学博物館★

澤田　和人　本館・研究部・准教授　　青木　隆浩　本館・研究部・准教授
斉藤　　努　本館・研究部・教授　　山田　慎也　本館・研究部・准教授
岩淵　令治　本館・研究部・准教授　　勝田　　徹　本館・事業課・専門員
角南聡一郎　元興寺文化財研究所　　大場　秀章　東京大学総合研究博物館
海江田義弘　長崎県庁　　鳴海　邦匡　甲南大学文学部
原田　博二　長崎純心大学　　小林　淳一　江戸東京博物館
宮崎　克則　西南学院大学国際文化学部　　田賀井篤平　東京大学総合研究博物館
マルクス・リュッターマン　国際日本文化研究センター　　原田　　泰　千葉工業大学工学部
フレデリックス・クレインス　国際日本文化研究センター　　笹原　亮二　国立民族学博物館
ヨーゼフ・クライナー　法政大学大学院人文科学研究科　　保谷　　徹　東京大学史料編纂所
マティ・フォラー　ライデン国立民族学博物館　　山田　仁史　東北大学大学院文学研究科
ヤン・シュミット　ボーフム大学　　三木　美裕　博物館展示コーディネーター
邦子・フォラー　アムステルダム大学ホイジンガ文化歴史研究所　　小山　周子　東京都庁
後藤　恵菜　本館・研究部・研究支援推進員

※歴博メンバー以外（★チーム）の研究員は省略した

B　近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究
2010～2015 年度
（研究代表者　鈴木　貞美）

●「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」
2010～2015 年度
（研究代表者　原山　浩介）

１．　目　的

本研究では，北米・ハワイ，ならびにスペイン語圏のラテンアメリカに存在する日系移民関係資料をめぐり，資料状況ならびに資料を保有する諸機関・コミュニティ・個人の現状を調査する。その際，単なる資料調査に終わらず，資料を支えている日系人コミュニティの現状等にも焦点を当て，地域調査との連動を図るものとする。

本調査は，資料調査と地域調査を連動させて実施することに特徴がある。これは，次の二つの理由による。

第一に，一般に近現代史資料の保存は，それらが映し出す歴史に対する人びとの関心に支えられる形で成立しており，関心の希薄化は資料の廃棄や散逸につながる。日系移民関係資料についても同様で，とりわけ移民第一世代の高齢化は，資料保存の危機を招来する。本研究では，資料状況とともに，資料の保存を支えるバックグラウンドの調査を並行して実施する。

第二に，移民関係資料に関わるバックデータは，もちろん博物館等で整理されているケースもあるが，多くの場合，資料を維持する個人や地域社会，日系人団体などで共有されている口頭伝承に依拠せざるを得ない。したがって，資料調査と地域調査を連動させることで，資料の持つ意味を十全に把握する必要があると考えられる。

以上の点から，本調査を，資料－地域の双方を視野に収める形で進めていき，資料とそれを取り巻く周辺状況をトータルに把握することを目指すこととする。

２．今年度の研究目的・計画

シアトルおよびその近郊における資料調査に着手する。具体的には，ベインブリッジヒストリカルソサエティを中心にした資料調査を実施すると共に，ＤＥＮＳＨＯの担当者と，デジタル化済みの資料に扱いに関する検討を行う。またワシントン大学や公立図書館などの資料所蔵状況，ならびに日系アメリカ人コミュニティとのコンタクトを取り，関係形成を図る。なお，シアトルでは，全米日系人博物館が強制収容に関わる聞き取り調査を開始しているとの情報があり，この動きの詳細を把握しつつ，具体的な連携の可能性を模索する。

ペルーについては，大使館等と協議の上，予備調査を実施する。

また，本年度に，目録作成のための基本方針を研究メンバーの間で協議し，その方法を策定する。

３．今年度の研究経過

中米調査（１月 11 日～２月 19 日）

メキシコ・ペルー・アルゼンチンの三カ国において，日系移民関係資料の残存状況に関する調査を実施した。主に日系人団体と個人コレクターを対象とし，本格調査を前にした予備調査を行った。

ドイツ歴史博物館「日独交流 150 周年」シンポジウムにおける報告（1月 24 日～26 日）

同シンポジウムにおいて，本研究プロジェクトの概要に関する報告を行うとともに，北米への移民と戦争の時代をめぐって，日独で共同研究を実施することにより，世界大戦をめぐる理解と時代像を豊富化することの可能性をめぐって議論を行った。

4．今年度の研究成果

中米において予備調査を実施し，次年度以降の本格調査の地ならしができた。この成果を受けて，当面は日本国内における資料複製の公開状況を検討しつつ，本格調査実施の手順を策定することになる。

また，アーカイブ形成のためのフォーマットを策定した。

さらに，ドイツにおける報告を経て，戦後の日本からドイツへの移民，ならびにドイツおよび日本から北米への移民の比較という新たな研究課題を析出することができた。これを，本プロジェクトのなかでどのように実施するかを検討していく必要がある。

なお，３月下旬に計画していたシアトルにおける調査は，震災の影響で出国が叶わず，本年度の調査としては残念ながら中止せざるを得なかった。

総じて，本研究の調査期間にわたってどのような枠組みで調査を継続するかが明確になったが，震災の影響もあり，現地関係者との折衝が不十分な部分も残っており，次年度に課題を残すこととなった。

5．研究組織

中田　英樹　京都大学大学院文学研究科　グローバルＣＯＥプロジェクト研究員
三木　美裕　カナダ文明博物館
崎山　政毅　立命館大学
村川　庸子　敬愛大学
原山　浩介　国立歴史民俗博物館
山田　慎也　国立歴史民俗博物館
玉井　哲雄　国立歴史民俗博物館

(3) 活動提案
「中近世の都市を描く絵画と地誌に関する研究─京都と江戸─」
2010～2012 年度
（研究代表者　小島　道裕）

1．目　的

中世～近世の都市社会を知る上で，具体的な都市を題材に描かれ記述された絵画や地誌はきわめて重要な素材である。しかし，その利用はまだ十分な形では行われておらず，機構に所蔵されている資源を中心に，そこに何が描かれているのかを明らかにし，共有化する作業を行いたい。そして，それを活用し，特に連携展示の形で公開することを目的とする。

対象とする都市は，資料が豊富な京都と江戸を中心とし，洛中洛外図屏風をはじめとする絵画類と，「名所図会」などの地誌類，および相互の連関を扱う。

２．今年度の研究計画

①国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館における研究会の開催

　双方が所蔵する資料の熟覧を兼ねて，それぞれの機関に集合して研究会を開催する。併せて，連携展示についての内容を検討する。

②資料のデジタルデータ化およびデータベース化とその検討

　双方の所蔵資料を中心に，デジタル化した素材を作成しつつ，その活用方法を検討する。

③他機関と連携しての資料の検討

　具体的には，当面，重要な関連資料があり研究実績を挙げている「たばこと塩の博物館」の研究者に参加を求めており，東京国立博物館等にも協力していただく。

３．今年度の研究経過

　研究会は，国文研，歴博での資料研究と研究発表を中心とする研究会の他，たばこと塩の博物館，東京国立博物館の資料閲覧もふくめて，計８回開催し，充実した資料研究を行うことができた。また，予定している連携展示の計画についても併せて協議を行った。

４．今年度の研究成果

　資料研究としては，山東京伝「四季交加（しきのゆきかい）」，鍬形蕙斎「職人尽絵巻」，「洛中洛外図屏風歴博Ｅ本」など，展示を予定している多くの資料について，内容の読み解きを中心に理解を深めることができた。

　作業としては，「洛中洛外図屏風歴博Ｃ本」「京都名所図屏風」などのデジタルデータ化や，名所図会類の校訂などを進めることができた。今後，展示および図録，ホームページなどで，公開・活用を図る予定である。

５．研究組織

　大高　洋司　国文学研究資料館・教授
　中村　康夫　国文学研究資料館・教授
　井田　太郎　国文学研究資料館・助教
　岩崎　均史　たばこと塩の博物館・主席学芸員
　小島　道裕　本館・研究部・教授
　大久保純一　本館・研究部・教授
　岩淵　令治　本館・研究部・准教授